
魔法少女リリカルなのは ~ 黄昏の庭園 ~

空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～黄昏の庭園～

【Nコード】

N3083P

【作者名】

空

【あらすじ】

少年は幸せだった。

例え、血の繋がりがただ一人の兄だけだとしても……………。
ただ、少年の幸せは終わりを迎えた。

ただ一人、好きだった兄の手によって……………。

全てを失った少年は、一人の少女と出会う。

己と同じ目をした少女と……………。

魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

基本シリーズ展開を予定しています。

零章第一話「暗闇に咲く一輪の笑顔」(前書き)

始める前に一言

初めての小説なので、色々と至らない所もありますがどうぞ
お願いします。

何か不備がありましたらご指摘頂けると助かります。

最後に一言

この小説では、やたらとデバイスが親しげですが、それもこの小説
らしさと受け取って貰えると助かります。

上手く書けたかは分かりませんが、どうかまず一話、宜しく願
いします。

零章第一話「暗闇に咲く一輪の笑顔」

守りたい、そう願った。

俺の力はその為にあると思っていた。

だけど、それは違った。

「お前では、何も守る事など出来ない」

(黙れ、黙れ黙れ！)

「お前は抗った。

道具である癖に。造られた物の癖に」

(違う！俺は道具何かじゃない！

俺は、俺は……………)

「だが、もうお前達に用はない。

この最後の帝さえいれば、あそこへ行ける」

(っ、ソフィア！)

「もう、お前達は用済みだ。

消えろ、兄と共に。

帝の名と共に」

「っ、ダオスー」

「消えろ、黒帝。

我が友、ダーク」

そして、黒き帝と共に世界は終わりを迎えた。

世界はまた、新たなる時を刻み始める。

一人の少年の、数奇なる運命と共に。

新暦61年

第97管理外世界地球

現地名称、

日本国海鳴市

そのはずれにある資材置き場

暗闇に包まれたその場所で、十数人の男達が会議を行っていた。

「へへっ、これで俺達も大金持ちだな」

一人の男がそう言った。

辺りが暗いので、顔を見ることは出来ないが、暗い中でも欲望に満ちた笑みを浮かべているのが伺い知れる。

「本番はこれからだ！
気を抜くんじゃない！」

別の男が先程の男に渴を入れる。

恐らくはリーダーなのだろう。

渴を入れられた男は大人しく頷いた。

「リーダー、全員準備が出来ました！」

今度は大柄の男が、先程湯を入れた男、リーダーに声を掛けた。

男達のリーダーはその言葉に頷き、

その場に居る全員を一瞥してから演説を始める。

「俺達は今、最大のチャンスを手握っている」

「だが、それは逆に言うと最大のピンチでもある」

「今の俺達は危険と隣り合わせにいる」

リーダーはそこで一旦演説を止める。

男達の唾を呑む音が、静まり帰った空間に響いた。

リーダーはそれを待っていたとばかりに演説を再開した。

「今、俺達が考えている事は全員同じだろう。どうやってこのチャンスをもにするかだ！」

リーダーはそこで一旦区切る。

男達はそれに呼応するように頷く。

「ならばどうすれば良いか？」

「……………答えは単純だ」

そこでリーダーは瞼を閉じる。

そして、何かを決断したかの様に目を見開いた。

「俺達なら出来る！そう信じろ！」

その言葉が放たれたと同時に男達は歓声を挙げた。まるで、成功を確信したかのように。

男達が歓声を挙げた時、その背後で何かが動く。

そこに居たのは、まだ幼齡ともとれる金髪の少女だった。しかし、手錠をされて口を塞がれた状態だ。

（この人達、一体誰なの？何でこんなことするの？
パパ、ママ、怖いよ。助けて！）

少女は瞳に涙を浮かべながら、最愛の両親が助けに来てくれる事を願った。

しかし、その願いは違う形で成就する事となる。
そう、誰も予想だにしなかった劇的な出会いによって。

『天動流無手 一ノ太刀 神騎・爆』

そんな声が辺りに響いた。

そして次の瞬間、

「ぐあぁっ!？」

そんな男の絶叫が再び静寂に包まれた空間に響き渡った。

「くそつ。誰だテメエは！」

次に、また別の男の声が少女の耳に届いた。
少女が目を開く。

すると、そこには少女と同じ年位の少年が佇んでいた。

右手に日本刀を構えながら。

時間は少し戻る。

ここは男達が占拠していた資材置き場。

その屋根に取り付けられていた天窓付近。

そこに、ただ一人の少年が身の丈よりも長い日本刀を手で掴み、星の煌めく夜空を見上げていた。

すると、少年が徐に口を開く。

「なあ村雨。俺、まだ五歳だぜ？」

どう考えてもおおかしくないか？」

そこには少年が一人しか居ないはずなのだが、少年は親しい者に話し掛ける様にそう言った。

すると、少年が手に持っていた日本刀、その柄部分に取り付けられている蒼白の宝石が点滅し始めた。

『そうですね。普通なら有り得ないでしょうね。』

五歳児に人質を救出させるなんて。……………普通ならですが』

そんな声が宝石から響いてきた。

少年はその言葉を聞き、宝石、村雨を睨み付けながら、

「まるで、俺が普通じゃないみたいない言い方だな？」

と、疑問をぶつける。

すると、

『では聞きますが、マスターは自分の事が普通だとお思いなのですか？』

マスターと呼ばれた少年の疑問を、村雨は更に疑問符で返す。

少年は言葉を詰まらせる。

そんな少年を、村雨が更に畳み掛ける。

『言葉を詰まらせるという事は自覚があるということです。まあ、逆に自覚がない方が大変ですけどね』

そんな村雨の真摯な言葉に、少年はあえなく撃沈した。

暫く沈黙が続く。

聴て、長い沈黙に耐えきれなかったのか、村雨の方から少年を慰める様に言葉を発した。

『まあ、それでも普通の倫理観からすれば絶対に有り得ないでしょうけどね』

その言葉を聞き、少年は幾分か気が楽になる。

「ありがとな」

『いえ、私はあなたをサポートする為に居るのですから』

「まあ、今更普通じゃないなんて言われても、気にするような事じゃないよな」

少年は苦笑し、これからの作戦を立て始めた。

それから約三分弱で作戦を立て、突入しようとした時、村雨が声を掛けた。

『只今、吹雪様から通信が入りました』

少年は出鼻を挫かれ、少々ご立腹の様子だったが、吹雪という名前を聞いた途端、目を輝かせ村雨を見た。

「兄貴か？村雨、兄貴は一体何て？」

突然の様に態度を一変させた少年に、村雨は内心微笑ましいと感じながらも己の主人の問いに答える。

『はい、吹雪様がもうすぐこちらに合流されるようです。なので、突入は少し待って欲しいとのことですよ』

己の相棒の言葉を聞き、少年は更に目を輝かせる。

村雨は己の微笑ましい主人の喜ぶ顔が見れて嬉しいと感じるが、その直後に発せられた言葉に耳を疑う事となる。

「そうか、ならこんな所で油売っている暇はないな！」

へっ？村雨がまず感じたのは、そんな間抜けな事だった。

そして次に、自分の主人の破天荒ぶりに着いていけずに、堪らず疑問を投げ掛けた。

『ちよ、ちよつと待って下さい！一体どういうことですか？』

二度も出鼻を挫かれた事により、少年は明確にイライラしている様だったが、今はそんなことを気にしている場合ではない。

『マスター！』

「あーっもう、分かったよ。理由を言えばいいんだろ！」

『はい』

少年少し躊躇っている様子だったが、覚悟を決めたのか、理由について話し始めた。

「理由なんて単純な事だよ。

俺はただ単に兄貴に良いところ見せたかった。

ただそれだけだ」

マスターは御兄さんっ子だ。それはもう、たった一人しかも肉親が居ないということから来ている。そして、そんな主人の切実な願いを叶えたい、それが今村雨が感じている事である。

『分かりました。……………ですが、一つ約束して下さい。絶対に無茶な事はしないと』

少年はその言葉を聞き、微笑みを浮かべ、

「心力、……………開放！」

そう呟いた。

すると、段々少年の体がブレ始める。

少年はそれを肌で感じる様に目を閉じ、直ぐにまた目を開けた。

そこにはもう、先程の様な、まだあどけなさが残る少年はおらず、ただ異様な殺気を放つ少年が佇んでいた。

「行くぞ、村雨！」

少年は相棒である村雨にそう叫び、天窓から飛び降りた。

『天動流無手 一ノ太刀 神騎・爆』

そんな声が暗闇に包まれていた空間に木霊した。

「ぐあぁっ!？」

一人の男が突然悲鳴を上げる。

その場にいた全員が一斉にそちらを見ると、そこには少年が佇んで

いた。

右手に日本刀を持ち、凄まじいまでの殺気を放ちながら。

「くそつ。誰だテメエは！」

と、二メートルはあろう男が叫んだ。

すると、少年は男達の方を向き、

「大人しく投降しろ、逃亡は許さない。投降しない場合は、痛い目
をみてもらう」

と、簡潔に警告した。

すると、一人の男が少年の殺気に押されて一歩後退りした。

それに一人の男が、

「何びびってたんだ！相手はたった一人の餓鬼だぞ。全員で掛ければ
大丈夫だ！」

と、一喝した。

男達は互いに頷き合い、一斉に少年に突撃を開始した。

《お前達に……………》

そんな声に突撃を始めた男達は足を止め、周りを見渡す。

しかし、誰も居る気配はしない。

一人の男が「誰だ！」と叫ぶと、

《出来るんならな！》

そんな声が空間を包み込んだ。

その時、一人の男が叫びながら少年に突撃した。

「うあああっ！」

それを合図と言わんばかりに男達が一斉に突撃を開始した。

『天動流無手 一ノ太刀』

そんな声が響き渡ると同時に、少年の脚がブレはじめた。そして、更にブレが強くなる。

『神騎』

その言葉が響いた瞬間、少年の姿が、

―消えた―。

男達は驚き、辺りを見渡したが、少年の姿はない。いったい少年は何処に消えたのだろうか？

男達がそんなことを思っていると、異変は直ぐに訪れた。

「ぐうあああ！」

一人の男がそう叫ぶ事によって。

男達は一斉にそちらの方を向く。すると、そこにはただ一人で倒れる男しか居なかった。

「がはっ！」

そして、また一人男が倒れる。

そして、

「ぐあっ！」

男達のリーダーが悲鳴を挙げた。

男達はそのリーダーの方を向き、遂にその少年を目で捉えた。しかし、その場には男達のリーダーが居たはずである。

だが、そこには少年がただ一人ただ佇んでいるだけである。では、リーダーは何処へ行ったのか？

その答えは直ぐにやって来た。

- ドン -

そんな音が、静まり帰った空間に響き渡った。

男達が一斉にその方向を向く。

すると、そこには自分達のリーダーが倒れていた。数十メートル離れた位置に。

男達は己の目を疑った。今の状況からしてみると、リーダーを吹き飛ばしたのは、他でもないあの少年ということになる。

しかし、まだ幼齢とも取れる程のあの華奢な体にそんな力があるわけが無い。

いや、それ以前に人間に成人男性を何十メートルも吹き飛ばす力などある筈もない。

しかし、その状況が全てを物語っていた。

そして全てを語った男達には、最早恐怖しかない。

しかし、そんな男達を尻目に少年の姿が又もや消えた。

次々と屈強な男達が倒れていく。

そして、最後の一人になった男が漸く我に返り、

「ま、待ってくれ。どうか、止まってくれ!」

「もう遅い」

どうにか少年に制止を求めるが、少年は拳の一撃により、男を昏倒させた。

近付いてくる。

謎の少年が。

一歩、また一歩、
どんどん近くなる。

突然現れ、男達を全員倒した少年が。

こっちにこないで!

お願いだから!

誰か!

【助けて!】

「なあ村雨、何か怖がられてない？」

「当然でしょう。」

右手に日本刀を持ちながら、天窓から突然現れて、屈強な男達を素手で昏倒させたんですから」

「だよなあ、普通怖がるよなあ。」

見られない様にすれば良かったかなあ」

少年は深く溜め息を吐き、己の軽率さと、助けた少女に怖がられるという複雑な感情を抱えながら、少女に向かって歩く。

一步一步進むに連れて、どんどん足が重たくなっていく、

少年はそんなことを感じながら歩き続ける。

そして、後十歩という距離まで近寄った時に、事件は起こった。

「こっちに来ないで！何処かに行つて！」

その言葉により、明確に少女に拒絶された少年は、狼狽えた様に顔をひくつかせながら三步後退りした。

（不味いな。このままじゃ任務が。

折角兄貴に良いところ見せようと思ったのに、任務失敗なんかしたら話にならないぞ！）

少年は、明らかに焦りを見せ始める。

そんな主の事が見てられなくなったのか、村雨が少年に助言をした。

「マスター、今は狼狽える時ではありません！」

彼女は貴方を明らかに怖がっています。

ですから今は貴方が彼女にとって、恐い存在では無いことを証明する時です！」

少年はその助言に深く頷き、一度深呼吸をして心を落ち着かせながら、再び少女に向かって歩き出した。

「来ないで。お願いだから。」

それ以上近くに来ないで。

【こないでー！】

少女は心の底から叫んだ。

目に涙を溜めながら。

すると、その叫びが届いたのか、少年は歩みを止めた。

少女はその事に喜びつつも、とても不快なものを感じた。

暗闇で良く見えないが、少年がはつきりと笑っているのが分かったからである。

（何で笑ってるの？

何が可笑しいの？

この人は一体何がしたいの？）

少女は今にも溢れ落ちそうな涙を堪えながら、そんなことを思った。そんなことを少女が思っていると、少年は予想外の事を口にした。

「なんだ、ただの泣き虫じゃん。」

強気なお嬢様だって聞いてたから、一体どんな奴かと思ってたら、

………なんか裏切られた感じだな」

その時、少女は自分の中の何かに火が灯ったのを感じた。

「っと、此処か。

んじゃ、璃空は何処だ？」

そう言いながら、一人の少年が資材置き場の屋根上に降り立った。そして、周りを見渡して待つて貰っている弟を探す。だが、弟の姿は何処にも見当たらない。すると、少年の懐から電子音の様な声が響いた。

「どうやら、先に中に入ったようですな。

天窓が開いています」

その言葉を聞き、頭を抱える少年だったが、気を取り直して懐から黒色で菱形の宝石を取り出し、命令を下した。

「はあ、あいつはまた。……まあ、過ぎたことだな。

タイム、中の様子を探ってくれるか？」

タイムと呼ばれた宝石は、己の主の気苦労を心配するが、主にとっては自分の弟の暴走を見るのも一つの楽しみであることを知っているので、あまり気にしないことにした。

『スキヤン完了。』

『どうやら、戦闘はもう終了しているようですな』

タイムのその言葉を聞き、少年はほっと一息つき、中への侵入を敢行しようとするが、そんな少年をタイムが制止した。

「ん、どうしたんだタイム？」

その少年の疑問を聞き、怪しく点滅し始めるタイムを見て、少年は「またか」と心の中で溜め息を吐き、タイムに制止の理由を聞いてみる事にした。

『どうやら今、中で面白そうな事が起こっているようですね。隠れて見ていきましょう！』

このデバイスは何故こんな性格なのだろうか、いつも思わされるが、前の所有者が所有者な為に仕方が無いのだろう。

そんなことを考えていると、タイムの催促の声を上げ始めたので、侵入することにした。

「だいたいあんた、一体何者なのよ？」

「俺はお前を助けるよう依頼を受けた、だから助けに来ただけだ！」

「誰が一体どんな理由であんたみたいな子供に依頼するのよ！」

「なっ、お前みたいな泣き虫に子供なんて言われたくねえよ！」

「何よ！」

「何だよ！」

と、先程まで少年に恐怖を抱いていた少女は、少年の一言により恐怖というものを一切忘れていた。

（扱い安いな。

まあ、かなり五月蠅くなっただけど、任務を失敗する訳にはいかないからな）

少年は内心そんなことを思った。

少女はまだ何かを言っているが、少年はもう良いだろうと、少女を宥める事にした。

「あー、もう分かった。俺が言い過ぎた。だからもう機嫌を直してくれ。」

此方にも急ぐ理由があるんだ」

「べ、別に。此方も折角助けて来てくれたのに、怖がったりして、

……その、……ごめん！」

何だ、案外素直じゃんなどと少年が思っていると、

「あんだ、名前は？」

そう、少女が聞いた。

少年は少し考え込んだ末、

「別にもう会うことは無いだろうから、別に良いだろう？」

そう返事を返した。

その言葉を聞き、少女は少し俯く。

そんな少女の様子を、少年は少し不思議に思う。
少しの間、沈黙が流れる。

「だったら……、」

先に沈黙を破ったのは、少女の方だった。

「だったら、もう一度会えるとしたら？」

そんな少女の言葉を聞き、少年は少し考えるが、やがて答えが出たのか、

「その時なら教えてやっても良いかな」

と、返事をした。

返って来た返事に、少女は顔を持ち上げ、少年を見る。

少年はその少女の目を見て、大きく狼狽えた。

「な、何で泣いてるんだよ！

ひょっとして何処か痛いのか？」

その言葉を聞いた少女は、少年のあまりの天然ぶりに呆れるが、あまり気にせずに続ける。

「私もその時まで名前を教えない。

だから……、また会えるよね？」

そんな少女の純粹すぎる想いを聞き、少年は少し後ろめたい思いに駆られる。

そして、少女とまたいつか会えれば、そう思った。

だから、また会える様にと少女にあるものを贈った。

「これは？」

少女が疑問の声を上げながら、贈られた石を眺める。

「それは巡石っていつてな、それを贈った人とは、いつかまた会えるって言われているんだ」

へえ、と少女が感嘆の声を上げる。

そして、

(誰か来たみたいだな?)

少年は、誰かが向かって来ていることに気が付いた。

「お嬢様、お嬢様！」

という声が、そちらの方向から聞こえてくる。

その声を聞き、少女もその方向を向き、

「クラウドス、こっちこっち！」

と、声の主、クラウドスを呼んだ。

すると少年は、それとは反対方向に歩き始めた。

「もう……………、行っちゃうの？」

それに気付いた少女が、別れを惜しむように少年に聞く。

少年はゆっくりと少女の方に振り返り、

「また会うときまでには、その泣き虫直しとけよ!」

そう、笑顔で返した。

その笑顔は月光に当てられ、暗闇の中でも屈託が無く透き通っているようで。

それはまるで、一輪の花のようだった。

少女がその笑顔に見とれていると、少年は踵を返し、再び歩き始めた。

少女も今度は何も言わず、ただ少年の背中を見つめ続けた。もう泣かない、そう心に誓って。

一人の少年が、少年と少女、二人のやり取りを遠くから眺めていた。

(璃空ももうこんなに成長したんだなあ)

少年はそう思いながら、璃空と呼ばれた少年の幼い頃を思い出していた。

すると、その少年に通信が入る。

少年は慌てて思考を中断し、通信を開く。

すると、そこにいたのは、先程少女と一緒にいた少年だった。

「り、璃空か？どうしたんだ？」

少年は、通信相手の少年、立華璃空に若干動揺しながらも問い掛けた。

すると、璃空は疑問符を浮かながら、

『あ、ああ。此方は任務終了したからその連絡だよ。……………何かあったの？』

と、任務終了の報告と同時にその動揺に疑問の声を上げる。

「な、何でもない。任務、良く頑張ったな」

少年は若干動揺しつつも白を切りつつ、璃空に激励を贈った。

『絶対何かあったよね、兄貴？』

璃空は少年、立華吹雪に更に問い掛けるも、「何でもない」の一点張りで疑問が晴れることは無く、若干の沈黙が流れた。

臆て話を逸らすように、吹雪が口を開いた。

「ああそつだ！悪いな璃空、急な用事が入ったからそつちに行くのは無理になった。……………ごめんな」

その言葉を聞き、璃空は少し暗い顔になるが、直ぐに表情を戻し、

『そつか。……………そつちに助けとかは要らない？』

と、問い掛ける。

すると、吹雪は困った様な顔をして、璃空の問いに答えた。

「悪い、璃空。」

此方は助けは要らないから、先に帰っててくれないか？」

璃空は吹雪のその答えに俯き、『そうか。』とだけ返して、通信が終了した。

吹雪は何か考える様に額に指を当てる。

そして、考えていた答えに辿り着いたのか、溜め息を一つ吐く。

そんな主の行動の一部始終を見ていたタイムは、主が一体何を考えていたのか推測するが答えは出ないので、質問してみる事にした。

『どうしたんですか、吹雪？』

吹雪は、そんなタイムの質問にどう答えたら良いか考えているらしく、一時の沈黙が流れる。

さすがのタイムも、主の思考の深さに慌てたのか止めに入ろうとする。

『わ、分かりました。余り言いたく無いことなら、無理せずに仰らなくても構いませんよ』

「別に、言いたく無いって事もないんだよ。

ただ、俺も兄バカだなって思っただけだ」

吹雪がまた一つ溜め息を吐いた。

この人また、と内心思うタイムだったが、フォーローに回ることにし

た。

『別に気にする事はありません。
璃空は貴方のたった一人の肉親なんですから』

吹雪はそんなフォローに微笑み返し、帰ろうと踵を返すが、突如として入った念話に足を止めた。

《ダンテ、話があるんだが、此方に来てくれないか？》

吹雪は、念話の相手の言葉に眉をひそめつつ、念話を返した。

《その名前で呼ぶなって言ったよな？

……………で、何の用だ、ラクス？》

《お前もその名前で呼んでんだろが！

……………念話じゃ話せない事だ》

念話で話せない事？

それならかなり限定されてくる。

奴等のことか。

と、考えながら了解の意を伝え、念話を終了した。

『吹雪、奴等のことですか？』

タイムは、そんな吹雪の念話を聞き、心配したように聞いた。

「ああ、たぶんな。

心配するな。俺なら大丈夫だよ」

この人はいつも「心配するな」と言っが、いつもこの事になると自分の事は見えなくなる。

タイムはそう思いながら、了解とだけ伝え、それ以上は何も話さなくなつた。

吹雪は、そんなタイムに一言だけ、「ごめんな」と謝り、駆け出した。

二人の少年はまだ、自分のこの先にある運命を知らない。
痛く、苦しい未来を。

今の海鳴は、まだ雪のちらつく寒い十二月である。
二人の少年の運命が動き出すのは、もう少し先の話。

零章第一話「暗闇に咲く一輪の笑顔」（後書き）

上手く書けたかは分かりませんが、如何だったでしょうか？

作中の少女については、色々思い当たる所があるかもしれませんが、ここでは控えさせて頂きます。

そして最後になりましたが、無駄に長いと感じられましたらすみません。

犯人達にも台詞を持たせようと思ったたら、この様になりました。

これからもこの様な事があると思いますが、その時もどうか宜しく願います。

零章第二話「幸せの終わり」（前書き）

分量は前回よりも少なくなっています。作者的には今後が続いていく話だと思っっているので、どうか宜しく願います。

劇中では時間が少し跳びます。

それに、村雨が感情を爆発させました。作者的にも、デバイスがこんなことになるのかと疑問に思いましたが、話上これが最適だと思っただけこうなりました。

原作キャラは、今回はまだ出ませんが、次回から登場します。そのせいでオリジナルのキャラが多数登場します。説明文も少々ありますが、零章第二話、宜しく願います。

零章第二話「幸せの終わり」

「ずっと、尊敬してたのに、それなのに、何で！」

少年、立華璃空は叫んだ。

喉が枯れるほど、心の底から叫んだ。

「今のお前では分からない。……………お前程度では、何も見えはしない」

凍りついた世界に、少年、立華吹雪は己の弟にそう言い放った。

「何で、何が理由でこんなことをするんだよ！」

答えるよ、兄貴！」

悲しみと絶望に包まれた空間に璃空の絶叫が木霊する。

その声は、辛い現実を否定するかのよう。

「お前は助けてやる。……………生き延びるが良い。惨めに醜く。そして、強くなれ」

その言葉は、璃空の存在を否定するかのよう。

そして、自分の存在を、立華吹雪を否定するかのよう。

「俺の名は……………」

世界が揺れる。

全てを否定された璃空は瞼を閉じ、耳を塞ぐ。

己の兄、立華吹雪の存在、自分の全てだった者が否定されそう。

「俺の名は、」

「ただ、言葉は止まない。

寧ろどんどん強くなる。

身体中の全神経が拒絶する。

「堪らなく痛い。」

余りの不快感に璃空は嘔吐する。

「目眩がする。」

「儼か鉄の様に重たい。

消え入りそうな意識の中で璃空は吹雪を見た。

吹雪はそんな璃空に背を向け、

「ダンテ、……………俺の名は、ダンテだ！」

「全てを否定した。

「今までの自分も、何もかも。」

「その時、璃空は意識を手放した。

「立華吹雪という思い出と共に。」

「んっ、此処は？」

窓から射し込める陽光に璃空は目を覚ました。

「全部、夢、だったのか？」

その部屋は和式で、隅に小さな机があるだけの簡素な造りだった。部屋に射し込める陽光は何時もと変わらない。

そんな風に思っていると、何だか全てが夢だった様に思えてくる。

ふと、璃空は自分の手を見た。

そこには、何やら刃物で切られた様な傷痕が出来ていた。その傷を見て、璃空は眉をひそめる。

全て現実だった。その傷がそう物語っていたからである。

「兄貴、一体どうして！」

少年が悲痛に顔を歪めていると、誰かが近付いて来る気配に璃空は息を呑む。

恐らくは璃空を此処に連れてきた人物なのだろうが、初めて見るこの場所に、璃空はかなり戸惑い、警戒していた。

どンドン気配が強くなる。

それに応じて足音も聞こえてくる。

璃空は、自分の心臓の音が強くなるのを感じながら、来るべき人物きたを待つ。

だが、一向に誰も入ってこない。

(何なんだ?)

そんなことを璃空が思っているど、

「ぐはっ！」

という叫びが聞こえてきた。

「一体何なんだよ？」

そう呟いた瞬間、

ー ドカ ー

勢い良く扉が開かれたと思うと、いきなり誰かが飛び込んできた。否、飛ばされてきた。

そんな突然の出来事に、璃空は一瞬戸惑うが、飛ばされてきた少年を見て、更に頭を抱えた。

そして、この時程この二人と縁を切りたいと思った事はない、そう思いながら飛ばされてきた人物に話しかけた。

「龍二、お前何やってるんだ？」

それに、……………龍耶りゅうや、お前も場所を考えろ！」

璃空がそう言うと、扉の奥からもう一人少年が苦笑いをしながら入ってきた。

「いじめん、璃空。

……………っし」

そう弁明する黒髪黒瞳の少年、藤堂龍耶。
五十年に一度の逸材と言われた天才剣士である。

「本当、時と場所を考えろよな！」

そう言いながら起き上がる茶髪黒瞳の少年、藤堂龍一。
弟である龍耶程、剣の才能には恵まれなかったが、努力だけで弟に
勝る程強くなった努力の天才。

「兄貴が変な事言うからだろ！」

「変なこと？」と龍耶の言葉に疑問符を浮かべる璃空だったが、そ
れに気が付いたのか龍耶が説明を始めた。

「ああ、ごめん璃空。実はね……………」

「あー、待て龍耶。言わないでくれ。頼む！」

と、懇願する龍一だったが、龍耶は軽く無視して続けた。

「兄貴がね、璃空がどうせへこんでるからって……………」

「あー、あー、それ以上言うな！」

「五月蠅い！」

「ぐはっ!？」

龍耶の説明を必死に妨害する龍一だったが、とうとう目障りになっ
たのか、龍耶が龍一の鳩尾に一発拳を入れ、沈黙させた。

「まったく、自分が言い始めた事だろう？」

龍一は普段はこんな風だが、実戦になると龍耶よりも強い。

全くの七不思議である。

璃空はその光景を見ながら、そんなことを思っていた。

「ごめん、璃空。続けるね。……実は兄貴が、璃空がへこんでるだろうからって、冷やかしてやるうって言い出したんだよ」

「そ、それはだな。ただそっちの方が璃空には良いと思ったからで……」

「兄貴こそ、時と場所をを考えてよ！」

「うぐっ！」

言い訳を始めた龍二に、龍耶が鋭いつっこみを入れる。痛い所を突かれた龍二はそのまま何も言えなくなった。

「まあ、良いよ龍耶。龍二も俺の事を思ってくれたんだし」

見かねた璃空が龍二に助け船を出す。

だが、龍二にとってそれはただの泥舟でしかなかった。

「そ、そうか？……ほら見る龍耶、璃空は嬉しいって言ってるぞ！」

その龍二の言葉に璃空と龍耶は深く溜め息を吐く。

別に、璃空は嬉しいとは一言も言っていないのである。

龍二の余りの空振りに、沈黙が流れる。

聴て、状況に着いていけなくなった龍二が、沈黙の理由を聞いた。

「……………何だよこの沈黙は！」

そんな龍二の言動に、二人はまた一つ溜め息を吐き、龍耶が説明を始めた。

「別に、璃空は嬉しいとは一言も言っていないよ。ただ単に良かったって言っただけ」

「何が違うんだよ！」

「捉え方の違いだよ」

「ぐうう」

龍二がその微妙な違いに呻いていると、突然の来訪者が現れた。気配も全く無く、突然に。

「それぐらいにしまえ、龍耶」

そこにいたのは、白髪赤瞳の二十代位に見える男だった。

「相談役。……………貴方が居るってことは、此处は御皇邸ですか？」

御皇玄耶^{みおつげんや}

今では璃空達の所属する秘密組織、『黒い牙』の相談役と言われているが、昔は黒い牙の頭領であり、璃空の師匠である御劔永理と死闘を繰り広げた人物でもある。^{みつるぎえいり}

御皇玄耶、実際には人ではなく神の末裔らしいのだが、その真偽は不明。

本人曰く、百五十歳らしい。

「璃空、久しぶりだね。七ヶ月ぶりかな？」

「そうですね。あの時はお世話になりました」

「いや、僕の方こそ御劔の自慢の弟子が見られたから良かったよ」

「そうか、それは良かった」

と、突然玄耶の背後から声が聞こえた。

すると、そこには六十代位の一人白髪黒瞳の男性、御劔永理が立っていた。

「璃空、今回の事は本当にすまなかった。私がもう少し早く駆け付けていたら吹雪は……………」

御劔永理

劔神の異名を持つ、文字通り世界一の劔士。

現在では、黒い牙の頭領として前線を退いてはいるが、その実力は御皇玄耶に勝った程である。

玄耶が黒い牙に所属しているのは、ただ一人己に勝った男の組織だったから理由である。

劔術の流派は、天動流四聖八陣劔派と呼ばれ、特殊な瞳力を持つ者でしか、その真価を発揮する事は出来ない。

因みに、璃空は天動流四聖八陣劔派なのだが、厳密には少し違う。

補足だが、吹雪、龍二、龍耶の三人共天動流劔派の劔士なのだが、三人は特殊な瞳力を持たない為、天動流劔派の派生形である天動流幻龍劔派の劔士である。

「いえ、……………兄貴の事は俺が一番良く知ってた。なのにこんな事になってしまった。」

貴方が悔やむことじゃないですよ」

そう言い、璃空は俯き、悲痛の涙を流し始めた。吹雪は璃空にとつて、ただ一人残った肉親である。そんな吹雪に裏切られたのだ、それは仕方の無いことである。

その場にいる全員が、そんな璃空を想い、無言になる。静まり帰った空間には、ただただ涙の落ちる音しか響かなくなった。

それから数分後、璃空以外の全員が部屋を出ていき、部屋には璃空ただ一人となった。

「風が冷たいな」

ふと、璃空がそんなことを呟いた。

『マスター？』

そんな璃空の異変に、傍に置いてあった璃空のデバイス、村雨が疑問の声を挙げる。

「村雨、俺は……………どうしたら良いと思っ？」

『……………』

そんな璃空の言葉に、村雨は答えが出ない。

否、答えられない。

今の璃空は、それ程脆かった。今の璃空なら、何色にも染まる。自分の言葉によって、最愛の主が壊れてしまうのではないか？、そ

う思ったから。

「俺は……………どうしたら！」

璃空の悲痛の叫びが、静まり帰った空間に木霊する。

「俺は、俺は……………、もう苦しいのは、嫌なんだ」

その声は、余りに痛く、悲しく、苦しかった。

村雨は何も言えない。己の主の言わんとしている事が分かってしまったから。

己の主が苦しみから逃げようとしているのが分かったから。

そんな主を止める事が出来なかった。

主を想うが故に、主を苦痛から救いたい、そう思ってしまったから。

見たくない、そう村雨は思った。

このまま己の機能を停止させたい。

そう思ってしまった。

だけど、それは逃げることと同じだ。

今、自分が逃げてしまったら、己の主は確実に壊れてしまう。

逃げたい。

だけど逃げられない。

村雨はそんな地獄で気が狂ってしまうのではないかと思ってしまう。

そして、いつその事狂えてしまえたらどれ程楽かと思った。

だが、人工知能である村雨には、そんな事は出来ない。

これ程までに自分の存在を、無力さを呪った事は無い、そう思った。

二人は互いに無言のまま、静まり帰った部屋に佇む。

その空間には、もう少年の悲痛な泣き声と、妖しく光る村雨の点滅

光しか無くなった。

場所は変わり、此処はある異世界。

まだ管理局の認知しない世界である。

そこに立華吹雪、否、ダンテが一人佇み空を見上げていた。そんなダンテに、背後から声を掛ける者がいた。

「どうした、ダンテ。こんな曇り空なんか見上げて」

ダンテはそれに振り向かずには答える。

「何でもない。ただそうしたいと思っただけだ」

ダンテのその答えに、声を掛けた少年、ラクスは訝しげな表情になりながら続ける。

「まあ、良いか。………だけど、俺達の計画に支障がきたさない程度にしてくれよ？」

「ああ、分かっている」

ダンテはそう簡単に答え、

「何処まで進んでいる？」

と、疑問を口にした。それにラクスは少し考える仕草を取る。

（計画の事を伝えに来たんだろう？）

何を考える必要がある)

そうダンテが思いながら待っていると、ラクスは答えがでたのか、仕草を止めてダンテに向き直った。

「ああ、待たせて悪かったな。……………タイプゼロはもう少し掛かりそうだ。

それと、奴等の施設を見付けたから行くぞ?」

ダンテは無言のまま頷き、そのまま転移魔法の準備に取り掛かった。

「ダンテ、分かっているとは思いますが……………」
「ああ、分かっている。早く行くぞ」

そのダンテの言葉に満足したのか、ラクスも頷き、二人は転移した。

場所が戻り、此処は御皇邸

そこで今、璃空は真剣に悩んでいた。

先程の事ではなく、別の事だ。

何故、そこまで悩んでいるのか?

それは数十分前に遡る。

璃空がこれからの事に悲観していた時である。

部屋の中は璃空の泣き声と、村雨の点滅光によって異様な雰囲気を漂わせていた。

そんな時である。

突然その空気を壊す事が起きた。

今まで閉ざされていた扉が突然開かれたのである。

最初は全く気にしていなかった璃空も、入ってきた人物、御劔永理の唐突な言葉に耳を疑う事となる。

「璃空、私の養子にならないか？」

部屋の空気が突如として一変する。

この人は一体何を言ったのか？、璃空はそんな事で頭が一杯になる。完全に思考が混乱している。

そんな中で、やっと言葉を見付けた璃空が聞き返した。

「って、えっと、今何と仰いました？」

かなり失礼な事を聞いていると自覚しながらも、聞き返さずにはいられなかった。

「むっ、まあ、突然だったから動揺するのも仕方ないだろうね。

……………璃空、私の養子にならないか？」

「って、はあぁー!？」

時間は戻る。

「あの人は何時もこう、唐突に……………」

璃空は今、正に真剣に悩んでいた。
今まで自分が何に悩んでいたかも忘れる程に。

「答えは何時でも良いなんて言ってたけど、……………やっぱり待たせるのは失礼だよなあ……………」

そんな相手の事を考える程に、真剣に悩んでいた。

「なあ、村雨。どう答えたら良いと思う？」

璃空は余りにも答えが出ないので、村雨に助言を頼む事にした。

『そうですね。私は良いと思いますよ。御剣さんもマスターの事を考えて言っただけの事だと思いますから』

そんな相棒の言葉に璃空は少し一考し、聴て大きく頷いた。

「分かった。村雨、ありがとな。
俺、受ける事にするよ」

その時の笑顔は、屈託の無い、とても無邪気な笑顔だった。

村雨はこんな笑顔が何時までも続いて欲しい。
ただそれだけを願った。

零章第二話「幸せの終わり」（後書き）

かなり突然の始まりで作者も悩んだのですが、こんな風になりました。

次回からも少し時間が跳びます。

この先、璃空はどうなるのか。

次回でかなり話が進むと思いますが、どうか宜しくお願いします。

最後に一言

やはり、話とは書き初めが大変ですね。

それをかなり痛感しています。

ですが、これからも上手く書けるように精進していきますので、宜しくお願いします。

村雨に関しては、ノーコメントでお願いします。

外伝(汗)「空と雪と龍達のお話」

璃空

「どつも、立華璃空です」

吹雪

「その兄の吹雪だ」

龍二

「俺は、もう良いか」

龍耶

「ちよつ、ちよつと待った兄貴。それ、一体どうして!.....どつも、龍二の弟の藤堂龍耶です」

龍二

「んっ?そんなの決まってるだろ。
俺の事はもう皆さん知ってるからに決まってる!」

璃空

「あほ、お前は何でこんな事してるのか分かってるのか?」

龍二

「んっど?.....どうしてだ?」

龍耶

「はぁ、兄貴それはちよつと.....」

龍一

「何！俺だけ除け者か？……………許さん作者！」

吹雪

「あほ言っでないでさっさと名前を言え！」

ー ドゴ ー

龍一

「ぐはっ！？……………」

璃空

「ちょ、兄貴やり過ぎだ！気絶させてどうする」

吹雪

「この程度で気絶するようならまだまだだな」

龍耶

「あーあ、……………まあ良いよね、璃空。どうせ兄貴だし」

璃空

「龍耶、お前だけはまともによってくれ。じゃないと話が進まん」

龍耶

「まあ、そつだね。……………仕方がないから起こそつか？」

璃空

「ああ、そうしてくれると助かる」

吹雪

「むっ、別に良いんじゃないか？」

こいつの名前を聞きたい者などいないだろう」

璃空

「兄貴がそれを言うな！それに何でこんな事をしてるのか分かってるのか、って言ってるんだ！」

吹雪

「そうだな。……………仕方がない。俺がやった事だ、俺が起こそう」

璃空

「止める！あんたがやると更に悪くなる！」

龍耶

「璃空、起こすよ！」

璃空

「あ、ああ。頼……………」

ーバキー

龍一

「ギャー！？」

璃空

「……………つて、はぁー！？」

吹雪

「良くやった、龍耶。流石は俺の弟子だ！」

龍耶

「うん、ありがと！吹雪」

龍二

「……………」

璃空

「……………さあ気を取り直して、始めました。第一回……………」

龍二

「はっ！つて、待て待て待て待てちょっと待て！」

龍耶

「五月蠅い！」

ー ドゴ ー

龍二

「ぐはぁ！？」

吹雪

「良いパンチだ！成長したな、龍耶」

龍耶

「うん、そりゃ伊達に毎日兄貴を沈黙させてないからね！」

璃空

（それが全部龍二が悪いにしても、流石に同情するぞ……………）

龍二

「……………」

龍耶

「んなつ。もう復活した!？」

龍二

「くくく、甘いぞ甘過ぎるぞ龍耶。

俺も伊達に毎日お前のパンチ喰らってる訳じゃないからな!」

璃空

（それは余り威張れた事じゃないぞ、龍二。はっきり言おう、憐れだ）

吹雪

「仕方がない。見ている龍耶。俺が殺る!」

龍耶

「はい。御師匠様。」

龍二

「上等だ!掛かって来やがれ。打倒吹雪!」

璃空

「ちょっと待て!?!お前等は一体何をしてるんだ!」

吹雪

「行くぞ、龍二!」

龍二

「請けて立つ!」

吹雪ノ龍一

『心力、……………開放!』

龍耶

「その時、二人を包む様に嵐が巻き起こった!」

璃空

(……………もう駄目だ。こいつ等とじゃ、先に進めない。)

龍耶

「おっと!二人が動き始めた!」

吹雪ノ龍一

『天動流、』

『神龍ノ覇龍ノ型、』

『一ノ太刀、』

『恒臥!』

ー 爆 ー

『暫くお待ちください』

璃空

《お前等三人供、この回がどんなものか分かってるのか?》

璃空

《くそつ。こんなにしゃがって。三人でさっさと直せ!》

璃空

『大変長らくお待たせしました！では、気を取り直して！』

龍一

「因みに、璃空……………」

璃空

「五月蠅い！誰が喋って良いと言った！」

龍一

「は、はい！」

龍耶

（吹雪、璃空怖いね？）

吹雪

（ああ、切れると何時もああだ）

璃空

「そこ二人、五月蠅い！」

龍耶／吹雪

「はい！」

璃空

「ふんっ！……………さて、先ずは遅くなりましたがこの回の題を発表します。」

題して、第一回設定公開！」

龍一

「……………は！？」

龍耶

「まあ、兄貴は聞いてなかったみたいだからね」

龍一

「ちょっと待て！何だよそれ！何で、こんな回を設ける必要がある！」

璃空

「そつだな。先ずはそれから話そう」

龍耶

「うん、そつだね」

璃空

「じゃあ先ず最初に……………」

璃空／龍耶

「すみませんでした！」

龍一

「はあ！？」

吹雪

「まあ、この回が開かれた理由については俺から話そう。」

……話の中にちよくちよく出てくる設定について読者の方々も非常に困っていると思う。故にこの回が開かれたのだ！」

龍二

「確かに、黒い牙だとか言っても、一体何の事が分からないよな」

璃空

「その設定についてをこの設定公開で明かす、という事だそうだ」

龍耶

「まあ、要するに僕達が作者の不手際を尻拭いをしているって事だよね？」

璃空／龍二／吹雪

「……………」

龍耶

「えっと、どうしたの？」

龍二

「いや、何でもない」

龍耶

「ふーん」

璃空

（兄貴、あれも兄貴のせいなのか？）

吹雪

（いや、あれは龍二のせいだろう）

璃空

(やっぱりか……………)

吹雪

(俺の最愛の弟子に悪影響を与える奴は許さん！)

璃空

(あっ、ちょっと待った兄貴。あんたはちょっとは本編の事を考えてくれ！)

吹雪

(………………仕方ない。今回だけは許すでしょう)

璃空

(ふう、助かった)

龍二

「あ、あの……………」

吹雪

「むっ、何だ？」

龍二

「な、何故さっきから俺を睨んでいるのでしょうか？」

吹雪

「ふん！そんな事決まっている。我が最愛の弟子に変な虫が付かない様に見張っているだけだ！」

龍一

「そ、それで。何故……………いや、何でもないです」

龍耶

「さあ、一区切り着いた所で……………」

璃空

「設定公開……………」

璃空／龍耶

「始まります！」

璃空

「まずは登場人物からだな」

龍耶

「まあ、そうだね。でもさ、今までで二話終わったけどさ、登場人物全員がオリジナルだよな？」

璃空

「まあ、そうだな。って言うかりりなのシリーズ、女性が多いけど、此処は男性多くないか？」

龍一

「確かにそうだな。まあ、今後は原作のキャラ達も交えて進んでいくんだけどな」

吹雪

「さて、我が最愛の弟はどれくらいモテるのか？」

璃空

「縁起でも無い事言わないでくれ」

龍耶

「でもさ、この小説内では皆目の色と髪の色だけしか言われて無いよね？」

璃空／龍二

「あっ！」

吹雪

「まあ、作者の技量の問題でもあるが、流石にこのままというのも不味いだろう」

龍耶

「まあ、その点は後でキャラ紹介の時に」

龍二

「まあ、過ぎた事よりもこれからの事だよな」

龍耶

「おお、兄貴が珍しく良いこと言った！」

龍二

「弟に全く尊敬されてない俺って……………」

吹雪

(璃空が弟で良かったな)

「まあ、気にするな。龍耶はあんな事言ってるが、それでもお前を尊敬してるんだ」

龍一

「そ、そうなのか、龍耶？」

龍一

「まあね。まあ、その点も後で出てくるから」

龍一

「うおー！俺は今猛烈に感動している！」

龍耶

「五月蠅い！それに恥ずかしい！」

ー ドガ ー

龍一

「ぐはっ！？……………これがツンデレか」

龍一

「弟に対して気持ち悪い事言っな！」

吹雪

「龍一、折角フォローしてやったのに余計な事を」

璃空

「さあ、切れも良い所なので、早速人物紹介に参ります！」

龍一

「何処がだ！」

璃空

「何か文句あんののか？」

龍一

「な、何でもありません……………」

璃空

「つたく、前置き長すぎんだよ！……………では、参ります！」

たちはな
りく
立華璃空

現在六歳（これからも少し時間が跳びます）出身世界

第一管理世界ミッドチルダ南部クラー

クラーとは、ベルカ語で旅という意味を持つ。

魔導師ランク AA+

魔力ランクでは、天才とも言われる位だが、本人は余り魔法を使わない。

その代わり、心力と呼ばれる魔法とは異なる力を使用する。

魔力変換資質『闇』を保有している。

使用剣術は、『天動流四聖八陣剣派』と呼ばれるもので、璃空達の扱う、天動流剣派は魔力ではなく、心力を使用するのが魔法を余り使わない理由である。

剣の才能は天才的で、その実力を認められ、『瞬刃』と称される。幼くして実の両親を無くし、地球に来たせい、かなりのお兄さんっ子である。

御剣に弟子入りしたのは四歳の誕生日で、未だ作中には出ていないが、天瞳の力に目覚めたのもこの頃。

第二話によって、言われた吹雪が起こした事件（迷刃事件）のせい

で感情がかなり荒んでしまっている。
それからは、御劔の養子となり、新暦62年3月20日に海鳴市に引越した。

銀髪蒼瞳の少年

因みに、顔はまだカッコイイというよりは女性的である。
今後の成長に期待。

璃空

「おいつ！ちよつと待て！最後のは一体なんだ！」

龍耶

「んっ？何かおかしかった？」

璃空

「おかしいも何も、一体何だよ！女性的だとか、今後に期待だとか
！」

吹雪

「ふむふむ、確かにな。女装をさせたら最早美少女だな」

璃空

「ぐはっ！？」

龍耶

「え、ちよつと璃空！？璃空が倒れたらどうやってこの空間をまとめるの！」

璃空

「兄貴にまでそんな事言われる俺って……………」

― バタ ―

龍耶

「置いて行かないでよ！僕一人じゃこの空間を纏める自身ないよ！……………璃空、璃空―！」

吹雪

「少し刺激が強すぎたか？……………自重せねば」

龍一

「って、おい。吹雪！あんたは一体どうして……………」

吹雪

「もう過ぎた事だ。気にするな」

龍一

(何言ってるんだこの人……………)。

吹雪

「まあ、璃空の修行が足りなかった、という事だな！さて、次だな」

龍一

「璃空のせいにしてやがった。これも何とかに口無しって奴なのか？
気絶した奴に人権は無いのか？……………憐れ、璃空」

龍耶

「おほん！……………まあ、色々ありましたが、どんどんいきましょ
う！」

立華吹雪 十二歳

魔導師ランク A A A

璃空と同様に天才と言われる少年。

八歳の時に御劔に弟子入りした。

魔導師としての才能も折紙付きで、七歳の時から魔法を学び、十歳の時にはもう魔法学校を卒業、それからは、独学で魔法を勉強している。

劔の才能も天才的で、弟子入り二年後には黒い牙では『劔竜』と恐れられる程。

璃空が御劔に弟子入りしたのは、吹雪に憧れたからである。

吹雪が使う劔術は、『天動流幻龍劔派』と呼ばれる物の中の『神龍ノ型』と呼ばれる物である。

璃空とは違い戦闘スタイルは劔術と魔法を適材適所で使う。

新暦62年2月に起こった事件「迷刃事件」の主犯であるが、動機等は全くの不明で、ラクスと共に行動している様だが、ラクスと吹雪が出会った時期なども不明である。

銀髪赤瞳の少年

例の如く、顔立ちはかなり整っている美少年である。

龍一

「何か、不明ばっかだな」

吹雪

「仕方がないだろう」

龍耶

「まあ、吹雪の動機何かはこの小説ではトップシークレットだもんね」

龍一

「まあ、それは良いか。それよりも、やっぱりと言っか何と言っか」

龍耶

「うん、やっぱり兄弟だよ。二人共、良く似てるよ」

吹雪

「ん、まあな」

龍一

「本当、俺達は一体何なんだ？」

龍耶

「兄貴、そこは気にしたら負けだよ」

龍一

「そ、そうか？……………でもまあ何と言っか俺の周りは天才だらけだな」

龍耶

「大丈夫、兄貴も十分天才だよ」

龍一

「ほ、本当か！」

龍耶

「うん、努力の天才」

龍一

「……………何か喜んで良いのかこれは？」

吹雪

「素直に喜んでおけ！中々いないぞ、努力の天才ってのは」

龍一

「ううん。一応喜んでくか」

吹雪

「では、次に行くぞ？」

龍一

「お、次は俺か！」

龍耶

「ううん、僕だよ」

龍一

「おい、何でそうなる！普通そゆうのは兄からだろ！」

吹雪

「それに関しては、作者の気分だそうだ！」

龍一

「何だ？作者は俺に対して何か恨みでもあるのか？」

龍耶

（これもギャグキャラの宿命だよ、兄貴）

龍一

「ん、何か言っただか龍耶？」

龍耶

「え、気のせいだよ。……………たぶん」

龍二

「おい、気のせいってな……………」

吹雪

「五月蠅い！いい加減進むぞ！」

龍二

「うぐっ」

龍耶

「まあ、まだまだ沢山残ってるからね」

吹雪

「では、次は龍耶だ。どうぞ！」

龍二

(やっぱり俺じゃ無いんだな)

藤堂龍耶 とどうりゅうや 六歳

魔導師ランク A

出身世界

第97管理外世界地球

魔導師としての才能は、立華兄弟には劣るがそれでもかなりの才能を持っている。

剣士としての才能は、璃空と肩を並べられる程で、『剣童』と呼ばれる。

普段は龍二に対してかなり厳しいが、それでも龍二を尊敬している。

使用剣術は『天動流幻龍剣派』の『滅龍ノ型』と呼ばれる物である。

黒髪黒瞳の少年。

容姿は、璃空と同様で女性的である。

龍一

「短いな！」

龍耶

「仕方ないよ。僕達がかなり無駄な事やってたから文字数押ししてるんだもん。……………僕も女性的か」

龍一

「まあ、気にするな」

龍耶

「ん？別に気にしてないよ」

龍一

「ど、どうしてだよ？」

龍耶

「だって僕まだ6歳だよ。ただ単に可愛いって言われただけじゃん」

龍一

（お前は今、軽く璃空を貶したぞ）

「普通は嫌がるもの何だよ！」

龍耶

「うーん、そう言う物なのかな？」

吹雪

「まあ、気にするな。お前はまだ若いんだ。その内分かる様になる。………では、次だな」

龍一

「やっと俺の番か！」

吹雪

「仕方ないから、殺ってやる」

龍一

「ちょ、今やるって言った所で何か殺気を感じただけど！」

吹雪

「五月蠅い！黙らせて殺ろうか！」

龍一

「すいませんでした！」

龍耶

「では、どうぞ！」

藤堂龍一 六歳

魔導師ランク B+

出身世界は龍耶と同じ。

『剣王』と呼ばれ、恐れられる少年。

魔導師としての才能は、他のオリジナルキャラよりも低いが、剣士としての実力は相当高い。

元々龍耶みたいな天才的な才能は無かったが、兄として弟に負けたく無いという理由から、持ち前の負けず嫌いとは根性で、龍耶に勝る程になった。

それ故に龍耶は龍二の事を尊敬している。

使用剣術は『天動流幻龍剣派』の『覇龍ノ型』と呼ばれる物である

茶髪黒瞳の少年

容姿は、それなりの美少年だが、性格に難有り。

龍二

「そうか、やっぱり尊敬されてたんだな。……………っておい、最後の性格に難有りってのはどういう意味だ！」

龍耶

「それは、自分の心に聞いて……………」

龍二

「……………」

吹雪

「まあ、それは人それぞれだ。気にするな。」

龍二

「次だ！次行くぞ！」

龍耶

「兄貴……………。次は年輩陣だね」

吹雪

「ああ、文字数も押してる事だ。ちゃちゃと行くぞ」

御劔永理 みつるぎえいり 年齢不明

魔導師ランク 不明

出身世界

藤堂兄弟と同様

『劔神』と呼ばれ、恐れられる黒い牙のリーダー。

その実力は未知数で味方キャラなのに最強と、かなり使いにくいキ
ャラである。

使用劔術は『天動流四聖八陣劔派』で、璃空達4人の劔術の師匠で
もある。

白髪黒瞳で、容姿はかなりの男前。

御皇玄耶 みおつげんや 年齢本人曰く150歳位

魔導師ランク 不明

その経歴全てが謎に包まれた人物。

本人曰く神の末裔らしいのだが、その真偽は不明。

武術家であり、劔術以外では頂点と言われる程だが、かつて御劔に
負けた事から、今は御劔の親友である。

見た目は二十代位で白髪赤瞳、容姿も良く、文句無しなのだが、性
格は最悪。

龍一

「味方にジョーカーキャラ多くないか？」

龍耶

「まあ、気にしない気にしない！」

吹雪

「あの二人もこの先、かなり重要なキャラらしいぞ」

龍一

「まじでか!」

龍耶

「相談役………………。性格は最悪って、否定出来ないね」

吹雪

「まあ、あの人は人より長く生きてる分娯楽なんて殆ど無いからな。毎日楽しい事は無いかを探してるんだ。まあ、その過程で少し大人気無いがな」

龍耶

「まあ、仕方が無いよね」

龍一

「あの自由奔放を仕方がないで片付けられるお前達は凄いよ」

吹雪

「あの人の事で一々気にしていたら身が持たん」

龍一

「確かに」

龍耶

「じゃあ今回は此処までだよね」

龍一

「っておい、まだまだ沢山残ってるだろ!」

吹雪

「だからこそ此処までなのだ」

龍一

「意味わかんねえよ！」

吹雪

「五月蠅い！このまま続けると更新が何時になるか分からないから次話に持ち越すということだ！」

龍耶

「という事なので、すみません、続きは次話になります」

吹雪

「今回は、作中に出てくる組織や剣術の事を紹介する」

龍耶

「では、また次回でお会いしましょう。さようなら！」

龍耶

《璃空、最後まで起きなかったね》

龍一

《そうだな。……………因みに、気になったんだが、魔力変換資質[㊦]閻[㊧]ってなんだ？》

吹雪

《それについては、作中から説明する》

龍一

《因みに、いつ頃出るんだ？》

龍耶

《まだ未定みたいだよ》

龍一

《おい！それで良いのか！》

吹雪

《まあ、何時かは必ず出るんだから良いじゃないか。これに関してもかなり重要なものだからな》

龍一

《仕方ないな。……………吹雪、次回までには璃空を起こしといてくれよ？あんたがやった事なんだから》

吹雪

《分かっている。どんな手を使ってでも起こすさ》

龍一

(……………すまん璃空！許してくれ！)

龍耶

《でもさ、何で今回はコント調だったの？》

吹雪

《むっ？ああ、それはな……………》

龍一

《まあ、二話が相当シリアスだったからな》

龍耶

《ああ、確かにね。でも、まだシリアス続くんじゃないの?》

吹雪

《まあ、話の内容上仕方ないだろう》

龍一

(あんたのせいなんだけどな)

《基本、この小説はシリアスだそうだ》

龍耶

《へえ、作者も大変だね》

龍一

《いや、その作者がこんな話にしたんだが……………》

吹雪

《ここの作者はシリアスが大好きだからな》

龍一／龍耶

《はあ……………》

- The End -

外伝（汗）続「空と雪と龍達の秘密」

璃空

「……………」

龍一

「……………璃空？」

龍耶

「今はそつとしてあげようよ」

龍一

「何か、あつたのか？」

龍耶

「ほら、前回の最後に兄貴が言ったこと覚えてる？」

龍一

「……………あつ！」

龍耶

「まあ、何があつたかは想像に任せるよ」

龍一

「……………さあ、気を取り直して！」

龍耶

「……………設定公開（続）始まります！」

吹雪

「ふむ。早く起きんか」

ーバキッー

璃空

「ぐはっ！」

龍一

「吹雪、もつとまともに出来ないのか？」

吹雪

「ん？俺は何時も相談役にこうやって起こされたが？」

龍一

「あんに聞いたのが悪かった」

龍耶

「まあ、早く次に行こう？……………ほら、璃空も起きて！」

璃空

「ん、此処は？」

龍耶

「設定公開だよ。大丈夫？」

璃空

「ああ、何とか」

龍耶

「じゃあ、始めるよ！」

璃空

「……………なになに、まずは黒い牙についてか？」

黒い牙

リーダー

御劔永理

サブリーダー

御皇玄耶

黒い牙の歴史は長く、遥か旧暦の時代に創設された秘密組織と
言われている。

黒い牙が創設された訳は、その当時使用されていた危険度の高い
質量兵器（現在ではロストロギアと呼ばれる）の回収、保管である。
現在では、黒い牙は秘密組織故に時空管理局がその責を担っている
が、管理局が認知しないロストロギアや認知しても危険度の低いと
されるロストロギアの回収を主な活動内容にしている。

その中で、特に回収対象とされる『混沌の欠片』は複数個存在し、
一つ一つの危険度は高く無いが、多くが集まれば何が起こるか分か
らないという代物である。

その組織の性質上、他のどの組織よりもロストロギアについての知
識は豊富である。

組織の構成

黒い牙は大まかに分けると、二つに大別される。

戦闘、回収、保管の実動部隊。

情報収集等のバックヤードを担当する暗部である。

実動部隊は主に暗部によって、集められた情報により動く。

実動部隊のリーダーは御剣永理、暗部のリーダーは御皇玄耶である。なお、璃空は実動部隊で御剣の直接の部下であり、藤堂兄弟は暗部で御皇の部下である。

余談だが、吹雪は暗部のサブリーダーだったが、現在ではその席は空白となっている。

吹雪

「この位か？」

龍一

「微妙な長さだな」

龍耶

「それはは当たり前。だいたい要点だけだからね」

龍一

「そつなのか……………」

吹雪

「これでも短い方だと思うが？」

龍耶

「まあ、次に行こう？」

龍一

「よっしゃ！次だ次！」

吹雪

「次は心力や天瞳についてだ」

龍一

「まあ、俺達の戦い方なんかをやるんだったら、これはかなり重要なやつだよな」

龍耶

「まあ、天瞳はともかくとして、心力は天動流剣派の基盤だからね」

吹雪

「ああ、その話は説明の後にする」

龍耶

「そうだね。では、どうぞ！」

心力

文字通り心の力であり、そのエネルギーを使用して身体強化などを行う事が出来る。

一見してかなり万能の様に見えるが、使い過ぎると心がダメージを負い、最悪心が崩壊する恐れがあるという諸刃の剣である。

天動流剣派は、この心力を利用して主な戦闘を行うので、天動流の剣士には、常に強く心を持てる事が求められる。

心力には、扱える者とそうでない者がいる。

天瞳

戦闘で起こるありとあらゆる物事の性質を見極める事が出来る瞳力。相手の隙、攻撃の性質等を見極められる。

何故、その様な力があるか等は不明だが、五十年周期に一人だけ天瞳を持つ者が必ず現れる。

現在天瞳を持つ者は、御劔と璃空である。

天瞳を持つ者でしか、『天動流四聖八陣剣派』を扱えないのは、八陣以上の剣技には天瞳の特殊なエネルギーを使用するからである。

龍一

「本当、天瞳は最早チートだよな」

璃空

「チート言っな！」

龍耶

「まあ、これに関しては僕も兄貴と同意見かな」

璃空

「くっ、龍耶お前まで！」

吹雪

「まあ、あんな力を持っていたら、そう言われても仕方がないだろ
う」

璃空

「うぐっ！……………っ、次だ！」

龍一

「まあ、チートだって事を受け入れたら楽になるぞ！」

璃空

「意地でもそんな事してたまるか！」

吹雪

「……………では、次は俺達の使う剣術についてだ！」

龍一

「おっ！やつときたな！」

龍耶

「まあ、此処まで長かったよね。……………そういえば、もう無手はでたんだよね？」

吹雪

「ああ、逆を言えば無手しか出てないがな」

龍一

「何でだよ！」

璃空

「状況が状況だったんだ！」

龍耶

「そつだよ、兄貴。一応戦闘はあったみたいだけど、相手は魔法を使えない普通の人だったから」

龍一

「確かに……………。でもあいつ等武装してただろ？」

吹雪

「確かに武装はしていた。だが、それだけだ！いくら危険な質量兵器を持っていようが、見えない相手には意味を持たない」

龍一

「ああ、そういえばあいつ等には見えなかったのか」

龍耶

「兄貴、いくら璃空が手加減してたとしても、普通の人なら見えな
いよ。それに、あの時の戦闘時間は五秒だったから」

龍耶

「むっ！そうだったのか？」

吹雪

「ああ。では、このままぐだぐだ喋っていても仕方がないだろう」

龍耶

「そうだね。じゃあ早速いつてみようか」

天動流剣派

これには、『一ノ太刀』『十ノ太刀』、『八陣』、『無ノ太刀』、『

四聖ノ剣』がある。

一〜十までの太刀は以下の通りである。

一ノ太刀 神騎

二ノ太刀 絶覇

三ノ太刀 鬼刃

四ノ太刀 瞬刃

五ノ太刀 絶焼

六ノ太刀 雷皇らいおう

七ノ太刀 冥皇めいこう

八ノ太刀 神牙しんが

九ノ太刀 枯皇こおう

十ノ太刀 終神ついにじん
であり、八陣は、

北方ノ陣

北東ノ陣

東方ノ陣

東南ノ陣

南方ノ陣

南西ノ陣

西方ノ陣

北西ノ陣

であり、それぞれでは、

北が雷

東が風

南が炎

西が氷

の性質を持っている。

因みに八陣以上は、『八陣』、『無ノ太刀』、『四聖ノ剣』であるが、『四聖ノ剣』は例外で、心力も天瞳の力も使用しない。

『無手』と付くものは、単純に刀を持たずに素手で技を繰り出す事を言う。それにより、間接的に刀に心力を乗せる事なく、直接的に心力を使用する事が出来る様になる。

龍二

「何か味気がないな」

璃空

「ぐつ、仕方無いだろ！技の効果まで書くことんでもない事になるんだよ！」

吹雪

「という訳で、技の効果は本編内で登場したもものから説明していく」

龍一

「……………それで良いのか？」

龍耶

「僕達の剣術についてもそうなるんだよね？」

吹雪

「ああ、俺達の戦闘はまだ先だそうだからな」

璃空

「それ、言っただけなのか？」

吹雪

「別に問題無かるう。当分は璃空の事で進めていくそうだからな」

龍耶

「まあ、一話と二話からしてそうだよな」

龍一

「なあ、一つ思ったんだが、『五ノ太刀』と『六ノ太刀』の間の隙間は何か？」

璃空

「ああ、その事か。それはな、一種の境界線みたいなものだよ」

龍一

「境界線？」

璃空

「ああ。『一ノ五ノ太刀』までは普通に習えば使える奴は多いんだよ。だけど、それ以降のは極めて繊細な心力コントロールが必要なんだ。だから、使える奴は極めて少ない。

まあ、その事に関しては、実際に登場した時に話すよ」

龍二

「ふうん。……………じゃあ整理するか！」

龍耶

「心力のエネルギーを使用するのは『一ノ十ノ太刀』」

龍二

「で、それ以降の『八陣』、『無ノ太刀』は天瞳の力を使うんだな？」

璃空

「ああ、そうだ」

吹雪

「では、次に移るぞ！」

龍二

「で、次は何なんだ？」

吹雪

「迷刃事件についてだ！」

璃空 / 龍二 / 龍耶

「……………」

吹雪

「ん？どうした三人共？」

龍一

「い、いや。何でもない」

龍耶

「兄貴、流石にそれは無いと思うよ」

龍二

「ぐう、だけどな。ほら、璃空だって」

璃空

「……………」

龍耶

「もう良いよ。吹雪、続けて！」

吹雪

「何故か殺気を感じるんだが？まあ、進むか」

迷刃事件

立華吹雪が主犯となる事件。

璃空や吹雪は、実の親と死別したことにより、新たな育て親と共に地球で暮らしていたが、新暦62年の二月に吹雪が育て親を虐殺した。

動機等は全く不明で、吹雪自身その育て親とは普通に接していた。この事件により、璃空は精神崩壊手前まで陥る。

璃空 / 龍二 / 龍耶

「……………」

吹雪

「お前達は何故俺を睨むのだ？」

龍二

「そんなの決まってるじゃないか！」

龍耶

「うん、……………吹雪、どうしてあんな事件を？」

吹雪

「何だ、その事が。先ず第一に睨むのを止める。あれは本編の話であって、此处とは関係無い。それに、何故かは言えない」

璃空

「兄貴……………」

吹雪

「ん？どうした璃空？」

璃空

「ずっと、信じてたのに……………どうして…！」

吹雪

「それは……………言えない」

璃空

「くっ！」

吹雪

「……………」

璃空

「……………」

龍一

《なあ、龍耶？》

龍耶

《分かってる》

龍一

《じゃあ、やるか》

龍耶

《うん》

龍一

「では、大まかな所は説明し終えたので……………」

龍耶

「今日は此処までです」

龍一

「次回から、また本編に戻ります！」

龍耶

「この様な所に補足説明等を入れてしまい、すみません。何か他に知りたい事等がありましたら、どうぞお気軽に」

龍一

「では、また次回！」

龍耶

「さようなら！」

その後も、数時間の間この空気が続いたという。

- The End -

『零章第三話』その瞳、過去の自分』

夢をみた。

懐かしい夢を。

ずっと、忘れていた大事な約束を。

「それじゃあ、なのはちゃん……………」

大切な、大切な友達との約束を。

「そんな顔しないでよ、なのはちゃん。また何時か会えるから、ね！」

何で、ずっと忘れてたんだろう。

「なのはちゃん、一つお願いしたい事があるんだ」

彼女とお別れした時は、毎日の様にその時の夢を見ていたのに。

「私の大事な友達……………」

だけど、何で突然忘れていた夢を見たんだろう。

「彼の事、お願いしても良い？」

私には、誰の事を言っているのか分からなかったけど、彼女は私とその子と知り合いの様に言っていた。

「なのはちゃんなら、彼を救ってあげられる。そう信じてるから」

彼女の言うことは、外れた事はなかった。

だからこの約束もきつと当たると思う。

だからもう、忘れない。

彼女、進藤理亜ちゃんとの約束を。

その子を救ってあげられる様に。

新暦62年

四月七日 海鳴市郊外 御劔邸

AM7:05

長い廊下を歩きながら、御劔はまだ冷たい風を受け、顔に皺を寄せ
る。

すると、背後から御劔に声を掛ける者がいた。

「御劔さん、今朝はかなり冷えますね。御身体は大丈夫ですか？」

御劔は一旦歩いていた足を止め、後ろを振り返った。

声を掛けてきたのは、まだ十代半ば位の銀髪蒼瞳の少女だった。

御劔は少し苦笑いしながらも答える。

「私はまだ誰かに心配される程歳を取ってはいないよ。……………お
はよう、フィン」

フィンと呼ばれた少女は、少し申し訳が無さそうな顔になる。

「……………余計な心配でしたね、すみませんでした。それと、おは
ようございます。」

「いや、気にしなくて良いよ。私の身体を心配して言ってくれたんだからね」

御劔はそう言つと、また歩き始めた。フィンもそれに習い付いていく。

「フィン、ところで璃空君はどうだい」

不意に御劔がそう聞くと、フィンは顔を曇らせた。

「駄目……………ですね。まだ彼の事で気に病んでいるようです。……………本当に私で大丈夫なのですか？」

「まあ、今は仕方がないさ。それに、君なら大丈夫だよ」

御劔のその言葉を聞き、フィンは少し訝しげな表情になる。

「その自信は一体何処から来るのですか？」

「秘密だよ」

「はあ……………」

返ってきた素っ気ない答えに、フィンは盛大に溜め息を吐く。

「ところで、璃空君は今何処にいる？」

それを苦笑しながら見ていた御劔がフィンに聞いた。フィンは廊下の窓から遠くの空を見ながら答える。

「マスターなら、今はもう任務に出掛けられました」

フィンの返答に、御劔は顔を暗くした。

「そうか。……………私としては、今の璃空君にはまだ任務には行つて欲しくないんだが……………」

「すみません。今のマスターは、自分が何をやりたいのかが分かっていない様子で、兎に角目の前にある事からやるうとしていているみたいで……………。私には止められませんでした」

季節はまだ春の頭であり、冷たい風がフィンの頬を撫でた。

所変わり、此処はとある管理外世界

「ぐがあああ！」

3メートル程ある怪物が少年、立華璃空に襲い掛かる。

「黙れ、デカ物！」

― 斬 ―

「ガアア……………」

― バタン ―

しかし、怪物は璃空の一刀の下に両断された。

「ちっ、無駄に体力使わせやがって」

そう毒づきながら、璃空は刀に付いた血を振り払った。

「で、村雨。混沌の欠片が何処にあるのか分かったか？」

璃空がそう言うと、手に持つ刀に取り付けられた宝石が点滅し始めた。

『マスター、もう少し死者に対して敬意を払って下さい！』

「ちっ、あいつ等は混沌の欠片が造り出した魔物だ。元から命なんて持って無いだろ」

『それでも、意思があります！』

「……………分かったよ。……………それで、何処にあるんだ？」

璃空は、そう毒づきながらも黙祷し、再び璃空は質問をした。

『分かりました。少しお待ちください』

村雨はそう言うと、妖しく点滅し始めた。璃空はそれを見ながら、先日自分が村雨に質問したことを思い出していた。

（「なあ、村雨。その妖しい光は何なんだ？」）

（「妖しいとは、失礼な！これはこの辺りの半径数百メートルをス

キャンしているんです!』)

その後の村雨を宥めるのは大変だった等と璃空が思っていると、村雨から終了の報告が来た。

『ありました。此処から前方七百メートルの位置にある祠です』

「分かった」

そう返答し、璃空は目的の場所に飛び立った。

「此処だな……………」

璃空は目的の場所に降り立ち、顔をしかめた。

『血、ですね』

そこには、辺り一帯に血溜まりが出来ていた。

そして、その中央には、特に真っ赤に染まった祠が建っている。

「これは、酷いな」

『魔物の仕業でしょうか?』

「だろうな。この被害者達も、今まで祀っていた者があんな怪物だったなんて思ってもいなかっただろうな」

璃空はそう言うと、黙禱を始めた。

数分後、目を開けた璃空の目にはもう、祠しか映っていないかった。

「やるぞ、村雨」

『はい！』

璃空と村雨は、互いに気を引き締めて、祠の扉を開ける。

すると、その中には、一つの菱形をした漆黒の宝石が鎮座していた。璃空はそれを、ただただ睨み付けながら、懐から丸い透明なケースを取り出し、宝石に押し付ける。

すると、宝石は何もなかったかの様にケースの中に納まった。

「封印、完了」

璃空が呟くと、ケースは消滅した。

『お疲れ様です、マスター』

「ああ、今回ののは結構数がいたからな」

『最近は何日、任務ばかりですからね。明日はもう休んでください』

「善処する」

苦笑いを浮かべながら璃空はそう言い、転送魔法の準備を始めると、それに抗議する声が一つあった。

『待ってください、マスター！折角来たのですから、この世界を見て回りたいです！』

「お前な、この世界には任務で来たんだ。観光する気は無い！」

璃空が村雨の懇願を切り捨てると、村雨は残念そうに点滅する。

『マスターは大人過ぎます！もう少し子供みたいに遊んでください。』

「お前が子供みたいなだけだ！第一、任務を優先するのは当然の事だろう！」

お互いの間に沈黙が流れる。

暫くして、転移の準備が完了した璃空は、一つ溜め息を吐き己の相棒に声を掛けた。

「悪いな、村雨。今はそんな気分じゃないんだ。何か自分が出る事やってないと、自分を見失いそうなんだよ」

璃空がそう言うと、村雨は辛そうに点滅し始めた。

「じめんな」

最後に璃空はそう謝り、転移した。

海鳴市

PM17:30

黄昏の風が吹く道を少女、高町なのはは、一人歩きながら今自分が

感じている違和感について考えていた。

（何でだろう？何時もは違う道を通るのに、今日は此方の道を通りたいって思うなんて）

臆て、なのははとある公園に差し掛かった。

その公園は人気がなく、夕陽が相まって、行き着く人に若干の恐怖心を与えるが、今のなのはは別の事を考えていた。

（懐かしいな。此処には理亜ちゃんとお別れしてから初めて来るかな）

なのはは、自分にとって、大切な友達との出会いと別れの地であるこの公園に想いを馳せていた。

暫くして、なのはが公園の中間点に差し掛かった時である。

「えっ!?!」

なのはの目に、一人の少年が映し出された。今まで自分しかいないと思い込んでいたなのはは、驚きの声を上げる。

何時ものなのはなら、そのまま気にせず通り抜けただろう。しかし、なのはにはその少年がとても悲しんでいる様に見えて、正義感の強いなのはは、声を掛けずにはいられなかった。

なのはは、ゆつくりと少年に近付く。少年も考え事をしているのか、全く気付く気配がない。

しかし、なのはは己が一步一步進むに連れて、どんどん足取りが重くなつていくのを自覚する。

「あのじ……………」

聴て、ゆっくりとなのはが少年の下に辿り着くと、弱い声を少年に掛けた。

すると、少年はゆっくりと顔を上げ、なのはを驚いた様な目で見ると、

(全く気が付かなかった。少し考え事をし過ぎたな。……………それにしても、誰だこいつ?)

(この人の目、昔の私と同じだ。あの、寂しさで凍えてた私と同じでも、その時は理亜ちゃんが声を掛けてくれて、友達になってくれた。

でも、この人には……………)

「ど、どうかしたんですか?」

なのはは、声を掛けても全く返答が返って来ないのを不安に思い、もう一度聞いてみた。

「お前、誰だよ?」

すると、徐に少年がなのはに問い返した。

なのはは、折角自分が声を掛けているのに、かなり棘のある言葉で返されたのに少し怒りを感じながら、

「人に名前を聞くときは、先ずは自分から名乗るんだよ!」

と、良くテレビで目にした決まり文句で返答した。

すると、少年は大きく溜め息を吐き、

「はあ……………。お前の方から近付いて来たんだろうが。

……………まあ、別に名前なんて良いや」

と、返答をする。

これにはなのはも驚いたのか、再び少年に質問する。

「えっ！？何でそうなるの？」

「別に良いだろ？俺とお前は全くの赤の他人なんだから」

「私は良くないよ！名前を言ってくれないと、困るの！」

「なら、お前から名乗れよ。人に名前を聞くときは自分から、だろ」

「ううう……………」

なのはは、少年にそんな事を言われて少し黙る。

暫く、なのはにも少年にも居心地の悪い沈黙が流れる。

「ああもう！分かったよ。俺から名乗れば良いんだろ？」

臆て、少年が沈黙に耐えきれなかったのか、そう言った。

すると、なのはは満面の笑みで少年に頷いた。

少年は、その笑顔に若干顔を赤くしながら自己紹介を始める。

「璃空。立華璃空だ。最近、事情があつて海鳴に来た」

「へえ、じゃあこの人じゃないんだ」

「で、俺は名乗ったぞ？」

璃空はこのまま続けていると、他にも余計な事を聞かれそうなので、無理矢理に話を進めた。

「うん、そうだね。……私は、高田なのはだよ。両親が此処で喫茶店をやってるんだ」

「ふうん」

なのは嬉しそうに自己紹介するが、返って来た素っ気ない返答の様なものに言葉を詰まらせる。

「うう……………」

「で、一体何の用だ？」

少年はそれを予想していたのか、全く気にも留めずに話を進めた。

「そんな言い方しなくても……………。何かあったの？『璃空君』」

「り、璃空君！？」

突然呼ばれた己の名に、少し同様する璃空。それを見て、少し不安になったのはが、

「うん、璃空君。……………駄目、かな？」

「ぐっ！」

と、聞いた。

そんな事を若干の涙目で言われた璃空は、それを訂正させることが出来なかった。

(くそっ！こいつと話していると調子が狂う！)

「分かったよ。好きに呼べ！」

「うん。じゃあ、私の事は『なのは』って呼んで」

「はあ!？」

一難去って又一難とは良く言ったものだと思心しながら、璃空は己のペースが掴めずにいた。

「……………分かった。別に『なのは』には関係無い事だ」

遂に折れた璃空に、笑顔になるなのはだったが、関係無いと言われ、少し困った様な顔をする。

「えっと……………。話したくない事だったら別に良いけど、お母さんが誰かに話した方が楽になるよって言ってたよ？」

「お母さんか……………」

なのはの言葉に顔を俯かせる璃空。

なのはは、何か触れてはいけない物に触れてしまったのかと慌て始めるが、突然璃空が立ち上がったのに驚いて、璃空の顔を見る。

しかし、璃空はなのはとは全くの別方向を向いていた。

なのはもその方向を見ると、そこには公園に設置されたただ一つの時計があった。

時刻は、18:30分前。

(もうこんな時間なんだ……………)

「つて。ふええ!？」

なのはは、今の時間を見て、かなり時間が経っている事に驚き、同時に焦り始めた。

「って、なのは！いきなり大声出すな！」

しかし、璃空によって制止させられる。

「じ、ごめんなさい。……でも、時間が………」

「ああ、この時期になると日が沈むのが遅くなって来るからな」

「うん………、どっしょ」

「ほら、送ってってやるから」

「えっ!?!」

なのはは、璃空の予想外の言葉に何も言えなくなる。

「だから、もうこんな時間だから送ってやるって言ってるんだよ！」

「で、でも。璃空君だって………」

「俺は平気だ。それに、こんな時間になったのは俺のせいみたいだからな」

「えっ!?!そんな事ないよ！」

「良いからさっさと行くぞ！」

璃空はそう言い、まだ反論しているのは手を掴み、引っ張った。

「ちょ、待って！反対、反対！」

「お前はまだ反論するか！」

「違うよ！方向がだよ！」

「あっ！」

臆て、璃空は歩みを反対側に進めた。

二人が公園を出てからは、互いに無言で歩くこと五分、二人はなのはの家に着いた。

「此処だよ」

「ふうん。案外でかいな」

「にゃはは」

「じゃあ、俺はもう行くぞ？」

「うん……………、明日もまた会えるかな？」

璃空が踵を返し、歩き始めようとした時、なのはが璃空にそう聞いた。

すると、璃空は振り返らずに、

「さあな。そう言う運命だったら会えるんじゃないか？」

そう返した。

すると、なのはは顔を赤くしながら、

「う、運命……………」

と、呟いた。

すると、璃空には聞こえていたのか、そのタイミングで歩き始めた。

「明日もあの公園で待つてるから！」

歩みを始めた璃空に、なのはは慌ててそう告げると璃空は、

「好きにしる」

とだけ返事をして、歩き続けた。

翌日

四月八日

AM 6:30

御劔邸

「マスター、おはようございます！」

フィンはそう、マスターである璃空に挨拶した。

「ああ、おはよう。フィン」

璃空も同じ様に挨拶をする。ここまでは何時も通りだが、何時もならここで任務の有無を璃空は聞く。しかし、この日だけは違った。

「フィン、俺は今日是用事があるから任務は無しにしてくれないか？」

「えっ！？……………いえ、今日は何も任務は入っておりません」

何時もと違う璃空の言葉に、少し驚くフィンだったが、直ぐに平静を取り戻し、そう告げる。

璃空もそれに満足したのか、それ以降は何も言わなくなった。璃空が無言になった後、隣でフィンは念話を行っていた。

《御剣さん！》

《な、何だいフィン。いきなり念話なんかして》

《すみません。まだ稽古中でしたか？》

《いや、もう終わる所だよ。それで、一体何だい？》

《それが、マスターは今日何か用事があると》

《そうか。やっと璃空君にもやりたい事が見つかったのかな？》

《どうしますか？》

《別に璃空君のプライベートな事だから、何ともしないよ》

《そうですねか……。分りました》

そう、了解の意を伝えると、フィンは念話を終了した。

AM9:30

璃空は昨日の少女と出会った公園に隣接する道を歩いていた。

(本当、どうしてこんな所に来てるんだろうな?)

璃空は今の自分の変化に戸惑い、自問自答した。

しかし、答えは出ずに、璃空は公園の入り口に到着した。

(やっぱり帰るか……………)

璃空がそう思った時、璃空の目に昨日の少女、高町なのはが映し出された。

昨日の璃空が一人座っていた椅子に一人で座りながら俯いている姿が。

(はあ、何やってんだよあいつ……………)

すると、璃空は次の瞬間にはもう歩き始めていた。
自分でも、気が付かなかった程早く。

「あんな、なのは。何やってんだ?」

なのはは、突然掛けられた声に顔を上げ、一瞬で笑顔になった。

「やっぱり来てくれたんだ！」

璃空はなのはのその喜び様に、少し顔を赤くし、なのはから目を逸らしながら、

「別に。ただもしもお前が待ってたら行かないのは駄目だと思っただけだ」

と、照れ隠しに言うと、なのはは少し笑い、その場に若干柔らかい空気が流れた。

「ねえ、璃空君。昨日の事だけどね……………」

なのはが切り出した話に、璃空は顔を俯かせた。

「悪い、なのは。それは言えない」

「そつか。ごめんね、辛い事思い出させちゃって……………」

「いや、良いよ。俺はあの事を忘れちゃいけないんだから。……………
…なあ、なのは。何でそんなに俺に構うんだ？」

今まで俯いていた璃空は顔を上げ、なのはに向き合いそう聞いた。最初は同様していたなのはだったが、璃空の真剣な眼を見て、なのはも心を引き締める。

「えつとね。似てるんだ、璃空君が」

「似てる？」

なのは予想外の発言に璃空は疑問符を浮かべる。

「うん、……………昔の私と似てるの」

「……………」

「璃空君、寂しさで凍えてた私と同じ眼をしてたから……………」

そこまで話すと、なのはは一呼吸置いた。

璃空は何も言えない。

「だけどね、そんな私を救ってくれた子がいたの。その子は、進藤理亜ちゃんっていつてね、その子のお陰で私は救われたの」

「だから、私も璃空君を救ってあげたいだけだよ」

なのはが話し終わると、暫くの沈黙が流れた。
そして、最初に口を開いたのは璃空だった。

「その理亜って子は、なのはにとってどんな子だった？」

「大切な友達だよ」

即答だった。それだけでなのはにとって、理亜がかげがえのない人だった事が良く分かる。

しかし、璃空には話し終えたなのはの顔に浮かぶ影が何なのか分からなかった。

「なのは……………、変な事聞くけど、その子は……………」

璃空がその言葉を放とうとした瞬間、なのはの目から一筋の涙が流れ落ちた。

璃空はそれを見てしまい、全てを悟った。
もう、進藤理亜はいないと。

(それなのに、なのははこんな俺の為に……………)

「じ、ごめんね。……………えつとね、理亜ちゃんは……………」

次の瞬間、なのはが言葉を言い終わる前に、璃空はなのはを抱き締めた。

「……………えつ！？り、璃空君！？」

「もう、良いよ。お前はもう一人じゃない。俺が付いてるから、そんなに強がらなくても良い」

璃空のその言葉に、なのは抑えていた感情が決壊したことを自覚する。

「うう、璃空、君。うわああん！」

それからなのはは、涙が枯れるまで泣き続け、泣き止んだ頃にはもう、泣き疲れて寝むってしまった。

少し冷たい春の風に当てられ、なのはは目を覚ました。

(そっか。泣き疲れて寝ちゃったんだ)

そして、なのははいまの自分の状況を確認する。

(えっと、確かあの後直ぐに寝ちゃったから、椅子の上だ、と……)

しかし、状況確認しているなのはは、ある違和感に気が付いた。

(柔らかい、それに暖かい)

なのははゆっくりと起き上がり、今の自分の寝ていた所を見て、一気に顔を真っ赤に染め上げた。

(り、りり璃空君の膝の上!?)

慌てふためくなのはに気が付いたのか、璃空も目を覚ます。

「ん、眠ってたのか。……………ああ、おはよう、なのは。……………どうかしたのか?」

「り、璃空君!??どうして膝枕を?」

なのはの慌て振りに疑問符を浮かべていた璃空だったが、なのはの言葉に合点がいったのか、苦笑いを浮かべた。

「ああ、ごめん。このままお前を寝かせると、頭とか痛くなると思

つたから……………迷惑だったか？」

説明をして、最後に俯いた璃空に、慌ててなのはは、そんな事は無いと言い、その後には何とも言えない沈黙が流れた。
お互い、気まずい雰囲気の中で何とか打開策を見出だそうとしていると、そこに天の救いが現れた。

「璃空！」

璃空はいきなり呼ばれた自分の名前に、一瞬ドキツとするが、ここ最近でかなり聞き慣れた声に違和感を覚えた。

「フィン？」

「はい！今の今まで連絡を入れないで、心配したんですよ！」

ああ、違和感の名前で呼ばれた事か、等と璃空思い、隣に目をやる。なのははどうしたら良いのか分からずにおどおどしている。
すると、フィンがそれに気が付いたのか、なのはに声を掛けた。

「すみません。突然だったので混乱されているのでしよう。」

私はここにいる立華璃空の使用人のフィンプルと言います。フィンとお呼びください」

（使用人ねえ……………）

璃空がそんな事を思っていると、なのはも自己紹介を始めた。

「た、高田なのはです。両親がこの近くで翠屋って言う喫茶店をやっています！」

しかし、余りの緊張のせいか、かなりガチガチではあるが。

その自己紹介に、何か思い当たる事があるのか、フィンは一考する。そして、答えが出たのか、フィンはなのはに質問した。

「すみませんが、なのはさん。お御父様のお名前は高町士郎さんでは？」

その質問になのはは驚くが、それを頷き肯定した。

しかし、璃空には状況が掴めていないらしく、未だに疑問符を浮かべているので、フィンが璃空に念話を飛ばした。

《なのはさんのお父様は、あの百人斬りの士郎です》

その念話を聞いた瞬間、璃空の顔が真っ青になる。

《黒い牙の構成員を百人斬ったって言うあの百人斬りか！》

《はい！》

璃空はその最悪な答えに、頭を抱える。

それを見て、フィンは一つ溜め息を吐き、己の主に訂正を入れた。

《ですが、士郎さんはもう引退しており、今では御剣さんの剣友であり、弟子ですよ》

その言葉を聞き、更に焦り出す璃空。

隣ではなのはがそんな璃空を見て、疑問符を浮かべている。

《今、弟子って言ったよな！一体どういう事だよ！》

《別におかしくは無いでしょう。》

御剣さんは数いる剣士の中で、文字通り頂点ですから。誰もが弟子入りしたいと思っていますよ《

《ぐっ、確かに……………》

璃空が念話で呻き声を上げると、遂に我慢出来なくなったのか、なのはが璃空に声を掛けた。

「えっと……………、璃空君。何やってるの？」

なのはがそう聞いた次の瞬間、フィンの目が光るのを璃空は見た。

「なのはさん。璃空とは、どのようなご関係で？」

と、昼のドロドロ劇場で良く聞く言葉を放った。

そして、璃空はなのはの方を見た。見てしまった。

真っ赤に顔を染め上げたなのはを。

「えっと……………これからは一緒にいてやるとか、膝枕をしてくれたりとか……………／／／／／」

その瞬間、フィンの瞳が一等星の如く光輝いた。

「へえ、そうなんですか。まるでプロポーズですね、璃空」

その時、一瞬にしてなのはと璃空が顔を深紅に染め上げた。

「ちよつ、フィン！馬鹿な事言つな！それと……………」

「あうう」

「なのはも本気にするな！」

必死に抗議する璃空、余りの事に惚けてしまったなのは。

そんな二人を見て、フィンは璃空の変わり振りを喜び、嫉妬した。御劔さんの言っていた事は外れた、そう思い、璃空を変えた一人の少女に複雑な想いをフィンは抱いてしまった。

「冗談ですよ、冗談」

見かねたフィンが止めに入る。

「フィン、覚えてるよ！」

それに、怒る璃空。

「あうう」

そして、未だ惚けているなのは。

フィンには、璃空に幸せをあげられるのは、なのはしかない、そう思えた。

零章第四話・前編「剣皇の覚悟、少年の想い」(前書き)

はい！更新です！

こんな時間にすみません。

後、活動報告の通り短いです。

一応、五ページありますが、文字数は三千後半位です。
では、これぐらいで

「零章第四話前編『剣皇の覚悟、少年の想い』」

始まります！

零章第四話・前編「剣皇の覚悟、少年の想い」

「僕は何時も、気が付いたら傷だらけだった」

「大切な者達を守れるのなら、どれだけ傷付こつとも、どれだけ血を流しても良い、そう思っていた」

「たけど、それは違った……………」

「気付くと、大切な者達は何時も涙していた」

「僕にはそれが何故なのか分からなくて……………」

「ある時、僕は致命傷と言える傷を負った」

「その時の大切な者達の顔は悲痛に歪んでいた……………」

「その時に言われた言葉……………」

「その言葉を聞いて、やっと分かったんだ」

「こんな事をしていても、誰も喜ばないし、誰も救えない」

「だからもう、刀を収めよう」

「そう、誓った……………」

「僕が彼に初めて出会った時、一体何を思ったんだらうか？」

「彼の目は、悲しみに支配されていた……………」

「だけど、その中に僅かな光を見た」

「だけど、僕が彼に感じた印象は……………」

「儂い程脆い、そう感じた……………」

「それに、彼の刃からは……………」

「彼は、一体何を見つめているのだろうか？」

新暦62年

四月八日 海鳴市

高町家

AM5:30

(今日は何だか、古傷が痛む……………)

高町なのはの父であり、かつて剣皇と呼ばれ、恐れられた高町士郎の朝は、そんな感傷から始まった。

「何もなければ良いが……………」

この傷が痛む時は、何時も何かが起こる。そんな事を思いながら、士郎は身支度を整え、高町家に併設されている道場に向かう。痛む傷を撫でながら、士郎が道場の近くまで来ると、若い二人組の叫び声が響いていた。

(今日もしつかりやっているな！)

士郎は微笑を浮かべながら道場の扉を開くと、そこには一人の青年と少女が鏢迫り合いつばせをしていた。

二人は相手に集中する余り、士郎が現れた事にも気が付かない。

(集中力が高いのは良いことだ。だが、周りに気を配れないのは命取りになる)

そう、分析している士郎を他所に、二人の試合は終局を迎える。

「はああ！」

鏢迫り合いに競り勝った青年、高町恭也が上段に構え、縦に一閃を放つ。

木刀を弾かれた少女、高町美由紀は為す術もなく、一閃に目を瞑った。

しかし、来るべき痛みは一向に来ない。

恐る恐る美由紀が瞼を開くと、木刀の剣先は当たる寸前の所で停止していた。

「目を瞑るとは、剣士としてはまだまだ半人前だな」

恭也はそう言い、木刀を下ろした。

その瞬間、緊張の糸が切れたのか、美由紀は床に崩れ落ちた。

「だって……………」

「剣士にだって無い！」

「うう！」

美由紀の台詞に間髪入れずにツッコミを入れる恭也。それを見ていた土郎が二人に近づくと、二人はやっと土郎の存在に気が付いたのか、急いで姿勢を整え、挨拶をする。土郎はそれに軽く挨拶を返し、一つ咳払いをした。恭也と美由紀は、互いに唾を呑み込む。静寂が道場を包み込む。聴て、土郎はゆっくりと二人の試合を評価し始めた。

「先ずは全体的に見て、二人共更に腕を上げたな。これからも慢心せずに、上達に励む事！」

「「はい！」」

「次にだが、美由紀、あの場で目を瞑るのは最悪の行動だぞ！」

「うう、すみません」

「あの場はまだ諦める所では無かった。恐怖心にさえ打ち勝てば、避けるなり出来たぞ」

「はい……………」

「まあ、これから期待する！」

「はい！」

そして、土郎は一呼吸置く。二人はまた一つ、唾を呑み込んだ。

場に緊張が張り詰める。
そして、士郎が重たい口を開いた。

「最後に、二人の総合評価だ」

この総合評価は、士郎の稽古では最後に行く必ず行う。
これは、士郎の師匠からの受け売りである。

二人は大きく深呼吸をした。

士郎もそんな二人の深呼吸が終わるのを待つ。

普通なら、話の途中で深呼吸をするのは失礼である。

だが、士郎はあえてそれを咎め無かった。それは、士郎もこの総合評価の時の緊張を、身を持って体験しているからである。
聴て、深呼吸も終わると、士郎が二人を一瞥する。

（良い表情だな）

士郎はほくそ笑み、内心そう思う。

そして、長い沈黙の中、士郎の評価が始まった。

「先ず、先程も言った通り、二人共更に腕を上げたな」

「有り難う御座います！」

「集中力もある。戦いでは、先に集中力を切らせた方が負けるからな」

「はい！」

「しかし、二人共周りに気を配れないのは致命的だぞ！」

「すみません……………」

そこで、士郎は溜め息を一つ吐いた。

「まあ、二人共まだ若いから難しいだろうが、これが出来るのと出来ないのでは、天と地ほどの差がある。だから、これからは周りに気を配れる様に努力するように！」

「はい！」

士郎はそこで、二人の顔を見る。二人の顔からは、もう緊張している様子は無く、自信が満ちていた。

(良い心構えだ。これなら心配は要らないだろうな)

士郎は微笑み、最後の評価を下した。

「これらの事を踏まえて、評価は二人共まだ半人前だ。これからも精進するようじに」

「はい！」

そして、高田家の朝の長い戦いは幕を閉じた。

「お父さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん！」

すると、三人の背後、道場の入り口方向から、幼い少女の声が響いた。

三人共、そちらの方を向くと、一人の少女が立っていた。

「ああ、なのは。おはよう」

士郎がそう少女、高町なのはに挨拶すると、なのはも微笑み、挨拶を返した。

「おはよう。三人共、朝御飯が出来たからお母さんが早く帰って来てだつて」

「分かった。じゃあ、僕となのはは先に戻ってるから、恭也と美由紀は早く袴を着替えてきなさい！」

「はい！」

二人はそう、元気良く返事をすると、道場に備え付けられた更衣室に向かった。

「じゃあ、なのは。僕達は先に帰ろうか」

「うん」

そして、士郎となのははゆっくりと歩き始めた。

「ねえ、お父さん」

突然、なのはが声色を暗くして、士郎に話し掛けた。士郎はそれを、少し疑問に思いながらも返事を返す。

「なんだい、なのは？」

士郎は、優しく且つなのはが話し易い様に足を止めた。
なのはもその心配りが有り難かったのか、少し笑みを見せる。

「えっとね、昨日の事なんだけど……………」

「ん？昨日は何かあったかい？」

「ううん、私の話なの」

士郎は、そんななのはの様子を疑問に思う。

なのはは、自分の事を相手に話すような事はしない。それは、彼女
なりの相手に迷惑を掛けない処世術なのだろう。

そのきっかけを作ったのは他でもない士郎自信なので、今のは
の様子が普段とは違うというのに、少なからず違和感を覚えてしま
う。

だが、そんな事はおくびにも出さないで、士郎はなのはの話に耳を
傾ける。

「昨日ね。公園で気になる男の子にあったの」

ー メキッ ー

そんな音が辺り一帯に響いた。

なのははその音の正体が掴めずに、辺りを見回す。

しかし、その音の正体が、今なのはの目の前にいる士郎から出たと
いうことには気が付かなかった。

なのはが見回している時、顔を少しひくつかせながら、士郎はなの

はに質問した。

「なのは、気になるって事はもしかして、異性として好きという意味かい？」

「えっと。それってどういう事？」

しかし、なのはは士郎の言っている事の意味が分からず、疑問符を浮かべた。

それには士郎も安心したようで、先程までの穏和な表情に戻った。

「ああ、気にしなくて良いよ。話を続けて！」

「うん……………」

未だに疑問符を浮かべるのはだったが、話を進める事にした。

「えっとね。その子、立華璃空君って言うんだけどね……………」

(立華璃空？何処かで聞いたことのある名前だな……………)

士郎は、なのはの口から出た立華璃空という名前に聞き覚えがあり、記憶を探り始める。

「お父さん！」

すると、突然なのが叫び声を上げたので、思考を中断した。

「な、なんだい、なのは？」

「お父さん、今考え事してたでしょ！」

「うっ、……………ごめん。なのは」

凶星を刺され、何も言えなくなった土郎は、素直に謝る。
なのははまだご立腹の様子だったが、話を続けた。

「それでね、その子、とっても寂しそうな目をしてたんだ」

「寂しそうな目？」

「うん。だから、放って置けなくて、……………話し掛けたの」

「うん。良い子だ、なのは。」

それで、その子は何て？」

なのはは、誉められた事に少し赤くなる。

「うん。その子にどうしたのって聞いたら、話したく無いって言うてた」

「そうか。……………じゃあ、なのはは一体その子にどうしたいんだい？」

「私は、……………璃空君を助けてあげたい！」

土郎は、その答えを待っていたかの様に笑顔で頷いた。

「なら、なのはが悩む事じゃないよ。なのはが璃空君を助けたいのなら、頑張りなさい。」

そしたら、璃空君を助けられるよ！」

なのはは目を見開き、士郎を見た。

「本当に!？」

「ああ、必ずね！」

その士郎の言葉を聞き、なのはは満面の笑みを見せた。

(なのはのこんな笑顔を見たのは、何時以来だろうか?)

士郎は、そんな事を思いながら、再びなのはと共に帰路に着いた。

中編に続く

零章第四話・前編「剣皇の覚悟、少年の想い」（後書き）

はい！

なんて中途半端な所で終わるんだ、的な終わり方です。すみません。

一応は、前中後編で終わる予定です。

多分、そうなると思います。

もしかしたら、一部増えるかも……………。

本当にすみません。

それと、今話でやっと戦闘があります。

思えば、バトル物の癖に今までまともに戦闘が無かった。

はぁ……………。

多分、後編になると思います。

頑張って書くので、宜しくお願いします。

『零章第四話・中編1「剣皇の覚悟、少年の想い」(前書き)』

はい！更新です！

先ず始めに、すみませんでした！

日付が変わる前に、更新する予定が無理でした。

本当にすみません。

……では、

『零章第四話中編1「剣皇の覚悟、少年の想い」』

始まります！

零章第四話・中編1「剣皇の覚悟、少年の想い」

新暦62年

四月八日 海鳴市

PM17:50

喫茶店「翠屋」

立華璃空は今、なのはの誘いにより、フィンと共に喫茶翠屋に前に来ていた。

「この店が翠屋だよ！」

なのはが上機嫌で璃空とフィンに紹介している。

「ああ……………」

(この扉の先に、あの剣皇と呼ばれた人が……………)

璃空も一応は聞いているが、頭では全く別の事を考えていた。

《マスター、気負いすぎです！先程も言いましたが、土郎さんはもう身を退いています！

もう、黒い牙にとつてもただの一般人です！》

《だけどなあ……………》

璃空は溜め息を吐き、遠い空を眺め始めた。

すると、突然、璃空とフィンを呼ぶ声が届いた。

「璃空君！フィンさん！はやくはやく！」

そんな風になのはが急かすので、璃空は逃げ場は無いと悟り、重い一歩を踏み出した。

フィンも若干苦笑いを浮かべながら、それに倣い歩き出した。

時間は少し戻る。

フィンの発言による騒動が終結を迎えたのは、あれから約二十分後だった。やっと騒動が終わり、一息吐こうとした璃空に、フィンがそれはならんとばかりに、また爆弾を落とした。

「璃空、今日はもう遅いですし、晩御飯は翠屋でとるといのはどうでしょう?」

フィンのこの発言により、戦いの火蓋が切られた。璃空対なのは、フィンの一対二で……………。

「うん。そうしよう、璃空君!」その提案に大賛成なのは。

「ちょっと待った!それだけは待った!」

それを、完全に反対する璃空。

何故、璃空は此処まで反対するのか?

高町士郎は、魔法等の特殊な力を一切持たないにも関わらず、黒い牙の構成部隊を壊滅させ、今では「剣皇」と呼ばれている。

黒い牙の構成員である璃空にとって、士郎は恐怖の対象であり、敵なのである。

しかし、何故か黒い牙の構成員であるフィンはそのような提案を出した。

「まあ、良いじゃないですか。昔の事は忘れましょう。」

折角の機会ですので、なのはさんとの交友を深めましょう。」

なのはにとつて、かなり気になる事をフィンに口にしたが、交友を深めるといふ言葉を聞いた瞬間、なのははそんな物は一切気にならなくなった。

「うん、うん！折角璃空君と友達になつたんだもん。良いよね？」

「ちょっと待て！今、友達って言ったか？」

璃空は、突然のなのはの言葉に驚き、聞き返した。

「うん、お母さんがね。相手の名前を呼び合えたら、もうそれは友達だって」

そんななのはの言葉に、一考する璃空。聽て、璃空は出た答えに溜め息を吐く。

「……………分かった。行くよ、なのは」

「えっ？……………う、うん！」

今まで、完全に反対していた璃空も、友達とまで言われたのに、私情の為だけに断るといふ事が出来ずにフィンの提案を承諾した。なのはは、突然折れた璃空に少し驚いたが、直ぐに歓喜の声を出した。

《折れちゃいましたね、マスター》

そんな璃空に、フィンから念話が入る。

心なしか、フィンの声からは驚きの色が取れる。

璃空は一度なのはを見て、溜め息を一つ吐いた。

《友達とまで言われたら、流石に断れないだろう？》

璃空は、フィンに問う様に念話を返した。

フィンはそれに苦笑いを浮かべ、そのまま何も言わなくなった。

時間は戻る。

璃空は今、翠屋の扉に手を掛けながら固まっていた。

「どうかしましたか、璃空？」

フィンは若干微笑みながら、璃空に質問する。

璃空は、そんなフィンを少し睨み付けながら、

「仕方ないだろ！この扉の奥には、あの剣皇がいるんだぞ！」

そう、若干声を震わせながら返答した。

これには、流石のフィンも驚いたのか、

《大丈夫ですよ、璃空！もう、土郎さんは黒い牙の敵ではありません
んから！》

と、念話を飛ばす。

璃空はその念話を聞き、若干ひきつった笑みを浮かべ、頷いた。そして、一度深呼吸をしてから扉を開いた。

「うーん。立華璃空か。何処かで聞いたことある名前だな」

そう呟きながら、喫茶店「翠屋」の店主、高町士郎は首を捻っていた。

この時間帯は、ランチの時間も過ぎ、客も皆無と言える程にいないので、空いた時間をそんな事に費やしているのだ。

すると、突然入り口が開き、客が入ってきたのに思考を中断された士郎は、入り口に目を向ける。

「いらっしゃい」

士郎がその声を掛けると、

「ただいま！」

という、おかしな返事が返ってくるが、士郎は笑顔でその客である愛娘、高町なのはを迎えた。

「こんな時間にどうしたんだい、なのは？」

士郎は疑問符を浮かべながら、なのはに質問した。

何時もなら、なのはは翠屋ではなく、実家に帰る時間である。

それなのに、翠屋に来たという事は何かあったと土郎が思うのも、当然の事である。

しかし、なのははそんな土郎に笑顔を返した。

「うん。実はね、今璃空君と璃空君の家族の人が来てるんだ」

「それは本当かい？」

なのはは、予想外の返答をしたが、そこは流石に剣士である、全く動じずに聞き返した。

「うん。今、外で待ってるよ！二人共、晩御飯を食いたいんだって」

そう、笑顔で言うなのはを見て、土郎も自然と笑顔が溢れてくる。

「分かった。じゃあ、僕も挨拶をしたいから、二人を呼んできてくれるかい」

そして、笑顔でそう、なのはに頼むと、全く屈託の無い笑顔を返し、なのはは駆け出した。

「お邪魔します……………」

何故か璃空は、客であるにも関わらず、そんな弱腰で入店した。

「いらつしゃい」

店の中から、男性の音が響く。

璃空が恐る恐るそちらの方を見ると、そこにはまだ二十代前半とも取れる若い男性が、璃空の方を向きながら微笑んでいた。

（この人が土郎さん……………？いや、土郎さんは確か、もう三十過ぎのはずだ）

「お邪魔します」

内心そんな事を思いながらも、怪しまれないように、好意的に璃空は挨拶をした。

「初めまして。君が璃空君だね？」

璃空は、突然己の名前を呼ばれた事に少し驚くが、土郎はそれを見越していたのか、

「君の事はなのはから聞いているよ」

と、付け足した。

璃空もそれで合点がいったのか、何も言わなかった。

「久し振りですね、土郎さん」

そんな声が、璃空の背後から響いた。

土郎がそちらを向き、そこにいる人物を見て、何かを思い出した様な素振りをする。

「ああ、久し振り、フィン。御剣さんは元気かい？」

「ええ、今もご健在ですよ」

「それは何よりだ。……………立華璃空、何処かで聞いたことがあると思っただら、あの『瞬刃』だったとは」

その言葉を聞き、璃空は一瞬で顔色を真っ青にさせて、一、二歩後ずさる。

なのはは、土郎とフィンの話している事に全く着いていけずにいるらしく、無言で佇んでいる。

すると、突然フィンと話していた土郎が璃空の方を向き、璃空に話し掛けた。

「璃空君。少し話したいんだけど、良いかな？」

中編2に続く

零章第四話・中編1「剣皇の覚悟、少年の想い」（後書き）

どうも、空です。

本編、おかしな所で終わってすみません。

上手く切れる場所が見付かりませんでした。

後、最後にありましたが、次回は中編2です。すみません。

どうしても、四部構成が最低限なんです。もしかしたら、五部になるかも……………。

さて、今週末は特に忙しいので、次回は何時更新出来るかは分かりませんが、次回もよろしく願います。

最後に、これから更に物語はシリアスになります。すみません。

零章第四話・中編2「剣皇の覚悟、少年の想い」(前書き)

うっ、眠い……………。

は、はい！更新です！

またもや、こんな時間にすみません。

今回はかなり頑張りました。

まあ、文字量は前回と余り変わりませんが……………。

で、では、

『零章第四話中編2「剣皇の覚悟、少年の想い」』

始まります！

零章第四話・中編2「剣皇の覚悟、少年の想い」

「璃空君。少し話がしたいんだけど、良いかな？」

「えっ!？」

唐突に士郎は璃空に聞いた。

それに璃空は驚き、その場を沈黙が支配する。

「君に話しておきたい事があるんだ」

聴て、士郎のその言葉が沈黙を破った。

「俺に……………話したいこと？」

璃空はこれが初対面である士郎に、そんな事を言われるとは思って
もみなかったのか、かなり混乱している。

「食事の前になるけど、構わないかい？」

士郎は、そんな璃空の様子を全く気にせず、話を進める。

「えっ、……………構いません」

未だ、話の流れが掴めない璃空だったが、士郎の目には何か決意の
ような物が見て取れた。

故に璃空は、己にはそれ以外の選択肢は無いと悟る。

「じゃあ、僕と璃空君の二人で話したいから、なのは達は少しだけ

外してくれるかい？」

フィンも、士郎から何かを感じ取ったのか、何も言わずに頷いた。なのはは、少し不満そうにしていたが、迷惑になると言うことで、渋々席を外した。

「それで、一体何でしょうか、剣皇？」

先ず最初に、口を開いたのは璃空だった。

「やはり、僕の昔の事は知っていたのか……………」

士郎は、何か悲痛な物を思い出したのか、顔に暗い陰が射す。

璃空はそれを不審に思い、ずっと不思議に思っていた事を質問した。

「あなたは、何故身を退いたんですか？」

士郎に射す陰が、より一層強くなる。

璃空は、触れてはいけない事を聞いている。

そう自覚しながらも、聞かなければいけない、何故かそう感じた。場に冷たい空気が流れる。

璃空と士郎はお互いに無言のまま、その場に静寂が流れた。

「僕が話したいと言うのは……………」

聴いて、士郎が咳くように話し始めた。

璃空は、その士郎の口調に、一つ唾を呑み込む。

「……………その事に関係してくる」

そして、士郎は顔を上げ、離れた所でフィンと話しているのを見る。

「君は、なのはがどんな子かは知っているかい？」

士郎はそんな事を璃空に問うが、璃空は問いの意味が分からず、答えられずにいる。

「なのははね、本当は甘えん坊なんだ。だけど、今はそれを我慢して、人に迷惑を掛けない様になっているんだ……………」

璃空には、未だに士郎の言わんとしている事が掴めない。

「なのはがそんな風になったのは、僕のせいなんだよ……………」

その士郎の言葉を聞き、漸く話の意図が見えてきたのか、璃空は瞼を閉じ、つい数時間前の会話を思い出した。

『えつとね、似てるんだ、璃空君が……………』

『うん、……………昔の私と似てるの』

『璃空君、寂しさで凍えてた私と、同じ眼をしてたから……………』

少女は、顔に暗い陰を落とし、今にも途絶えてしまいそうな、か細い声でそう言った。

普段のなのはを知る者が、そんななのはを見れば、相当驚く事だろう。なのはは、普段から全く人に迷惑をかけないので、そんな表情をすることは無いのだから。

その時の璃空は、ただ聞いてはいけない事だと思い、その事には全

く聞かなかった。

しかし、今、目の前で、士郎がそれを話そうとしている。本当に、それは聞いても良いことなのだろうか？

璃空は、自問自答するが答えは出ず、士郎の話は続く。

「君も知つての通り、昔の僕は剣皇なんて言う二つ名で呼ばれていた」

士郎は、ただただ無感情で話す。

それはまるで、他人の事を代弁しているかのように……。

「その時の僕は、家族の事を守るため、そんな事を思いながら戦っていた……」

その時、士郎の言葉に、初めて感情が見て取れた。

怒りのような、憤りのような感情が……。

そして、士郎の「だけど」という言葉が続いた。

「だけど……、それは違った。僕は、間違っていたんだ……」

士郎は、込み上げて来る感情を押さえ込むように、一言一言を丁寧な口調で綴る。

「君には、何が間違っていたか、分かるかい？」

士郎は、突然にそう、璃空に質問をした。

突然の質問という事もあり、少し驚く璃空だったが、直ぐに冷静に思考を働かせた。

臆て、出てきた答えに、璃空は溜め息を一つ吐いた。

「すみません。俺には一体、何が間違っているのか、全然……………」

璃空は、申し訳無さそうに答える。しかし、士郎はそれに苦笑いを浮かべ、

「別に、分からない事を咎めるつもりは無いよ。それに、僕もその答えが出たのは、二年位前だったからね」

と、璃空に負担をかけないように続けた。

璃空も、その心配りが有り難かったのか、少し小さな声で礼をした。

「別に構わないよ。さて、焦らすと嫌われるから、さっきの答えを言おうか……………」

士郎は、苦笑いを止めた。そして、次の表情はもう、真剣そのものだった。

璃空も急いで表情を整え、それに答える。

「確かに、僕は家族を守っていたかもしれない。だけど、それはただ身を守るだけに過ぎなかった。家族の心までは、守れていなかったんだよ……………」

士郎の言葉から、再び感情が消えた。

「ある時、僕は致命傷と言える傷を負った……………」

士郎は、ただただ言葉を紡ぐ。

そんな士郎の様子に、璃空は少し気味が悪くなる。

(自分の事なのに、何で此処まで無感情になれるんだ?)

そして、璃空はそう思った。

「その時に言われた言葉……………」

士郎は瞼を閉じる。それはまるで、その記憶を心の中で堪能しているかの様に、璃空には感じられた。

「その時に言われた言葉……………」、『もう、傷付かないで欲しい』、その言葉を聞いて、やっと分かったんだ」

士郎は、瞼を開いた。すると、その目はもう、決意の目だった。

「こんな事をしていても、誰も喜ばないし、誰も救えない」

いつの間にか、士郎の言葉には、感情が戻っていた。

「だからもう、刀を収めよう」

丁寧に、一言一言を紡いでいく。

「そう、誓った……………」

しかし、そこまで言ったとき、士郎の顔から、今度は悲しみが浮かんできた。

「だけど、それはもう、手遅れだったんだ……………」

その場を、暗い空気が包み込む。

士郎の顔の悲しみは、一層に増していく。

「僕が怪我をしたことによって、桃子さんにかなり負担がかかってね。そのせいで、桃子さんは翠屋の仕事が忙しくなったんだ。結果的に、なのはも変わってしまった……………」

士郎は、そこまで言う顔を上げ、璃空と目を合わせた。
士郎のその瞳には、迷いや未練など全く無かった。

(この人は、一体どれだけの者を抱えているんだ……………)

璃空は、そんな事を思った。そして、士郎と戦ってみたいと……………

「まあ、僕が言いたいのは、君に何があつたかは知らないけど、君を大切に思う人は沢山いるんだ。だから、君が悲しんでいると、その人達も悲しみ、助けたいと思う。なのはもその中の一人だってことを忘れないで欲しい。

それに、君はその人達を頼っても良いんだ」

そこまで言うと、士郎は黙り、沈黙が流れた。

すると、突然に璃空が沈黙を破った。

「士郎さん……………俺と勝負をしてくれませんか？」

後編に続く

零章第四話・中編2「剣皇の覚悟、少年の想い」（後書き）

さて、という訳で、次回、璃空と剣皇が戦います。
まあ、今回の太郎の話は、原作通りだと思います。

さて、次回ですか……………。

正直、戦闘描写には、自信がありませんが、他の作者様方を参考に
して書きたいと思います。
なので、次回、

『零章第四話後編「剣皇の覚悟、少年の想い」』

をよろしくお願いします。

後、感想なんかお気軽に送って下さると、作者も非常に嬉しいです。
何か、おかしな点でも良いので、気軽に送って下さい。

零章第四話・後編「剣皇の覚悟、少年の想い」(前書き)

はい！更新です！

すみません。遅れました。

実際には、後編も二部になる予定だったんですが、これ以上延ばすのも厳しいと思い、後編は一部になりました。
では、

『零章第四話・後編「剣皇の覚悟、少年の想い」』

始まります！

零章第四話・後編「剣皇の覚悟、少年の想い」

「士郎さん……………俺と勝負をしてくれませんか？」

唐突に放たれた、その璃空の言葉に場は静寂に包まれた。

士郎の表情には、今まで浮かんでいた朗らかな笑みはなく、眼光是鋭利な刃物おぼしく鋭くなった。

「それは、君の剣士としての挑戦と取って良いかい？」

最早、士郎の声には殺気も感じられた。

しかし、璃空は全く動じずに頷き、肯定する。

「半分は……………ですが」

「なら、もう半分は？」

「……………貴方の心の強さを見てみたい」

璃空の表情に、迷いは無かった。

士郎は、誰にも悟られない程の笑みを浮かべる。

「分かった。じゃあ、今日はもう遅いから、明日に僕の家で道場で良いかい？」

士郎の表情からは殺気は消え、次にはもう微笑んでいた。

それに、璃空は頷き、承諾する。

「……………じゃあ、晩御飯にするかい？」

「はい、お願いします」

そうして、二人の剣士の邂逅は終わった。

高町家

P M 1 9 : 4 5

そこで璃空は頭を抱えていた。

（何故、こうなった？）

そんな事を璃空が思っていると、その正面にいる少女、高町なのは溢れんばかりの笑顔を向ける。

それに、璃空は若干苦笑いの様な笑みを返した。

本題に戻るが、此処は高町家である。

では、何故璃空がこのような場所にいるのか？

その答えは、今は此処にいないフィンが握っている。

そう、またもやフィンである。

では、フィンは一体どのような事を言ったのか？

それは、

『今日はもう遅いですから、璃空は士郎さんのお宅に泊まっては？』

の一言だけである。

その一言だけで、全てが決まった。

またしても、なのはがフィンの案に同調し、士郎までもが承諾した。璃空も、此処まで気を使わせた相手に断ることが出来なかった。

そして、今に至る。

「ねえ、璃空君とお父さんって何の話をしてたの？」

そんな質問に、今まで物思いに更けていた璃空の思考は引き戻される。

「ん、えっと。悪いなのは。もう一度言ってくれるか？」

璃空は若干ばつが悪そうな顔をして、なのはに謝る。

「ご、ごめんなさい！迷惑だった？」

そんな璃空の台詞に、なのは何か迷惑な事を聞いてしまったのか
と思い、謝り返す。

「い、いや。別にそう言う訳じゃ……………俺が悪いんだし……………」

そして、また璃空も謝り返す。

この二人は妙に大人びていた。

「え、えっと……………。じゃあ、さっきお父さんと何の話をしてたの？」

なのはは、若干戸惑いながらも再び璃空に質問した。

すると、璃空は少し考える様な素振りを見せ、臆て微笑んだ。

「別に、大したことじゃ無いよ。なのはの事でちょっとな」

そんな事を言い、悪戯めいた微笑みを浮かべる。

なのはは、いきなり自分の事と言われ、若干顔を赤くしながらも璃空に詰め寄る。

「わ、私の事って……………一体何の話をしてたの!」

「別に、大したことじゃ無いよ」

しかし、璃空は軽く流して立ち上がった。

それに、なのはは不思議そうな顔をする。

「どうしたの?」

「少し散歩に行ってくるよ」

なのはが疑問の声を上げるが、璃空は簡単に答え、歩き始める。

「じゃあ、私も行って良い?」

それに、なのはは数テンポ遅れて慌てながら立ち上がる。

しかし、璃空は足を止め、なのはの方を向いて、

「悪い。一人で行きたいんだ」

そう言い残し、璃空は高町家を後にした。

PM20:30

海鳴臨海公園

この時間帯、静まり返ったこの公園に、立華璃空がベンチに腰掛け、空を見上げながら、ほんの数時間前の会話を思い出していた。

『家族の心までは、守れていなかったんだよ……………』

『こんな事をしていても、誰も喜ばないし、誰も救えない』

『だからもう、刀を収めよう』

『そう、誓った……………』

(俺は、いつまでも兄貴の事で悲しんで……………)

(俺もあの人みたいに、強くなりたい)

「お前が、立華璃空だな」

物思いに更けていた璃空の耳に、突然そんな声が響いた。

璃空は急いで思考を中断し、声がした方を向く。

すると、そこには一人の蒼髪蒼瞳の青年が立っていた。

(全然気が付かなかった……………)

璃空は突然の来訪者に、大きく目を見開き、目に見えて驚いていた。

「お前が、立華璃空だな」

すると、青年は再び同じ質問をする。

「……………あんだ、何者だよ」

璃空は怪訝な表情を浮かべながら聞き返す。

「別に、名乗る程の者じゃない……………」

そこで青年は言葉を切り、空を見上げた。

そして、再び璃空に目を向ける。

「……………今はな」

青年がその言葉を放った瞬間、璃空は全身に寒気が走る。

気が付くと、璃空は前方に飛び出していた。

己の思考速度を動物的本能が超越したのだ。

そして、その場に何かが飛来し、爆発が発生した！

襲撃を受けたのだ。

「くっっ！」

爆発による余波に、璃空は目を細め、今の今まで自分がいた場所を見る。

「余所見をするな！」

しかし、そんな声が璃空のすぐ手前、眼前から轟いた。

「くっっそ！」

璃空は慌てながらも、バックステップする。すると、その僅かコンマ一秒後には、その場に巨大な大剣が振り落とされた。

大剣が地面に衝突し、行き場を失った力が爆発。大地が揺れる。

「うわっ!?!」

かろうじて回避した璃空だったが、その余りの衝撃により数メートル吹き飛ばされる。

何とか体制を整えようと、立ち上がる璃空だったが、足首に激痛が走り、悲痛に顔を歪ませる。

(くっ、足首を痛めたか)

「誰だ、お前！何が目的だ！」

しかし、直ぐに怒りの表情になり、青年を睨み付ける。

だが、青年はその璃空の言葉を無視。

大剣を上段に構える。

すると、大剣に纏わりつく様に紫電が発生。

どンドン光を増していく。

「ちっ！村雨！」

青年にワントンが遅れて、璃空は己の相棒の名を叫ぶ。

すると、それに呼応するように、一瞬の内に璃空を漆黒の衣が包み込んだ。

バリアジャケットを展開したのだ。

「心力、解放！」

璃空は叫んだ。

すると、璃空を中心に風の渦が発生する。

そして、璃空は更に叫ぶ。

叫ぶは、己の剣派、天動流の始まりの太刀にして、神速の一刀。

「天動流、一ノ太刀……………」

璃空の脚がブレ始める。

更に、璃空を包む渦は強さを増し、更に、ブレが強くなる。そして、

「神騎！」

叫んだ。

その瞬間、璃空は消失し、青年は雷光纏う大剣を振り落とした。

一 斬 一

全ては一瞬だった。

その一瞬の後、璃空は膝を付き、己の体を見て絶句する。

肩から腰までの間から、大量の血が流れ出していた。

青年の斜めに放たれた一撃は、璃空の神速の一刀を弾き、そのままに璃空を一刀したのだ。

璃空は大量の血が流れ、全身に寒気が走るのを自覚する。

しかし、村雨が己の意思で止血を行ったのか、初めのおびただしい量の出血も、段々と少なくなっていく。

だが、青年はそれを待つてはくれなかった。

再び掲げられる大剣。

その拍子に、大剣に付いた璃空の血が滴り落ちる。

朦朧とする意識の中、璃空は走馬灯を見た。

『今のお前では分からない。……………お前程度では、何も見えはしない』

『お前は助けてやる。……………生き延びるが良い。惨めに醜く。そして、強くなれ』

『俺の名は……………』

『ダンテ、……………俺の名は、ダンテだ!』

(結局、俺は何も出来ないまま、何も見え無いまま……………終わるのか)

そして、大剣は振り落とされた。
璃空は死を覚悟し、瞼を閉じる。

キーンー

しかし、大剣の行く手を阻む者がいた。

「何とか……………間に合ったね」

璃空の耳に、璃空の耳に甲高い鏝迫り合いの金属音と共に、そんな声が届いた。

璃空はゆっくりと瞼を開く。
すると、そこにいたのは……………。

「し……………るつ、さん?」

そこには、高町士郎が両手に持つ小太刀で、大剣の斬激を防いでいた。

「大丈夫、とは言わないけど、無事で何よりだ」

「な……ん……で……くっ！」

突然現れた士郎に、疑問の声を上げようとする璃空だったが、体走る激痛に悲痛の声を上げる。

「璃空君！？……くっ！」

璃空の悲痛の声を聞き、意識を璃空に移し過ぎた士郎は、更に力を増した大剣に顔を歪ませる。

「誰だか知らないけど、邪魔をするんだったら……」

青年は力を強めながら、淡々と告げる。そして、

「容赦はしない！」

そう叫んだ。

すると、

「ぐはっ！？」

突然、そんな叫び声が轟いた。

その場にいる誰もが、何が起きたのか分からなかった。突然、青年が吹き飛ばされたのである。

「それぐらいにしておけ、ラクス」

そんな声が静寂に包まれた公園に響いた。

士郎は突然の事に、訳が分からず声のした方を向く。

すると、そこには銀髪紅瞳の少年が、片手に純白の大剣を持ちながら佇んでいた。

「君は……………一体」

展開に全く着いていけない士郎は、突然の来訪者に声を掛けた。
しかし、

「うおおおお！」

「っ、璃空君!？」

突然、璃空は叫びを上げながら少年に向かって駆け出した。

「それ位にしておけ、ラクス」

暗い静寂に包まれた公園に、一人の少年の声が木霊した。

そして、その声は璃空の耳にも届く。

親しく聞き慣れた、懐かしいその声が……………。

「あ……………に……………き？」

誰にも聞こえない程の声で、璃空はそう呟いた。
そして、璃空の目が突然の来訪者である少年の姿を捉えた。

「あに……き」

璃空は己の内では何かが進るのを感じる。

璃空がその正体に気が付くまで、数秒の時間を要した。

璃空の中に進むもの、それは吹雪に対する怒りや恐怖だった。

そして、その正体に璃空が気付いた時には、その感情は璃空に抑えきれぬ限界を越えていた。

気が付いた時には、璃空はもう吹雪に向かって駆け出していた。

「うおおおお！」

「っ、璃空君!？」

一郎が璃空を止めようとするが、時既に遅し。

もう、璃空と吹雪の距離は数メートルと無かった。

「兄貴い！」

「っ!?!……………まさか、彼はあの剣竜か!？」

そして、一郎は気付く。

その少年が、剣竜と恐れられた少年、立華璃空の兄の立華吹雪であることを。

一郎は駆け出した。

間に合わないと分かっているにもかかわらず、それでも走り出した。

「駄目だ!璃空君!」

士郎は叫ぶ。起こるであろう最悪な現実を忌避するように……。しかし、璃空は止まらなかった。既に起きてしまった現実を、己と吹雪との因縁に決着を着けるために。

最早、璃空と吹雪の距離は数歩と無かった。

璃空は刀を下段に構え、叫ぶ。

「四ノ太刀……………」

下段に構えられた刀を、心力の蒼白な光が包み込む。

しかし、吹雪は何も動じずに左足を一步踏み出す。

そして、右手を引き絞る。

すると、その右手を覆う様に、真紅の心力が包み込んだ。

「……………瞬刃！」

そして、璃空は叫び、一刀を繰り出した。

それとほぼ同時に、吹雪は右拳を繰り出す。

公園内を蒼白な光と真紅の光が駆け抜ける。

そして、軍配は吹雪に上がった。

璃空の一刀を吹雪は避け、互いの力をそのままに吹雪の拳が璃空の鳩尾に入った。

そして、吹雪はその技の名を呟く。

「天動流無手、五ノ太刀、絶焼・爆」

瞬間、公園に真紅の光が走った。

「ぐはあ！」

璃空の鳩尾に入った拳は、真紅の炎を収束、爆発し、璃空は数十メートルを吹き飛ばされる。

「この程度か……………。弱いな、璃空」

吹雪は、見下すようにそう告げた。
それに、ラクスは溜め息を一つ吐く。

「はあ、ただ一人の弟に対しても容赦無しか……………」

そのラクスの言葉に、吹雪は無表情。

それどころか、吹雪はラクスの方すら向いていなかった。
吹雪の見詰める方向、そこには、

「まだ、終わってねえぞ」

璃空が刀を杖がわりにして、立ち上がっていた。

「俺は、あんたに復讐するまでは……………」

そして、再び璃空を心力が包み込んだ。

しかし、今度の心力の量は膨大で、それはまるで、璃空自信を燃やし尽くしている様だった。

「終われないんだ！」

その璃空の叫びに呼応して、更に心力が強さを増す。

『マスター、止めてください！このままでは、貴方の体が！』

それを見て、危険と判断した村雨が停止を呼び掛ける。

しかし、今の璃空には何も聞こえていないらしく、心力はまるで激流の様にまで強さを増した。

「天動流、」

そして、刀を上段に構える。

璃空の纏う膨大な心力が刀に流れ始める。

躰で、璃空は呟く。

「南方ノ陣、」

己の……………、

「炎牙！」

最高にして、最強の一撃の名を！

そして、璃空の叫びと共に刀は降り下ろされた。

刀に流れる膨大な心力の全てが炎となりて、吹雪に襲いかかる。

それはまるで、世界の全てを焼き尽くすかのように。

だが、吹雪はそれに全く動じずに己の大剣に心力を纏わせる。

「ふんっ！」

そして、横風ぎに一閃。

ただのその一閃のみで、璃空の放った炎牙は跡形もなく掻き消えた。

そして、その炎と同じ様に璃空の意識も途絶えた。

第五話に続く

零章第四話・後編「剣皇の覚悟、少年の想い」（後書き）

はい！やっと此所まで来ました。

いやあ、実に長かった。

はい、次回からやっと話が進みます。

まあ、ただ無印よりも少し前ぐらいまで進むだけですが……………。

すみません。また時間が飛びます。

それと、今回出てきた技については、一通り技が出たら番外編などで説明します。

では、また次回！

零章最終話「目覚めた想い」(前書き)

璃空

「さあ、作者。今日が何日か分かってるよな？」

えっと……………。四月十一日ですか？

璃空

「違う！十二月二十五日だ！」

すみません！遅れました！

璃空

「ふん、じゃあ覚悟は出来ているんだろうな？」

へっ？一体何を……………。

璃空

「さあ、歯を食い縛れ！」

ちよ、待った！

璃空

「問答無用！天動流、五ノ太刀・絶焼」

グハア！

璃空

「さて、うるさい作者も黙った所で………」

龍耶

「零章最終話」目覚めた想い「始まります！」

璃空

「って！龍耶、お前！」

幕

零章最終話「目覚めた想い」

「俺にとって、兄貴は全てだった……………」

「どんな時も、傍にいてくれて」

「何時も俺を守ってくれた」

「俺は、そんな兄貴が大好きだった……………」

「だけど、それは全部俺だけの思いで……………」

「兄貴は、俺に全てを与えてくれて……………」

「そして、それら全てを壊した……………」

「それからの俺は、全てを拒絶した。……………己の存在すらも……………」

……………」

「ずっと過去に囚われていたんだ……………」

「だけど、なのはと出会い、僅かだけど、確かに光明を見た」

「なのはは、全てを失った俺に、笑い掛けてくれたんだ」

「それなのに、俺はいつまでも過去に縛られて……………」

「いつしか、俺は兄貴の事を恨んでいたんだろう」

「あの時、兄貴と再会して……………」

「俺の心は、怒りと憎しみで支配された」

「それまでは全く感じなかった感情」

「俺は……………、復讐者なんだ……………」

新暦62年・4月10日

AM6:40

「あー、ダルい！」

眠りから目覚めた璃空の第一声は、そんな気の抜けた言葉だった。

『目覚めの言葉がそれとは、どうかと思いますよ』

「ん、居たのか村雨」

そして、そんな璃空にすかさず突っ込みを入れるは、璃空の相棒である村雨。

普段は誰に対しても礼儀正しい村雨だが、こういう時には突っ込みを入れる。

『ええ、ずっと傍に居ましたよ。この”二日間”』

「ちょっと待て！今、二日って言ったか？」

村雨の言葉に引つ掛かりを感じた璃空は、若干焦りながらも質問を返す。

それに村雨は溜め息の様な音をたて、暫くしてからまた点滅を開始した。

『ええ、貴方はこの二日間眠り続けましたから。私は御剣さんに頼まれて貴方の様態を見守り続けましたよ……………』

村雨の言葉はどんどん小さくなっていった。

恐らくは、メンテナンスをしたいにも出来なかったからだろう。

そんな村雨の様子に、璃空は申し訳無さそうに一言だけ謝りを入れた。

『まあ、良いですよ。なんなら、貴方のこの二日間の眠っている映像が有るので観ますか？寝顔が可愛いですよ』

「……………一度お前の全データをバックアップした方が良さそうだな」

『……………オホン、まあ、「冗談はさておき』

「……………」

璃空の冗談の様な言葉に、殺気染みた物を感じた村雨は、急いで話を切り替えた。

『体が不調なのは当然です！貴方は御自分のやったことを分かっているんですか？』

いきなり声色を変えた村雨に場の空気が一転した。

場に暗い空気が流れる。

「ごめん。心配掛けたよな」

「そうだね。心力は心の力、使い過ぎれば心がダメージを受ける」

「御剣さん!？」

すると、突然御剣が現れ、驚きの声を上げる璃空。

そして、璃空は部屋を見渡し、今自分が居る場所が何処なのかに気が付いた。

「此処は……………御剣邸ですか？」

「ああ、大怪我を負った君を士郎くんが運んで来てくれたよ」

御剣のその言葉に顔を暗くし、俯く璃空。

「俺は、あの時兄貴が現れて、自分の気持ちを抑えられ無くて……………。士郎さんにも迷惑掛けて……………」

「そうだね。あの状況での炎牙は最悪の行動だ。士郎くんにも被害が及ぶだろう。それに、近隣の住宅街にも多大な被害が出る……………。結界が張られていなかったからね」

「結界が?……………あっ!」

その御剣の言葉に、璃空は額に指を当て、あの時の事を思い出す。

「結界は特定の対象が逃げない様に結界内に閉じ込めるもの……………」

……だけど、それが張られていなかった」

「ああ、そしてなによりあの場に土郎くんが現れたのがその証拠だ」

「何故、結界を張らなかつたんだ？」

璃空は考えるが、全く答えが出ず、苦い顔をする。

御劔も同じな様で、場を静寂が支配した。

「……まあ、この話はまた今度にしよう。それよりも、今の君にはやらないといけない事がある」

その御劔の言葉に璃空は頷く。

「土郎さんに謝らないといけませんね」

「いや、土郎くんだけでなく、なのはさんにもだ」

「えっ!？」

その突然の言葉に、璃空は大きく目を見開き御劔を見る。

「今、なのはって？」

そして、聞き返す。

その御劔の言葉の真意を。

「ああ、なのはさんはあの後、璃空君が帰って来ない事に泣いていたそうだよ」

「なのはが……」

「まあ、今日はゆっくり休んで、明日謝りに行くと良い」

「分かり………ました」

璃空は俯き、それ以降は誰も言葉を発しなかった。

四月十一日

この日、璃空は士郎に二日前の事を謝った。

士郎も心力の事や迷刃事件の事を知っていた様で、ただ一言だけ、

「自分を大事に下さい。君を大切に思っている人は、君が思っているよりもたくさん居るんだよ」

と、璃空に告げ、喫茶翠屋の業務に戻った。

次に、璃空は高町家に向かった。

璃空の足取りは重たい。

事前に士郎からなのはの様子を聞いていたからだ。

それによると、なのはは塞ぎ込んでしまい、誰とも話さなくなったという。

そして、高町家に着いた時、璃空は異様な程の殺気を浴びた。

「恭也さん………」

璃空はそう言い、向いた先には高町恭也が居た。
凄まじい殺意を放ちながら。

「なのはに会いに来たのか？」

恭也の殺気がより一層強くなる。

その中には、何か別の感情も込められている様に璃空には感じられた。

そして、その何かが分かってしまい、璃空は悲痛に顔を歪める。

「何故、お前はそんなになのはを傷付ける」

「今日は……………なのはに謝りに来ました」

そして、今にも飛び掛かりそうな程、恭也の殺気は強くなる。

「俺は、お前が許せない。それに、自分が許せない。なのはを傷付けたのはお前だ。だけど、……………なのはを癒せるのも、お前だけだ……………」

「……………」

璃空には何も言えなかった。それ程までに恭也の気持ちが分かってしまったから。

璃空にも兄弟関係で辛い過去がある。

それ故に、恭也の気持ちがあつてしまう。

「早くなのはの所に行つてやれ」

「はい」

もう、交わす言葉は無いという風に、恭也は立ち去っていった。

璃空も恭也を振り返る事は無く、なのはの元に向かう。

そして、その数秒後には、璃空は駆け出していた。

璃空はなのはの部屋の扉の前に着いた。
が、中からは何も聞こえない。

（なのは……………大丈夫か？）

そして、璃空は気持ちを落ち着かせ、中の気配を探る。
すると、中で何か動く気配を感じた。
その場所からして、恐らくはベッドの辺りだろう。
そして、璃空は深く深呼吸をして、扉をノックした。

「なのは、俺だ！」

すると、今まで静寂に包まれた空間にドタドタという音が響き渡った。

そして、ゆっくりと扉が開き、中から突然なのはが飛び出してきた。

「うわっ!?!」

突然の事に対応が遅れた璃空はそのままの勢いで崩れる。

「なのは、いきなりなに……………しや……………が……………る……………」

璃空がなのはを叱ろうとした時、なのはが涙していた事に気付き、
璃空は言葉に詰まった。

「うっ、う、り……………く……………君……………」

「ごめん。なのは……………」

そして、二人はただただ無言のまま、時間が過ぎていった。

それから、一時間後。

やっとなのは泣き止み、二人はこの日初めての会話を交わす。

「璃空君が……………帰って来ないから、私、心配で……………」

「ごめん。心配掛けたよな……………」

「うん……………」

二人は俯き、沈黙が流れた。

そして、突然璃空は顔を上げ、なのはと向かい合う。

その顔には、信念の様な物があった。

「なのは……………顔を上げてくれ」

璃空がそう言うと、なのはは少しビクツと反応したが、臆てゆっくりと顔を上げた。

「な、何？」

そして、少し怯えた様な声で聞き返す。それに、璃空は笑って見せた。

その笑顔は、なのはの暗い心を癒していく。

「俺は、もうお前を泣かせたりしない。お前を泣かせる奴は、俺がぶっ飛ばす。だから、……………笑ってくれ」

璃空のその言葉は、塞ぎ込み、凍り付いていたなのは心を完全に溶かした。

「り…く……………君…。うわああん！」

それからなのは、涙が枯れるまで泣き続けた。

T o b e c o n t i n u e d

零章最終話「目覚めた想い」(後書き)

やっと零章が終わりました。

本当に長かったです。

さて、次回は幕話となりまして、その次から無印に入ります。
では、次回、

『幕話「騎士と剣士」』

をよろしくお願いします。

幕話・第一話「騎士と剣士」(前書き)

ハハハ、やっとこさ更新です。

っ、疲れた……………。

今話で初めて一万文字を越えましたから……………。

後、活動報告でも予告したなのは用語のコーナーは最後にあります。
若干のネタバレはありますが、
では、

「幕話・第一話『騎士と剣士』」

始まります！

幕話・第一話「騎士と剣士」

四月十日の吹雪の襲撃から翌日、璃空は御劔の、

「暫くは黒い牙を抜けなさい。君には療養が必要だ。

……………心も体も」

という一言により、暫くは黒い牙を抜ける事となった。

そして、それから璃空はなのはと毎日の様に会い、段々と璃空にもなのはにも笑顔が戻って来ていた。

そして、同年の七月五日、璃空は黒い牙に復帰し、それから忙しい日々が続いた。

これはその中の一日の話である。

「あー、眠い！」

今、立華璃空は黒い牙の任務により、とある管理外世界に来ていた。

この世界の気候は、比較的に年中が温暖で、多種に渡る生命体が繁栄している事で有名である。

しかし、魔法文化は皆無であり、それ故に管理外世界に定められている。

では、今回の璃空の任務は一体どの様なものなのか？

「なあ、村雨。混沌の欠片は見付かったか？」

混沌の欠片の探索だった。

混沌の欠片は、その性質上、どんな世界にも存在するため、今回は璃空がこの世界に来ていた。

『今、探索中です。……………見付けました！此処から北西に五キロ程です』

「ん、じゃあ、さっさと終わらせて帰るか」

璃空は村雨の報告に頷き、バリアジャケットを展開、目的の場所に飛び立った。

時を同じくして、その世界に一人の壮年の男性とまだ年若い女性が来ていた。

「良い所ですね、ゼスト隊長」

女性が壮年の男性、ゼストに話し掛けた。

すると、ゼストは少し難しそうな顔となり、その顔を見た女性は少し微笑む。

「隊長はよせ、メガーヌ。今日はお前とクイントが休暇を取りたいと言っから来たんだぞ！」

「フッフ、そうでしたね、ゼスト」

ゼストの言葉に女性、メガー又は笑みを溢し、今度は名前を呼び捨てで呼ぶ。

すると、突然呼び捨てで呼ばれた事に驚いたのか、ゼストは少し顔を赤くする。

「お前に呼び捨てで呼ばれるのは新鮮だな。……………そう言えば、クイントはどうした？」

照れ隠しにそっぽを向くゼストだったが、今此処に居る筈の人物、クイントが居ない事について、メガー又に見つけた。

「フッフ、さあ、どうしたんでしょう？」

「そ、そうか」

明らかに何かを隠している様な素振りを見せるメガー又に見つけたゼストは疑問に思うが、あえて追求するのは止めた。

二人の間に和やかな空気が流れる

しかし、そんな時間も長くは続かなかった。

突然、二人に緊急の通信が入ったのである。

通信相手の名前を見て、二人は溜め息を吐く。

そして、直ぐに真剣な顔つきになり、通信を開く。

『報告します！ゼスト一尉』

通信を送ってきたのは、まだ年若い青年の管理局員だった。

恐らくはこの世界の警備が管轄の局員なのだろう。

ゼストは今は休暇中である。

そんなゼストに緊急の通信を入れるという事は、この世界で魔法絡

みの事件が起こった事に他ならない。

ゼストとメガー又は直ぐにバリアジャケットを展開し、報告を聞く。

『只今、その世界で大規模な魔力反応を確認しました！』

(成る程、わざわざ俺達に通信を入れるという事は、それだけ大きな反応なんだな)

その報告にゼストは黙って頷く。

そして、青年は更に報告を続ける。

『恐らくはロストロギアと思われます！』

今そちらに位置情報を送りました！』

青年の報告にもう一度頷き、ゼストは己の端末を開いた。

(位置は此処からさほど離れていないな)

そして、青年に了承を伝え、ゼストは通信を切った。

「休暇は返上だ、メガーヌ。今からその魔力反応の捜査に向かう」

ゼストの言葉にメガー又は無言で頷き、二人もまた飛び立った。

「なあ、村雨。ターゲットはあれで良いんだよな？」

『間違いないと思いますよ。……………恐らくは混沌の欠片が複数寄

り集まったせいでしょう』

璃空は目的の場所に着いていた。

しかし、着いて早々に大きな溜め息を吐く。

それは何故か……………」。

「へえ、混沌の欠片が集まると厄介だったのは聞いてたけど、まさかこれ程までとは……………」

全長が数十メートルは有るであろう、巨大な大蛇がそこに居たからである。

更に硬質化した鱗は、差し詰め金属の鎧と化し、サーベルタイガーの様に剥き出しになった牙からは、最早硫酸の様な唾液が滴り落ちていた。

『今回は流石に不味いですかね？

応援を呼びますか？』

流石に危険と判断したのか、村雨が応援要請をしようとするが、璃空がそれを手で制する。

「待った！大丈夫、俺一人で十分だ」

『しかし……………」

璃空の無謀としか言えない行為に、反論をしようとする村雨だったが、途中で言葉を切る。

最早、璃空は敵に意識を集中し過ぎる余り、村雨の言葉が耳に入っていないかった。

こういう状態の璃空には、もう何を言っても意味がない事を村雨は

知っていた。
故に、途中で言葉を切る。

『危なくなったら、直ぐに離脱してくださいよ？』

その声が璃空に届いていないとしても、村雨は最後にそう念を押した。

これも、村雨の主を守りたいという気持ちの表れなのだろう。だが、璃空は一度も頷きもせず、深呼吸をする。そして、

「心力……………解放」

そう呟いた。

次の瞬間には、璃空を中心に風が巻き起こり、璃空を包み込み、破裂した。

もうそこには、先程の幼さの残る少年はおらず、ただ異様な空気を醸し出す少年が佇んでいた。

少年、立華璃空の存在に気付いたのか、大蛇が雄叫びを上げ、少年に突進を繰り返す。

その突進は、まるで巨人の拳の様に、璃空に向かう。その突進が当たれば、即死は免れないだろう。

しかし、璃空は抜刀の構えを取り、それ以外は何一つ身動きを取らなかった。

大蛇が豪風を纏うて轟音を響かせ、璃空に迫る。

そして、あわや璃空に激突するという寸前に変化は起きた。

璃空が消えたのである。

始めからそこに居なかったかの様に、もう璃空の姿はそこには無かった。

そして、次の瞬間、更なる異変が起きた。

― 斬 ―

大蛇が気が付いた時には時既に遅し。大蛇の体には、無数の傷痕が出来ていた。

【グガアアア！】

最後の力を振り絞り、大蛇は雄叫びを上げるが、直ぐに糸が切れ、たように雄叫びが止み、大蛇は大地に伏した。

次の瞬間には、璃空は大蛇の背後に現れ、何時抜いたかも分からない刀を鞘に収め、一言呟く。

「天動流、一・四ノ太刀、神騎・瞬刃」

キンツという刀が鞘に収まる独特の音が辺りに響き渡る。

そして、場は今まで死闘が行われていたとは、思えないほどの静寂に包まれた。

璃空は一度深呼吸をして、振り返ろうとした瞬間、

『マスター、危ない！』

という村雨の叫びが響いた。

まだ息のあった大蛇が、最後の力を振り絞り、巨大な尻尾を璃空に振りかざしたのである。

突然の事に反応が遅れた璃空は、防御も回避もままならず、ただ大蛇の一撃の衝撃を待つ。

だが、更なる異変が起きた。

その場に居る璃空や大蛇にすら予想だにできなかった異変が。

「フルドライブ」

突如、そんな叫びが木霊し、次の瞬間、

戟
ー

璃空に迫っていた尻尾が、突如として攻撃を受けたのである。

突然の一撃に耐えきれ無かった尻尾は、そのまま大地に激突する。

最後の―撃を斬り伏せられた大蛇は、最早叫ぶ事も出来ずに息絶えた。

「大丈夫か、少年」

事の次第が掴めず、璃空が状況を把握しようとしているところに、大蛇を斬り伏せた壮年の男性が声を掛けてきた。

186

時間は少し戻る。

「ゼスト隊長！あそこに巨大な大蛇がいます！」

今、ゼストはメガーヌと共に、突然発生した事件の調査を行っていた。

すると、メガーヌがゼストに報告をする。

ゼストはそれに頷き、大蛇の方へ飛行を開始した。

「でかいな。やはり、ロストロギア関連か……………」

ゼストが己の意見を述べる。

メガー又はそれに頷き、ゼストの考えを肯定する。

次の瞬間、大蛇は何かに気が付いたのか、突然雄叫びを上げ、あの方向に突進を繰り出した。

二人は最初、疑問符を浮かべるが、大蛇の進行方向を確認し、絶句する。

なんと、そこには一人の少年が佇んでいた。

何も身動きも取らず、ただじつとそこに……………。

ゼストやメガー又は、最初は少年が大蛇に気が付いていないのかと思った。

しかし、大蛇は少年の正面から、凄まじい轟音を響かせて迫っている。

その考えは捨て、二人は更に飛行速度を増す。

だが、無情にも、大蛇の方がゼスト達よりも速度が勝っていた。

「危ない！」

少年に大蛇が激突する瞬間、メガー又の叫びが響いた。

ゼストも歯ぎしりをして、来る瞬間を待つ。

しかし、突如として異変は起きた。

突然、少年の姿が掻き消えたのである。

「なっ、なに!？」

メガー又が驚愕の声を上げる。

すると、突然ゼストが飛行魔法を中止した。

「どうしたんですか、ゼスト隊長？」

突然のゼストの行為に、慌ててメガーヌも飛行魔法を中止して、ゼストに疑問の声を上げる。

しかし、ゼストは全く反応を見せず、ただ佇んでいた。すると、突然、

【グガアアア！】

突然、辺り一体におぞましい叫びが轟いた。

それにメガーヌは驚き、叫びの響いた方を見る。

すると、そこには先程まで全くの無傷だった大蛇が、全身に傷を負い、叫びを上げていた。

メガーヌは驚愕に目を見開く。

一体誰があのような事をするのか？

大蛇の硬質化した鱗は、並大抵の攻撃では傷すら付かないだろう。

その大蛇が全身に傷を負っているのだ。

それも、何時付いたかも分からない一瞬である。

メガーヌが驚きに目を見開いていると、唐突にゼストが呟いた。

「天動流剣術だと……………」

ゼストは驚愕に目を見開いた。

それは、あの天動流の太刀に見覚えがあったからである。

「どうしたんですか、ゼスト隊長！」

再びメガーヌはゼストに声を掛けるが、ゼストは尚も無言のままに佇んでいた。

一瞬の沈黙が流れた後、徐にゼストが口を開く。

「嫌な予感がする。急ぐぞ、メガーヌ」

それを言い終わる前にゼストは再び飛行を開始した。

ゼストの行動に疑問符を浮かべたままのメガーヌだったが、突然のゼストの言葉に、同じく飛行を開始した。

「助けてくれたのは礼を言う。だけど、あんたは何者だ？」

璃空は突然現れた壮年の男性に、若干殺気は染みた視線を送る。男性も警戒しているようで、手に持つ槍に力を込めながら答える。

「俺は時空管理局の者だ。今、お前が対峙していた大蛇について、詳しい話を聞きたい」

男性が管理局員という事に、璃空は更に殺気を強め、今度は男性を睨む。

「管理局員には……………余り見えないが？」

璃空の放ったその言葉は、余り意味を持たない。璃空とて、それは重々承知している。

しかし、男性はその璃空の言葉に苦笑いを浮かべた。

「すまん。丁度休暇中だったものでな」

男性は苦笑いしながらそう言うが、一切の隙を見せなかった。

璃空はそれに舌打ちをする。

今の会話は一見して、ただの会話に見えるが、璃空にとってはかなりの収穫があった。

その会話は、男性が相当の手練れだという事を露見していた。

「詳しく話を聞きたいから、俺達の元に来てくれないか？」

その発言は、璃空にとっては最悪な事である。

男性の言葉の真意は璃空の連行である。

ただ単に、事情聴取だけだとしても、秘密組織、黒い牙の一員である璃空には、それは最悪な事だった。

璃空は男性の言葉に答えず、ゆっくりと己の刀の鞘に手を掛けようとした時……………。

「バインド！」

そんな女性の声が響いた。

そして、次の瞬間には、璃空をバインドが捕らえていた。

「くっ、もう一人居たのか……………」

突然の事に回避が遅れた璃空は、何とかしてバインドから抜け出そうともがくが、抜けられない。

璃空がそうしている間に、もう一人の女性が、男性の傍に降り立った。

「大丈夫ですか、ゼスト隊長？」

女性が男性、ゼストに声を掛ける。

ゼストはそれに頷き、璃空に近付く。

だが、璃空まで数メートルという所で、ゼストは違和感を覚える。

それは、バインドで拘束されている璃空が、笑みを浮かべていたからである。

「何が可笑的い」

ゼストが璃空に問うが、璃空は無言。

そして、暫く経った後、徐に璃空が口を開いた。

「魔力変換資質『闇』、発動」

璃空がそう言った瞬間、璃空を拘束していたバインドが漆黒に染まり、次の瞬間には跡形もなく消滅した。

「何!？」

ゼストを始め、メガーヌが驚愕の表情を浮かべる。

メガーヌは優秀な魔導師である。

そのメガーヌのバインドを、何の挙動も見せずに璃空は破ったのだ。幾ら優秀な魔導師であろうと、そんな事を誰が出来るだろうか？それを、璃空はやってのけたのである。

二人が驚きを隠せないで居ると、璃空が一步前に踏み出した。ゼストとメガーヌは身構える。

「そこを動くな！」

ゼストが威圧するが、璃空は尚も止まらない。

「止まりなさい！ガリユー！」

場の雰囲気吞まれたメガーヌが、焦った様に叫ぶ。

すると、メガーヌの隣に魔方陣が現れ、そこから全身を甲殻で覆われた人形の虫が現れた。

「くっ!?!」

突然現れたガリユーに驚く璃空。

それを見越したかのように、ガリユーが更に変形を開始し、ガリユーの腕から鋭利な刃物のような物が現れた。

璃空とガリユーはお互い身動き一つ取らず、相手の出方を伺う。一触即発の空気が流れる。

そんな中、先に動きを見せたのは……………。

「天動流、二ノ太刀……………」

璃空だった。

それを合図に、ガリユーも一步を踊り出す。

璃空も一步を踏み出し、刀を抜刀する。

「絶覇!」

璃空の神速の抜刀によって放たれた高速の斬撃が、大地に痛々しい傷痕を残し、ガリユーに向かう。

ガリユーもそれを迎え撃つべく、両の手を交差させて防御の体制を取る。

そして、斬撃とガリユーがぶつかり合い、辺りにその衝撃波を撒き散らす。

段々と斬撃の威力に押され、ガリユーが後退する。

そして、何とか斬撃を耐えきったガリユーは、息も絶え絶えに膝を付き、璃空を睨む。

だが、無情にも璃空はガリユーに次撃の構えを取っていた。

ガリユーはそれを見て、何とか体制を立て直そうと、立ち上がるが、立ち上がれない。

「チェーンバインド！？いつの間に！」

メガーヌが叫び、ガリユーは己の足を見ると、ガリユーの足はいつの間にかバインドで拘束されていた。

ガリユーがバインドを引き千切ろうともがくが、かなり強固に作られたバインドは切れない。

ガリユーがバインドが千切れないと悟ると、再び璃空を睨む。

そして、それを待っていたかのように、璃空が呟いた。

「天動流、一ノ太刀……………」

璃空のその言葉に呼応するように、璃空の脚がブレ始め、どんどんと強くなる。

そして、視認すら難しくなる程に璃空の脚がブレた時、璃空はその技の名を呟いた。

「……………神騎」

その瞬間、璃空の姿が消え、ガリユーが大きく目を見開く。

そして、次の瞬間には、再び璃空が姿を現した。

ガリユーの目の前に……………。

バインドで拘束されたガリユーは、ろくな防御も出来ずに目を瞑る。そして、璃空は神速の一刀をガリユーに繰り出した。

「そこまでだ！」

「ぐあつ!?!」

しかし、その璃空の攻撃を阻む者がいた。今まで沈黙を守り続けていたゼストである。

璃空が一刀を繰り出した瞬間、ゼストががら空きになった璃空に、魔力強化した拳を打ち込んだ。

璃空はガリユーに気を回し過ぎていたせいか、ゼストの不意打ちを、全く反応を出来ずに受けてしまう。

璃空は一抹の悲鳴を上げ、そのまま後方に十数メートル吹き飛ばされた。

そして、やっとバインドから解放されたガリユーが、再び璃空に対して臨戦の構えを取るが、何故かゼストに制止される。

「待った、ガリユー、メガーヌ。俺に少し話をさせてくれ」

ゼストが突然そんな事を言い出すので、メガーヌは疑問符を浮かべるが、ゼストの指示に従い、ガリユーを下がらせる。

ゼストはそれに一つ頷き、先程の衝撃に動けない璃空に向けて言葉を放った。

「お前、御剣さんの弟子だな?」

ゼストが放った言葉に、璃空は驚きで目を見開く。

それを肯定の証と取ったゼストは、更に言葉を続ける。

「そうか。……………なら、連行はしない」

ゼストのこの発言には、今度はメガーヌが大きく反応した。

「ちょっと待って下さい!それは、どういう意味ですか!?!」

メガーヌが驚きの声を上げるが、ゼストはそれを手で制した。メガーヌは、最初はゼストに抗議の声を上げていたが、暫くすると唸りながらではあるが口を閉ざした。ゼストはそれに少し苦笑いを浮かべる。すると、今度は璃空の方から話し掛けてきた。

「あなた、一体何者だ？」

「御剣さんの一番弟子と言えば分かるか？」

まるで、璃空の言いたい事が分かっているかのように、ゼストは即答した。

それには璃空も驚いたのか、そうかとだけ言って、後は何も言わなくなった。

そして、ゼストは更に言葉を続ける。

「お前の事情は分かった。だから、早く立ち去れ。……………もうすぐ此処に管理局員が来る」

ゼストは簡潔に璃空に言う。

璃空もそれが有り難かった事なので、たった一言だけゼストに聞いた。

「あなた、名前は？」

唐突に放たれた璃空の言葉に、ゼストは微笑を浮かべながらも答える。

「ゼスト・グランガイツだ。そして、此方がメガーヌ・アルピーノ

だ
」

ゼストが軽く自己紹介をすると、璃空は転移魔法を発動させて、ゼストを見る。

「俺は、立華璃空だ」

そして、璃空も自己紹介をする。
ゼストもそれに頷き、最後の言葉を放った。

「そうか。では、また何時か出会えると良いな」

ゼストの言葉に璃空は微笑み、軽く頷いてから、璃空は転移した。

璃空

「立華璃空と……………」

龍一

「藤堂龍一の……………」

璃空／龍一

「なのは用語、不思議発見！」

—————

龍二

「って待て！何だよこれは！」

璃空

「五月蠅い！いきなり叫ぶな！」

龍二

「ああ、すまん。………ってそれよりもこれは一体なんだよ！」

璃空

「何だって、いまお前もオープニングコールしてたじゃないか！馬鹿かお前は」

龍二

「馬鹿って………。そんなの知るかよ！何も聞かないでこれを読めって言われたから、言っただけだぞ！」

そう言って、龍二は一枚の紙を取り出す。

璃空

「あー、成る程」

龍二

「な、成る程って何だよ」

璃空

「それは、あれだよ。ほら、外伝の時のあれ」

龍二

「あれって………。あつ！まさかまた俺だけ聞いてなかったのか

「？」

璃空

「そういう事だ。まあ、気にせず行こう」

龍二

「って、気にせずって何だよ！他人事だと思って！」

璃空

「あー、分かった。次はちゃんと作者に言っただけ聞かせとくから」

龍二

「ん、まあ、……………分かった」

璃空

「んじゃ、さっさと次行くぞ！」

龍二

「ああ、分かった。では、最初は……………」

璃空

「今話の振り返りだな。龍二、今話はどつだった？」

龍二

「どつって言われてもなあ……………」

璃空

「まあ、あんな終わり方じゃあな。ゼストと戦うのかと思いきや、そのまま和解だから……………」

龍二

「何か前にも似たような事があったな」

璃空

「ああ、土郎さんの時か。まあ、作者曰く『やってしまった』だそ
うだ」

龍二

「やってしまったじゃねえだろ！俺も密かに楽しみにしてたんだぞ、
剣皇と瞬刃の戦い！」

璃空

「ああ、悪かったな。まあ、何時か番外編なんかで戦うかもしれな
いんだと」

龍二

「そ、そうか。……………でも、実際戦ったら、どっちが強いんだ？」

璃空

「まあ、俺が言うのもなんだけど、土郎さんの方が強いぞ」

龍二

「マジかよ……………。じゃあ、魔法を使ったらどうなんだ？」

璃空

「結果は変わらないだろうな。実際に土郎さんは黒い牙の作業員と
戦って、魔法も見たことがあるしな。

まあ、本人は魔法だとは知らないけど……………」

龍二

「そうなのか……。おっと、話が脱線したな。
それで、今回の話なんだけど、まさかのゼスト隊の登場だったな」

璃空

「ああ、これも作者の陰謀だろうな」

龍一

「それにしても、作者は時系列合わせとかで苦しんでたよな」

璃空

「まあ、自分で自分の首を絞めたんだからな」

龍一

「それに、ゼストが戦わなかったのにも訳があるんだろ？」

璃空

「ああ、作者曰く『ゼストの戦い方は難しい！』だそうだ」

龍一

「オイオイ、まだ始まったばかりなのに、そんな事言っても良いのか？」

璃空

「さあな。まあ、結果的には一番有りがちな感じになったんだけどな」

龍一

「有りがちって……。まあ、良いか。んで、ゼストの登場は何かの伏線か？」

璃空

「あほ、そんなの言える訳無いだろ！……………まあ、結構バレバレかもしれないけど……………」

龍一

「何だよそれ……………」

璃空

「おっと、また脱線したな。話を戻すぞ」

龍一

「ああ、こんなグダグダな会話で千五百文字位いつちまったな」

璃空

「お前はまた、そんな裏話を……………」

龍一

「さて、まさか混沌の欠片が集まるとあんなのになるなんて……………」

璃空

「……………ああ、俺も初めて見たよ、あんなの」

龍一

「本当、質悪いよな、混沌の欠片って。魔法文化の無い世界にも存在するからな」

璃空

「ああ、でも混沌の欠片は魔力を受けて発動するんだろ？
なら、なんで今回は発動したんだ？」

龍一

「さあ、でも最近結構そういつのがあるよな」

璃空

「だな。最近はそのせいで忙しいからな……………」

龍一

「おっと、いきなりしんみりしやがって。まさか、お前が友達になつた少女に会えないのが、寂しいのか？」

璃空

「っ馬鹿！そうじゃないさ。ただ、あいつが一人で居ないか心配なだけだ！」

龍一

「ふーん。でも、お前がそんなに誰かの事を想うなんてな」

璃空

「ああ、俺もあいつのお陰でそうなれたんだろうな……………」

龍一

「まあ、その子を悲しませない様にしないと！」

璃空

「それは、お前だってそうだろ？」

龍一

「まあ、な。でも、龍耶がそんな風に想ってくれてるか？」

璃空

「まあ、何時もお前を沈黙させてるけど、それも龍耶なりの表現の一つ何じゃないか？」

龍一

「まあ、そう思う事にするか。……………そう言えば、龍耶と吹雪はどうした？」

璃空

「ああ、あの二人は今回は未出演だそうだ」

龍一

「何でだよ」

璃空

「さあな。まあ、これは俺達のコーナーだからな。別に良いんだろ」

龍一

「まあ、そんな事もあるか……………」

璃空

「また脱線したから、さっさと次のコーナーに行くぞ！」

龍一

「あ、ああ」

璃空

「さて、次のコーナーは活動報告でも予告した、なのは用語だ」

龍一

「ああ、何かそんな事もやってたな」

璃空

「んで、今回の議題は、『ウンエントリヒ・ヤークト』だな」

龍二

「って！いきなり変なのが来たな」

璃空

「まあ、これはかなり難しいだろうな」

龍二

「それで、一体何なんだ？」

璃空

「ああ、これは和訳すると、『無限の猟犬』となる」

龍二

「ああ、あれか。段ボール好きな蛇もびっくりなやつ」

璃空

「まあ、間違っではないか……………」

龍二

「で、確かその能力が……………」

ウンエントリヒ・ヤークト

その能力は、極めて策敵に特化しており、目視しにくく、センサ

ーにも引つ掛からない。
加えて、この猟犬は発生時に注ぎ込まれた魔力を使って移動するため、術者に負担が掛からない。
更には、壁まで通り抜けられるという、ステルス迷彩もびっくりなチート能力。
そして、戦闘も可能で、術者の魔力が尽きるまで、無限に造り出すことが出来る。
まさに、至れり尽くせりの能力である。
原作では、この能力でヴェロッサはスカリエッティのアジトを見付けている。

璃空

「本当、敵にたく無い相手だな……………」

龍一

「ああ、確かに。……………そう言えば、このレアスキルを持つてるのって、ヴェロッサ・アコースだよな」

璃空

「ああ、確かあの人はもう一つチート級のレアスキルを持ってたな」

龍一

「確か、記憶捜査だったか？」

璃空

「ああ、原作ではウーノが使われて、仲間のナンバーズ達の居場所を全て調べてたからな」

龍一

「怖いな……………」

璃空

「てか、レアスキルを二つ保持してるとか、原作中最大のチート男じゃないか？」

龍二

「まあ、お前が言えた義理じゃ無いけどな……………」

璃空

「何言ってる！俺の能力は欠点だらけだぞ！」

龍二

「まあ、大体の主人公は皆そうだって」

璃空

「うぐっ！」

龍二

「そう言えば、今話で魔力変換資質『闇』が出てたな」

璃空

「ああ、あれか。まあ、その話はまた物語の中で語られるから」

龍二

「何だよそれ。……………まあ、仕方ないか……………」

璃空

「八八八」

龍一

「……………んで、次のコーナーは？」

璃空

「ん？もう無いぞ」

龍一

「は？……………っておい！それなのにこんなコーナー作ったのか？」

璃空

「そうみたいだな。因みにもう一つ言うと、なのは用語の議題のネタはもう無い」

龍一

「何言ってるんだよ！まだ、プロフェーテン・シュリフティンとか、アンリミテッド・デザイアとかあるだろ！」

璃空

「まあ、有るには有るんだが、もうそんなのやっても仕方ないだろ？」

龍一

「……………」

璃空

「まあ、次の時までには何か考えとくよ。作者が……………」

龍一

「本当、このコーナーの存続に関わる事だからな」

璃空

「てか、第一回目からそれって……………」

龍二

「この先、やってけんのかなぁ……………」

璃空／龍二

「はぁ……………」

龍二

「……………で、では、気を取り直して次回予告」

璃空

「ん？それは、おれは聞いてないぞ」

龍二

「でも、この紙にちゃんと書いてあるぞ？」

龍二が先程の紙を取り出す。

璃空

「んーと、何々。って、俺が小学校に入学!？」

龍二

「何かそしてみたいだな」

璃空

「ちよっと作者を問い詰めてくる!」

龍二

「おい！つて、もう居ないし……………」。
まあ、主役も居なくなっただし、今回は此所までだな。
では、また次回！」

—幕—

幕話・第一話「騎士と剣士」(後書き)

ハハハ、本当に疲れた……………。

さて、次回から遂に家の璃空も小学生です(笑)。
そして、遂にあの子も登場です！

では、また次回！

P.S.

今話は余り見直しが出来なかったので、おかしな所がありましたら
お気軽にどうぞ。
感想待ってます。

幕話・第二話「笑顔」(前書き)

やっと、更新が出来ます。

今日も疲れたなあ……………。

さて、長話は止めて、

幕話第二話「笑顔」

始まります！

P.S.

「少し頭を冷やそうか……………」

幕話・第二話「笑顔」

新暦63年6月15日

御劔邸 PM7:25

今そこに、璃空、御劔、フィンの三人が居間に集まり、談笑をしていた。

すると、御劔が何かを思い出したのか、突然話を変える。

「ああ、そうそう。璃空君に話があったんだよ」

「ん？何ですか？」

璃空が疑問符を浮かべていると、御劔は楽し気な笑みを浮かべ、何処へと行ってしまった。

「なあ、フィン。何か聞いてるか？」

「いいえ、何にも」

璃空の疑問に御劔は答えずに消えてしまった事で、璃空は今度はフィンに聞いてみる。

しかし、フィンも何も知らないと言う。

まあ、何かを隠している様にも感じられたが……………。

そんな事を璃空が考えていると、御劔が何やら人の肩幅位の大きさの箱を持って戻ってきた。

更に、笑い強めて来るといっておまけ付きだが……………。

御劔が持つてきた箱を机に置くと、璃空に、

「さて、これは何かな？」

という風に聞いた。

その御劔の問題に、璃空はまず今日が何の日かを考えた。

(今日は……………何の日だ?)

だが、全く心当たりが無い。

次に、璃空はこの箱位の物には何かあるかと考える。しかし、どれもこれといった物はない。

璃空はこんな風に考えて行くが、全く答えが出ずに、

「……………分かりません」

とうとうギブアップした。

璃空がギブアップした事で、御劔は笑い、箱に手を掛ける。何故か、フィンも不敵な程の笑みを浮かべていたが、璃空は見なかった事にした。

「ふむ。では、開けるよ……………」

「は、はい」

御劔が笑みを消し、今度は真剣な面持ちになった事により、場に緊張が張り詰める。

そんな緊張に、璃空も呑み込まれる。

一瞬の沈黙の後、御劔が箱を開け、中の物を取り出す。璃空も唾を飲み込み、出てくる物を待つ。

そして、出てきた物を見て、璃空は目を疑った。

「……………ランドセル？」

「そうだよ。君にこれをプレゼントしようと思ってね」

璃空の疑問に、御劔は頷きながらそう言う。

しかし、璃空には何故その様な物をくれるのかが分からない。
気のせいか、フィンが満面の笑みを浮かべている様にも見えたが、
今は気にしない事にする。

「あの〜。何故ランドセルを？」

璃空は恐る恐る聞いてみた。

まあ、普通に考えれば分かるのだが、璃空はあえて聞く。

「まあ、そうなるのも仕方がないか……………」。

実はね、これは君を養子に入れた時から決めていた事なんだが、君
を小学校に入学させようと思うんだ。

まあ、最近は忙しかったから、遅くなってしまったけどね」

「……………はいいいい！？」

最初、璃空は御劔が何を言っているのかが理解できなかった。

そして、漸く理解した璃空のその叫びは、既に日の沈んだ海鳴に
響き渡ったと言う。

新暦63年 6月16日

私立聖祥大付属小学校 AM8:30

今日の高鳴市は、何時もの様に快晴で、代わり映えのしない空を退屈げに高町なのは眺めていた。

すると、始業のチャイムが鳴り、担任が教室に入ってくる。

ジャストのタイミングで入ってきた教師に、なのは今まで教室の前で待っていたのではないのかと、とりとめの無い事を考えるが、担任が号令の挨拶を生徒の一人に促したため、そんな思考を中断させる。

比較的気温も心地が良いので、クラスの半数もなのは様に思考が散漫していたが、それも仕方が無い事だろう。

だが、次に担任の放った言葉により、ぽかぽかしていたクラスがざわつき出す事になる。

「今日、このクラスに編入生が入ります！」

担任の言葉により、主にクラスの女生徒が騒ぎ出す。

なのはも隣の席の金髪の少女、アリサ・バニングスト、紫の髪をした少女、月村すずかに話し掛けた。

「ねえ、アリサちゃん、すずかちゃん。編入生ってどんな子だろうね？」

なのはの言葉に、今まで眠気でうとうととしていたアリサが、面倒臭そうに答える。

「さあ〜ね」

余りの適当振りに、苦笑いを浮かべるなのはに、今度はすずかが答えた。

「私は、女の子が良いな。友達になりたいから……………」

まあ、別に男の子だろうが友達になれるのだが、なにぶんすずかは引っ込み思案な所があるせいか、恥ずかしそうに答えた。
なのはもそんなすずかに笑顔で頷く。

「すずかはもうちょっとその性格を治しなさい！」

なのはとすずかの会話を聞いていたアリサが、すずかにそう注意する。

以前、すずかのその性格も有り、この仲良し三人組の間でトラブルが有ったので、アリサは注意したのだ。

すずかはそれに俯きながら謝る。

まあ、別にそのトラブルの原因はアリサに有ったのだが、すずかの性格上、反論する事は無かった。

やがて、担任が騒がしくなったクラスを静かにして、教室の前で待っているであろう編入生に、入室を促した。

「立華君、入ってきて！」

(えっ！？もしかして……………)

静まり帰った教室の中で、なのはは一人、担任の言葉に大きく反応をしていた。

時間は少し戻る。

まだ、始業のチャイムが鳴る数分前、立華璃空は、これから担任になる先生と話をしながら廊下を歩いていった。

「立華君、今どんな気持ち？」

担任が、そんな事を璃空に聞いてきた。

璃空はその質問の意図を考えたが、大して意味は無いのだろうという結論に達したので、無駄に考えるのは止めて、素直に答えることにした。

璃空は異様に大人染みた所があるが、気にしない事にする。

「うーん。あんまり実感は湧かないですかね。

実際、今でも信じられない位ですし……………」

余り子供っぽく無い返答に、担任は苦笑いを浮かべる。

そんな担任の様子に気が付いたのか、璃空も苦笑いを浮かべ、

「良く大人染みてるって言われますよ……………」

そんな事を言った。

それに担任は、若干引き吊った笑顔になり、教室の前に着いたのか、扉の前で足を止めた。

璃空も足を止めるが、その時になって、やっと自分の予想以上に緊張している事に気が付いた。

いつの間にか、呼吸も少し荒々しくなっている。

「緊張しなくても良いよ」

担任がそんな璃空の様子に気が付いたのか、その声を掛ける。

案外、璃空にも可愛い所があると分かった担任は、内心ほっとしていたのは気にしない。

璃空もその担任の言葉に笑顔を返すと、担任は教室の中に入って

いった。

後に取り残された璃空は、一人深呼吸をし、気持ちを落ち着かせる。

やがて、そんな璃空に追い討ちを掛ける様に、クラスの中が騒がしくなった。

「や、やばい。入りづらい……………」

普段はかなり大人びている璃空だが、こういう場でのプレッシャーに弱い。

そんな事をうーうー唸っていると、先程の担任が、璃空に入室を促してきた。

「立華くん。どうしたの？」

何故か何時まで経っても入って来ない璃空に、担任が二度目の声を掛ける。

しかし、一向に入って来る気配が無い。そんな様子を、なのはは一人、高鳴る己の鼓動を聞きながら、今か今かと待つ。

隣では、アリサが何時まで経っても入って来ない事に、苛立ちを隠せ無いのか、机をトントン叩いている。

すずかはと言うと、緊張しているのかそわそわしている。

三者三様の様子で三人は待っていると、やがて扉が開かれた。そして、教室内に一人の少年が入って来る。

少年の入室により、教室内が騒がしくなった。

そんな中、なのは一人だけが黙っていた。

いや、ただ驚きの余り、声が出せないで居たのである。

そして、少年が教卓の隣まで来ると、

「璃空君!?!」

なのは立ち上がり、少年、立華璃空の名前を叫んでいた。

「璃空君!?!」

「うわっ!?!」

突然自分の名前が叫ばれた事により、璃空は驚きの声を上げ、その叫びのした方を見る。

すると、そこには何故か半泣き状態のなのはが居た。

璃空はその半泣きの理由に気が付いたのか、若干苦笑いを浮かべる。

「ひ、久し振り。なのは」

「う、ん。久し振りだね……………」

クラスの中に沈黙が流れる。

いきなりなのはが叫んだ事。

なのはと編入生が知り合いだった事などが影響して、誰も言葉を発する事が出来なくなったのだ。

暫く沈黙が流れたが、そこは大人。

担任が話を進めるべく、沈黙を破った。

「えっと……………。まあ、まずは自己紹介からしてくれるかな」

「は、はい」

璃空もこのままではいけないと思い、担任の言葉に、余計な思考を働かせず、素直に従う。

「初めまして。立華璃空です」

璃空が自己紹介をするが、しかしながら生徒達は未だに無言。何とかこの空気を変えようと、担任が更に、璃空の事について質問を始めた。

「璃空君の好きな物は何かな？」

普通の璃空なら、この質問の意味などを考えるであろうが、流石の璃空でもそんな事をしている場合では無いと悟り、素直にその質問に答えた。

「えっと……………。日本刀ですかね……………」

この状況では、最悪な答えをだが……………。

場の空気が凍り付く。

担任も遂には頭を抱え始めた。

それも仕方が無い事だろう。

一体誰が自己紹介で日本刀が好きなどと言うだろうか。

しかも、小学一年生が。

とうとう担任も、何も言わなくなり、再び沈黙が流れた……………
と思いきや、それを一人の少女が止めた。

「あんだね、普通の自己紹介が出来ないわけ？」

一人の金髪の少女が立ち上がり、璃空に怒鳴り付ける。まあ、普通の自己紹介という意味が分からないのだが。担任も何も言わない事から、もう成り行きに任せてしまった様である。

「誰だよ、お前？」

璃空は突然怒鳴られた事に少しムツとしたのか、少しきつめに少女に聞く。

すると、少女も負けじとばかりに璃空を睨む。

「私の名前は、アリサ・バニングス！
それよりも、さっきのは一体何なのよ！」

「なっ、人の自己紹介にケチ付けるなよ！」

自分の自己紹介にケチを付けられた璃空は、少し顔を赤らめながら言い返す。

アリサの言い分も最もなのだが、璃空の言い分も正論である。故に、二人は平行線で、何時までも言い合いは続く。まあ、二人共負けず嫌いなのも原因なんだが……………。

言い合いが続く事五分、とうとう痺れを切らした一人の少女が動き出した。

クラスの生徒達は、その少女の表情を見て、一斉に顔色を変える。だが、璃空とアリサは言い合いに白熱し過ぎて、背後から迫る少女の姿に気が付かない。

やがて、少女が二人の下に辿り着いた時、少女が二人に声を掛けた。

「二人共、何してるのかな……………」

その余りの声の低さに、二人はゆっくりと声のした方を見る。
そして、見てしまった。

恐ろしい程の威圧感を放つ、一人少女を……………。

「な、なのは。俺達が悪かった。な、なあ？」

「え、ええ。だから、少し落ち着こう、なのは？」

そこに居た少女とは、高町なのはだった。

この時は、まだ誰も知る由も無かったが、この時のなのはの表情は、あのスバルを撃墜した時と同じ表情だった。

持ち前の勘で身の危険を感じた璃空は、慌てて謝り、アリサもそれに倣う。

しかし、なのはは微動だにしない。

それどころか、全く聞く耳を持っていない様である。

そして、なのはが言葉を放った。

二人に絶望を与えるには、十分過ぎる程の言葉を……………。

「二人共、少し頭を冷やそうよ……………」

その言葉は、璃空とアリサにとって、死刑宣告と同義だった。

なのはの放った言葉により、一瞬でクラス内が凍り付く。

そして、璃空とアリサは悟った。

もう、逃げ場は無いと……………。

そして、二人は息を呑む。

その後、教室内に惨劇が広がったそうなの……………。

「では、これでホームルームを終わります」

先程の惨劇の後、璃空とアリサは一日中、生気が抜けた様にへばつており、誰も二人に声を掛けられなかったと言う。

なのはは璃空と話せなかった事に、少し不満を持っていた様だが……。

すずかも、なのはの変わり様に気圧され、一日中怯えていたと言う。

こうして、璃空の散々な学校生活の一日目は幕を下ろした。

夕暮れ時の下校路。

何時もなのはは、アリサ、すずかと下校をしているのだが、今日は二人共塾があると言うことで、璃空と二人で下校をしていた。

二人共、久し振りの再開により、何を話して良いのか分からず、暫くは無言の下校が続く。

璃空には他の理由も有りそうだが……………。

暫くの沈黙の後、先に話を切り出したのは、なのはの方だった。

「本当に久し振りだね、璃空君」

「ああ、そうだな。……………半年振り位か？」

璃空はなのはの方を向き、出来うる限りの笑顔で答えた。

だが、なのはの方を向いた璃空は、目を見開く。

なのはは璃空の方を向き、顔は笑顔だった。

しかし、それとは対象的に、瞳からは涙が流れていた。

璃空は、そんななのはの様子に驚き、それと同時に悲しんだ。

確かに、璃空はなのはが寂しがっているとは思っていた。

しかし、涙を流す程だとは思っていなかったのである。

璃空は、それだけなのはは己の事を大切に思っていてくれた事に驚き、そんななのはの気持ちに気が付けなかった事に悲しんだ。

璃空は足を止める。

なのはは、いきなり立ち止まった璃空に驚き、ワントempo後に足を止めた。

なのはは疑問符を浮かべながら振り返り、璃空を見る。

だが、璃空は俯き、顔を上げようとしない。

「どづしたの？」

遂には心配になったなのはが、璃空の方に近づく。

すると、璃空は顔を上げ、なのはと璃空の目が合った。

その時になのはが感じた物とは、一体どの様な物だったのだろうか？

璃空の瞳には、悲しみの様な物、怒りの様な物、喜びの様な物、苦しみの様な物が浮かんでいた。

そんな目をする璃空に、なのはは少し恐怖の様な物を感じた。

一体、どの様な事が有れば、こんな目をする事が出来るのか？

なのはは、そんな感情を抱えている璃空自信に恐怖し、そして、璃空が壊れてしまうのではないか、そんな事に恐怖した。

所変わり、夕日の射し込むの海鳴市を、一台のリムジンが滑走し

ていた。

乗員は三名。

先ずは、運転手のバニングス家の執事兼専属運転手である鮫島。次に後部座席には、バニングス家の令嬢である、アリサ・バニングスと、月村家の令嬢である、月村すずかが座っていた。

恐らくは、なのは達と別れ、塾に向かうところなのだろう。

すずかは一人、塾の予習をしている。

アリサはと言うと、すずかとは違い、己の首に掛けているペンダントを、悲しそうに眺めていた。

鮫島は、そんな二人の邪魔にならないように黙っている。

やがて、リムジンが赤信号に捕まると、すずかがアリサの様子に気が付いたのか、アリサに質問をした。

「ねえ、アリサちゃん。そのペンダントは？」

普通のすずかなら、他人の邪魔になりそうな事は絶対にしない。

しかし、アリサの悲しそうな顔を、すずかは初めて見た。

そして、友達であるアリサのそんな顔に堪えきれなかったのである。

すずかの質問に、アリサは笑みを返す。

だが、すずかにはそれが明らかに作り笑いだと分かった。

故に、すずかは真剣な表情になり、アリサと面と向かい合う。

そんなすずかの様子に、アリサは少し驚くが、やがて、徐に首に掛けていたペンダントを外し、すずかに見せる。

すずかはそのペンダントを開くが、中には一つの赤い宝石が取り付けてあるだけだった。

すずかは疑問符を浮かべる。

アリサはそんなすずかに微笑み、寂しそうな顔で話し始めた。

「このペンダントに付いてる宝石はね、私を助けてくれた子から貰った物なの」

すずかには、何故その様な顔をするのかが分からなかった。ただ、アリサにとってその思い出は、かけがえのないものだという事は分かった。故に、すずかは無言で頷く。

「丁度、一年半位前だったかな？」

私、誘拐されてね。その時に私を助けてくれた子から貰った物なの」

アリサの表情は暗く、言葉には寂しさがこもっていた。

「その子の顔は、暗くて分からなかったけど、優しい笑顔だけは分かった」

アリサは俯き、ペンダントを優しく撫で付ける。

「今日編入してきたあいつ。」

璃空の笑顔が、その時の笑顔に似ててね。それで、少し思い出しただけ……………」

アリサの声はどんどん小さくなり、最後の方は聞き取れない位になった。

すずかは、俯いたアリサの顔を見上げるように体制を変え、すずかと目が合ったアリサは、すずかに微笑み返した。

そして、アリサは顔を上げて笑う。

「でもね、璃空との言い合いは、あの子と言い合いした時に似てた。なんかこう、本能が燃える様な感じなのはそっくりだったわ！」

そして、嬉しそうに笑うアリサを見て、すずかも笑い返す。

「そっか。アリサちゃんはその子が好きなんだ」

「なっ!?!ば、馬鹿言わないでよ!

誰があんな奴!」

突然のすずかの言葉に、アリサは顔を真っ赤に染めて反論する。

しかし、すずかはそんなアリサに無言で微笑む。

すずかの無言の微笑みに、真っ赤に染まり、火照ったアリサの頭は更に混乱する。

そこに、助け船と言わんばかりに、黙っていた鮫島が声を掛けた。

「アリサお嬢様は、その宝石を嬉しそうに、肌身離さず持って居られますよ」

「さ、鮫島っ!?!」

しかし、助け船を出されたのは、すずかの方だった。

そして、アリサにとっては助け船ではなく、それは泥船であった。

夕暮れが世界を紅く色付けする。

そんな夕暮れの中、少年と少女は互いに無言で見詰め合っていた。お互いを思う余り、お互いに悲しみながら……………。

やがて、少女、高町なのはが、少年、立華璃空の方に歩み寄りながら、璃空に声を掛ける。

「だ、大丈夫、璃空君?」

なのはの足取りは、璃空の悲しい目と、目が合う度にゆっくりになる。

璃空は無言で佇み、なのはを見詰め続ける。

そして、なのはが璃空の目の前に来た時、璃空が口を開いた。

「ごめん、なのは。俺、お前がそんなに寂しがってるなんて、分からなくて……………」。

寂しい思い、させちまって……………」

璃空の言葉に、しかしなのはは首を横に振る。

そして、璃空に優しく微笑んだ。

「もう、そんなのは良いよ。だって、私は璃空君とまた会えて、とっても嬉しいの」

「なのは……………」

なのはの微笑みは、何時かの璃空の笑顔の様に、暗く沈んだ璃空にとっては、一輪の花の様に見えた。

空（作者）

「さて、なんか俺的には綺麗に終われたな」

璃空

「あれでか？」

空

「五月蠅い！そうだよ。なんか文句あるか！」

璃空

「別に。それよりも、何か第一話の少女について明かしたな」

空

「まあ、このまま明かさずに行こうとも思ったんだが、こんな形も有りかなあと思ってな」

璃空

「ふーん。まあ、別に明かされ無くても、大体分かると思うんだけどな」

空

「うぐっ！ま、まあ、今話の振り返りでも行くか」

璃空

「そうだな。じゃあ、先ず最初にグダグダだな」

空

「ぐはっ！……………何か、御劔が使いにくかったから……………」

璃空

「言い訳か？まあ、良いや。んで、担任も困ってたな」

空

「お前のせいだな」

璃空

「そこは否定しないけどな」

空

「お前は妙に大人びてるからな」

璃空

「仕方ないだろ？」

空

「そつだな。んで、アリサに火が点いたな」

璃空

「本当、あいつのあの性格が直ってくればな」

空

「まあ、ああいう所が人気を呼ぶんだろ」

璃空

「かもな。んで、なのはか……………」

空

「あれは、俺的にはやってしまったんだかな」

璃空

「何だよそれ……………」

空

「元々、あんな事をさせるつもりは無かったんだけどなあ」

璃空

「あれは……。久し振りに命の危険を感じた」

空

「まあ、これから良い事あるって」

璃空

「お前には言われたくない！」

空

「ハッハッハ」

璃空

「……………」

空

「おっと、無駄話が過ぎたな。続けるぞ」

璃空

「んで、アリサの過去の事件が明かされた訳か」

空

「初登場の回で過去の話が明かすとか……………」

璃空

「お前のせいだろ！」

空

「すまん」

璃空

「まあ良い。んで、なのはと俺の話か……………」

空

「いやあ、何でだろうね。今話はシリアス無しで行こうと思ってたのに」

璃空

「……………」

空

「ん？なんで黙ってるんだ？」

璃空

「はあ、もう良いや」

空

「そ、そうか？んなら、次だな」

璃空

「お前、こういうシリアス好きだな。零章一話でも似た様なのがあったし」

空

「くっ！別に好きって訳でも無い。ただ書いてたらあんな風になっただけだ！」

璃空

「それはそれで、結構問題なんだがな……………。んじゃ、嫌いなのか？」

空

「別に嫌いという訳でも無いが、好きか嫌いかで聞かれたら、どちらかと言えば、好きな方だ」

璃空

「あっそう。んで、最後のあの一文は？」

空

「俺的には、なんか綺麗に終われたかと……」

璃空

「まあ、それはさっき聞いたから、もう良いや」

空

「……………」

璃空

「んで、今回は何をやるんだ」

空

「ん？このコーナーでなら、何も無いぞ」

璃空

「は？」

空

「言い訳になるが、最近かなり忙しかったからな」

璃空

「あっそ」

空

「ま、まあ。気にしないでいい」

璃空

「んじゃ、今回はこれで終わりだな」

空

「ああ、ちょっと待った！」

璃空

「一体何だよ。もうやる事無いんだろ？」

空

「ちょっとした、次回予告をな」

璃空

「そうか。ん？そっぴや、次回はド・シリアスになるんだよな？」

空

「ああ、今の所はな」

璃空

「どっぴいう意味だよ」

空

「どっぴなるかは、全て描写次第って事だよ」

璃空

「ふーん。まあ、頑張れ」

空

「まあ、活動報告でも予告した通り、次の更新には時間が掛かると
思う」

璃空

「随分と曖昧だな」

空

「まあ、さつきもいった通り、描写次第だからな」

璃空

「ま、良いや。それでは皆さん」

璃空 / 空

「また次回！」

幕話・第三話「天瞳を継ぐもの」

「俺は、過ちを犯した……………」

「どんなに償っても、許されない過ち……………」

「どんな事をして、過ぎ去った時間は戻ってこない」

「死者を蘇らせる事なんて、絶対に出来やしない」

「あの人はもう、還って来ないんだ……………」

「誰かに許して貰おうなんて思わない」

「いや、例え誰かが許したとしても、俺は自分自身を、絶対に許さない」

「だからもう、この力を……………」

新暦63年 10月8日

御劔邸 AM6:30

薄暗い道場の唯一の光源である月明かりが、そこに居る二人の人物を照らす。

一人の人物、老年程に見える男性が、左肩を押さえながら、顔を苦痛に染める。

見ると、その左肩からはおびただしい程の血が流れ、見事なまでの板張りの床を、赤く染めていた。

御劔は苦痛に顔を歪める。

常人ならば、それは傷の痛みから来るものだろう。

しかし、今の御劔はそれとは違った。

御劔は己の眼前に立つ、紅く濡れた刀を持つ少年に顔を歪めていたのだ。

少年が刀を拭い、一步を踏み出す。

それに合わせて、御劔は後退する。

やがて、天窓から射し込む月明かりの下に少年は踏み込み、月明かりが少年を照らし出す。

ゆつくりと、射し込む月明かりが、少年の足元から照らす。

段々と月明かりが上っていき、少年の胸を照らした。

御劔はそれを見てしまい、齒軋りする。

少年の胸は真っ赤に染まり、傷だらけだったのだ。

そんな御劔の様子に関係無く、少年は更に進む。

そして、月明かりが少年の顔を照らし出した時、少年は笑みを浮かべ、涙を流していた。

そこに立っていたのは、立華璃空であった。

そんな璃空を見て、御劔は左手に持つ刀に力を込める。

璃空の苦しみと、璃空を助けられない己の無力さを悔やんで……

璃空が感情の籠らない目で御劔を見る。

そして、璃空が言葉を放つ。

「やはり、剣神と謳われた貴方でも、最愛の弟子には手を出せないみたいだね」

その声は確かに璃空の物である。

だが、喋り方は全く別人の物だった。

御劔はそんな璃空を睨む。

そして、言葉を返した。

「人の弟子の中に入り込むとは、外道だな」

「外道？……………くくく、くはははは！」

既に御劔の言葉には力が無かった。

しかし、璃空はその言葉に反応し、嘲笑した。

一通り笑い切った璃空は、笑みを崩して御劔を睨む。

「外道ねえ……………。正攻法と言って貰いたいなあ。現に、最強と謳われた君が防戦一方なんだから」

確かに、一般論から言えば、それは外道と言えるだろう。

だが、実際にはそんな事は言っではいられない。

これは殺し合いなのだ。

生きるか死ぬか、それが全ての世界なのである。

そして、璃空が言う様に、真正正銘それは正攻法であった。

御劔は世界最強と謳われた剣士だ。

まともに戦っても、勝ち目など有る筈がない。

しかし、そんな御劔にも、弱点というものは存在した。

璃空である。

この襲撃者は、その璃空の体に憑依したのだ。

故に、御劔は襲撃者の突然の不意打ちを受け、攻撃する事も出来ないのである。

璃空が狂喜を孕んだ笑みを浮かべる。

その目は正しく、闘いに生きる者の目であった。

しかし、その目からは涙が流れていた。

それは襲撃者の歓喜の涙だったのかもしれない。

だが、御劔は、そうは思わなかった。

（璃空君の意識が残っている。）

なら、まだ助ける方法はある)

御劔の推理は当たっていた。

それは、この襲撃者の残酷な性格故にある。

己の手で、最愛の師を手に掛ける。

璃空にそれを見せるために、襲撃者は璃空の意識を残したのである。

だが、今回はその性格が己の首を締めた。

もしも、襲撃者が璃空の意識を残していなかったとすれば、御劔は襲撃者を攻撃する事は出来なかったであろう。

御劔には、璃空の意識が残っているのかが分からなかった。

もし、涙を流していなかったとすれば、御劔には二つの選択肢があった。

璃空の意識は残っていないかもしれない。

だが、残っているかもしれない。

それが、御劔を迷わせていたのだ。

しかし、璃空が涙を流した事により、御劔は確信を得た。

璃空の意識は残っているとすること。

御劔は強い意思の籠った目で璃空を見て、襲撃者に質問した。

「お前の目的は何だ？」

襲撃者は笑みを消し、質問の答えを考える。

そして、数秒の後、再び狂喜の笑みが戻った。

「さあね。僕はただの傭兵。雇い主が何を考えていても、関係は無
いさ。

まあ、僕は絶望に染まる顔が見れば、それで良いんだよ」

襲撃者の放った言葉が、世界を凍り付かせる。

そして、襲撃者は今までの笑みを消し、だけど、と続けた。

「どうして、君の顔に絶望は無いんだい？」

笑みを消した璃空の顔は、まるで興味は無いと言わんばかりの、全くの無表情。

それに、御劔は無言で笑みを浮かべた。

御劔の笑みにより、璃空の表情に疑問の色が浮かぶ。

そんな璃空の様子に関係無く、今度は御劔が一步を踏み出した。先程と違い、明確な殺意を持って……………。

その殺意に気圧されたのか、璃空の表情が強張り、後退りする。御劔が一步を踏み出す事により、余りのプレッシャーに空気が揺れる。

空間が御劔を中心に軋みを上げ、どんどん広がって行く。

そんなプレッシャーに当てられた璃空が、冷や汗を流す。

そして、後退りし過ぎた璃空が、背後の壁に当たり、息を呑む。

襲撃者は恐怖していたのだ。

劔神と呼ばれた、御劔の真の姿に。

御劔は更に歩を進める。

そして、御劔と璃空の距離が数メートルと迫った時、プレッシャーに逆らえなかった襲撃者が、御劔に斬りかかった。

「死ねー！！！！」

「神道流、三皇刃、三刃」

璃空が叫び、斬りかかる。

御劔が刀を腰溜めに構えると、突然刀が紅く輝き始めた。

そして、璃空が刀を振り落とす。

「三ノ太刀、鬼刃ー！！！！」

「須佐之皇^{すさのお}」

「紅」

瞬間、薄暗い室内を紅い光が走った。

二人は刀を振り抜いた状態で残身している。

それを見れば、今までと何も変わらない。

だが、即座に変化は訪れた。

室内をパキツ、という音が響いた。

その瞬間、御劔の顔に笑みが現れ、対して璃空の表情は曇った。

やがて、バキツという音が響き、辺りに金属音が響いた。

「くっそが！」

璃空が齒軋りし、床に落ちた物を見る。

そこに落ちていた物とは、刀の刀身だった。

そう、御劔は璃空の刀、村雨を折ったのだ。

璃空は急ぎその場を離れ、村雨を見る。

村雨の刀身は、半分から上が折られ、最早小太刀と遜色無いまでになっていた。

村雨に取り付けられた宝石が、痛々しげに点滅をしている。

恐らくは、何かを言いたいのだろうが、当然璃空本人ではない襲撃者は無視。

己の方に歩み寄って来る御劔を視認した。

すると、御劔はまた居合いの構えを取り、刀も紅く輝いていた。

璃空は舌打ちをして、思考をフル稼働させて、状況の打開策を練る。

そして、見出だしてしまった。

最も非道と言える答えを……………。

「魂……………融合」

璃空は呟いた。

すると、璃空の体は蒼く発光を始める。

それを見た御劔は、先程の言葉の真意を悟る。

(くっ！時間が無いか……………)

璃空の先程放った言葉。

その真意とは、真正正銘の魂の融合である。

それが意味するもの。

それは、璃空の魂の消滅である。

融合した襲撃者の魂も消滅してしまうが、璃空の魂も消滅してしまう。

故に、御劔には時間が無いのだ。

璃空の魂が消えてしまうから……………。

どんどん、璃空の発光が強まり、室内を光で満たす。

こんな時でなければ、それはとても幻想的な光景だっただろう。これが魂の光なのだ。

だが、御劔には見惚れている時間は無い。

タイムリミットは、璃空の魂が持つまで。

璃空の魂が限界を越えた時。

その時が、璃空の死である。

しかし、今の璃空は相当疲弊している。

体もそうだが、何よりも心のダメージが大きかった。

御劔は苦悶の表情を浮かべ、やがて、決意したように刀を引き抜いた。

引き抜かれた刀は、上段に構えられ、紅い光は収まっていく。

その光景を見て、襲撃者は勝利を確信した。

再び璃空の顔に、狂喜の笑みが戻る。

襲撃者は、御劔が諦めたとおもったのだ。

しかし、御劔は諦めて等いなかった。

上段に構えられた刀は、火を吹き返したが如く、今度は蒼白の光を帯び始めた。

璃空は怪訝な表情を浮かべる。

それは、刀から発せられる光が、余りに魂の光に似ていたからである。

やがて、その光は収束を始め、刀に吸い込まれていく。

そして、収束が終わった後には、神々しいまでの光を放つ、一本の刀があった。

襲撃者は、直感で危険と判断し、融合は間に合わないと結論を出した。

「くそがー！！！」

自棄になった襲撃者が、再び璃空に襲いかかる。

御劔はそれを、突きの構えで待つ。

そして、璃空が後数メートルと迫った所で、御劔が踏み込んだ。

「神道流、三皇刃、一刃、天照皇！」
あまてらす

全てが一瞬だった。

御劔が型の名を叫び、璃空も突きを繰り出す。

タイミングはお互いに同時であった。

しかし、次の瞬間……………。

「がはっ！？」

辺りに血が撒き散った。

御劔が吐血をしたのである。

見ると、御劔の胸には一本の刀が深く刺さっていた。
だが、御劔は笑みを浮かべていた。
そして、

「うっ！？ガアアアッ」

璃空が叫び声を上げた。

見ると、確かに璃空にも御劔の刀が刺さっていた。
しかし、流血は無い。

璃空は、苦痛に染まる表情で、己に刺さった刀を見る。
そして、驚愕に目を見開いた。

璃空に刺さった刀からは、おびただしい程の光が、璃空に流れ込んでいたのだ。

そして、それを見た襲撃者は、やっと御劔の行動の真意を悟る。

「自身の魂を流し込んで……………俺の魂と融合させる気か！？」

そう。まさに御劔がやろうとしている事はそれだった。

己の魂と襲撃者の魂を相殺させて、璃空の魂を守ろうとしているのだ。

「何故、そこまでして……………こいつを守る！」

襲撃者は御劔に問う。

肉親でもない、ただの少年を、命を掛けて守る理由を。
だが、御劔はそれを笑った。

（何が可笑的い！）

言葉には出していないが、襲撃者は内心はそう思っていた。

そして、次の御劔の言葉に絶句する。

「そんなのは………決まっている。
ただ、血の繋がりが無くとも………璃空君は、私の………家族だ
からだ………」

その御劔の言葉は、もう力尽きそうなのか、どンドン掠れて言った。

しかし、御劔の目には決意の炎が、今までとは比べ物にならない程、強く灯っていた。

そして、今まで以上の苦痛が二人を襲う。

「がはああ！？／＼ぐっ！？」

御劔はもう限界なのか、床に膝を着く。

朦朧とする意識の中、御劔は璃空の顔を見上げた。

その顔は、苦悶で表情を歪め、大量の涙を流していた。

御劔はそれにそつと微笑む。

そして、襲撃者ではなく、璃空に呟いた。

「心配………しなくて………良いよ。

絶対に………助けて………あげるから………」

喋るのも苦しいのか、御劔の声には力が無い。

そして、御劔の口からは大量の血が溢れていた。

だが、御劔は微笑む。

最愛の弟子に、少しでも苦しい思いをさせないために。

そして、その時が来た

「ぐああああ……！」

光が最高潮に達し、二人に激痛が走る。

「ぐっそー……！」

璃空が叫びを上げ、最高潮に達した光は収まっていった。

先程の光が完全に収まった後、そこに残ったのは、血塗れの御劔を抱き抱える璃空の姿だった。

そして、静まり返った室内を、璃空の悲痛な泣き声が木霊する。

璃空は何度も何度も御劔の名を叫ぶ。

しかし、御劔は目を覚まさない。

「御劔さん！御劔さん！………親父……！」

そして、全てを悟った璃空の悲鳴は、暗闇の世界に悲痛に響き渡った。

「何だよ。餓鬼の方も始末しろっていったのに、生きてるじゃねえか。」

「ちっ！使えねえ、奴雇ったな」

暗闇で泣き叫ぶ璃空の耳に、そんな声が届いた。

璃空が顔を見上げると、そこには見覚えのある男が立っていた。その男こそが、まさにあの傭兵を雇った男であり、黒い牙唯一の敵対組織である、『ファルス』の幹部であった。

男が一步一步、璃空に近づくに連れ、璃空の意識が研ぎ澄まされていく。

そして、完全に璃空の意識が研ぎ澄まされた時、璃空の心を憎悪が支配した。

「村雨、リカバリー!!」

璃空は立ち上がり、破損寸前だった村雨に呼び掛ける。

すると、村雨は光輝き、完全に修復されていた。

璃空の威圧に気圧された男が、己の武器である槍をかまえる。

そして、互いに同じタイミングで踏み込んだ。

一閃

璃空は神速の踏み込みをして、男が槍を振り落とす前に一閃をした。

全ては一瞬で終結した。

璃空は残身を解き、刀を振り払う。

その時に、刀からは大量の血が飛んだが、璃空は全く気にせず歩き始めた。

背後からは、男の悲鳴が響くが、璃空は見向きもせず転移魔法を発動し、転移をした。

新暦63年 10月9日

海鳴市市街地 AM4:10

まだ日の昇らない海鳴市を、一人の少女が息も絶え絶えに駆けていた。

少女は何かを探しているらしく、時折立ち止まっては周囲を見回す。すると、少女の背後から一つの人影が迫る。

しかし、息を整えている少女は、背後の人影に全く気が付かない。そして、人影が少女の肩に手を掛けた。

「っ！？マスター!？」

少女は振り向き、探し物、いや探し人の名を呼んだ。

しかし、その人物が別人だったことに、少女は目に見えて落ち込む。振り向いた所にいた人物は、まだ幼い少年だった。

「その様子だと、まだ見つかって無いんだな……………」

少年が少女に聞き、少女は無言で頷く。

「貴方の方も……………まだですか……………」

少女も聞き返すが、返ってきた答えは同じだった。

すると、少女が突然足を押さえ、苦痛を露にする。

見ると、少女は足を打ち付けたのか、大きく腫れていた。

「フィン、お前……………」

少年が心配そうな顔になり、少女、フィンに声を掛ける。

フィンはそれに笑みで返し、少年に心配無いと告げる。

それに、少年は押し黙り、沈黙が流れた。

数分の沈黙の後、先に口を開いたのは、フィンの方だった。

「龍二さん。マスターはもう……………」

フィンは俯き、その声は涙で掠れている。

それに、少年、龍二は苛立ちを隠せないのか、齒軋りする。

「あほ！パートナーのお前が信じないで、一体誰が信じんだよ！」

その龍二の言葉に、フィンは顔を上げ龍二を見る。

龍二は何処か遠くの方を見ていたが、頬は少し赤みがかった。

フィンはそれに頷き、涙を拭う。

龍二は気配でそれを感じたのか、フィンにハンカチを差し出し、再び探しに行こうと歩みを始めた。

フィンはそれに微笑み、不器用な少年に礼を言う。

すると、龍二は片手を挙げてその礼に答え、再び走り出した。

涙を拭い終わったフィンも、走りを始めようとした時、又別の方向から声が届いた。

フィンがそれに振り向くと、龍二にそっくりな少年が、フィンの下に駆けて来た。

「龍二さん、マスターは……………」

先程の質問を、フィンは再び問い掛ける。

少年、龍二はそれに首を横に振る。

「璃空……………何処に行っちゃったんだろ？」

龍二が呟いたその言葉に、フィンは顔を落とした。

「あの道場を見る限り……………」

「そうだね……………」

フィンは御劔邸の道場の惨状を思い出し、最悪の答えを連想してしまう。

龍耶も同じなのか、それを肯定する。

しかし、フィンは顔を挙げ、先程の龍二の言葉を思い出した。

「龍耶さん。私達が信じなくて、誰が信じるんですか！」

龍耶は驚きの表情でフィンを見る。

すると、もうフィンの顔には暗い影は無かった。

龍耶もそれに頷き、気付けとばかりに自分の頬を叩く。

「じゃあ、璃空が帰ってるかもしれないから、一度戻ろう？」

「ええ」

そして、互いに頷き合い、二人は駆け出した。

御劔邸 AM5:00

先程の会話から、フィンと龍耶は一度御劔邸に戻ってきていた。

二人が周囲を探っていると、遠くから二人を呼ぶ声が届く。

二人はその方向を向き、駆けてきた人物、龍二に手を振りながら迎える。

龍二は二人と違い、別行動だったので、先程の会話の後に龍耶が念話を送っていたのだ。

「璃空は？」

駆けてきた龍二が、直ぐに二人に問い掛ける。

しかし、二人は首を横に振る。

龍二はそれに、そうか、とだけ呟き、辺りを見渡した。

「璃空……………何処に、っ!？」

すると、突然何かの気配を感じたのか、龍二が草村の方を見た。
フィンと龍耶も気が付いたのか、二人共身構える。

龍二がゆっくりと草村に近付く。

一歩一歩近付くに連れ、場には緊張が走った。

そして、龍二が草村の中を見た瞬間、叫び声を上げた。

「っ!?!? 璃空!?!?!」

龍二が見た場所。

そこには、全身血塗れの璃空が倒れていた。

同年 10月13日

海鳴病院 PM7:30

きつい薬品の臭いに、目を覚ました璃空の気分は最悪だった。

(何が有ったんだっけ?)

そして、直ぐに疑問符を浮かべる。

そんな風に璃空が考えていると、突然少女の声が届いた。

「広域次元犯罪組織、ファルスの壊滅。
無茶をし過ぎですよ、マスター」

璃空は突然現れた少女に驚き、自分が予想以上に深く考え事をしていたのを悟った。

少女はそんな璃空に微笑み、ベッドの脇に置いてあった椅子に腰掛けた。

「御剣さんは……………」

「……………知ってます」

璃空は俯き、フィンに言葉を放つが、途中でフィンに遮られる。

「貴方に何が有ったのかも、村雨のデータで観ました……………」

フィンの言葉に璃空は顔を挙げ、フィンを見る。

その璃空の目からは、涙が流れていた。

「全部、俺が悪いんだ……………俺が、弱かったから……………」

「それは、違います！」

「っ！？何が違っつて言うんだよ！」

突然のフィンの言葉に、璃空は怒りを露にするしていた。
しかし、フィンはそんな璃空に微笑む。

「貴方は弱くなんか有りません。その発言は、貴方を命懸けで守っ

た御剣さんに失礼ですよ」

フィンの言葉に、璃空は大きく目を見開いた。そして、フィン立ち上がり、璃空の下に歩み寄る。

「ごめん、フィン。でも、俺は……………」

璃空が言い終わる前に、璃空の下に着いたフィンは、璃空を抱き締めた。

「フィン？」

「もう、良いんですよ。強がらなくても……………」

そのフィンの声は、涙で掠れていた。

その後、二人は泣き続けた。

そして、二人共泣き止んだ時、璃空がフィンに質問をした。

「どのくらい寝てた？」

「約五日です」

「そうか……………。なのはも心配してるだろうな……………」

「ええ。貴方が入院したと連絡したら、大泣きしていたみたいです」

そのフィンの言葉に、璃空は俯き、それ以降は誰も言葉を発しなかった。

璃空が目を覚ました翌日、璃空の病室に高町士郎となのはが訪れていた。

最初は疑問符を浮かべる璃空だったが、やがて、全てを悟り、フィンを睨み付ける。

その視線に、フィンは苦笑いを浮かべ、そそくさと病室を立ち去った。

それに璃空が溜め息を吐くと、なのはが疑問符を浮かべながら、璃空のベットの傍に寄って来た。

「どうしたの、璃空君？」

なのはは璃空の顔を覗き込む。

そんななのはの顔を見て、璃空の顔は更に曇った。

なのはの目の周りが、少し赤く腫れていたのである。

「ど、どうしたの？何処か痛いのか？」

だが、そんな璃空の思いに気が付かないなのはは、そんな的外れの事を聞いた。

なのはの背後では、璃空の思いに気が付いているのだろう。士郎が苦笑いを浮かべていた。

璃空も士郎と同じ様に、苦笑いを浮かべ、何故苦笑いを浮かべているのかが分からないのはは、ただ、一人混乱していた。

暫くは、和やかな空気が病室の中に漂っていたが、突然の士郎の言葉に、病室を冷たい空気が支配した。

「御剣さんの事……………聞いたよ」

その言葉に、璃空は俯く。

ただ、一人疑問符を浮かべるのはだったが、士郎に退室を促された為、渋々ながらも退室していった。

なのはが退室した室内を、薄暗い静寂が流れる。

そう考えれば、なのはの存在は場を和ませていたのかもしれない。

そして、静寂を破る様に、士郎が口を開いた。

「君は……………洗脳されて……………」

「違う!」

「えっ?」

士郎はフィンに、璃空は洗脳されていたという風に聞いた。

しかし、士郎の言葉が言い終わる前に、璃空はそれを否定する。

士郎は突然の事に黙り、璃空は言葉を続けた。

「確かに、俺は洗脳されていた。だけど、それは俺が弱かったからだ。
俺がもつと強ければ、御剣さんだって……………」

病室内を璃空の悲痛な声が響く。

そして、士郎はそれに何も言えなかった。

それは、以前の自分が今の自分に重なったからである。

今、この場所で璃空の気持ちを一歩理解しているのは、紛れもなく史朗だった。

もしかしたら、フィンはこれを予期していたのかもしれない、そ

う士郎は思うが、今は関係無いと、その思考を振り払った。

「僕にも、君の今の気持ちは少し分かる。だけど、御剣さんは君を………」

「許せないんですよ」

「えっ？」

士郎の言葉を遮るように放たれた璃空の言葉に、士郎は疑問符を浮かべる。

しかし、璃空は関係無いとばかりに続けた。

「例え、誰が許しても……。俺は、自分自身を絶対に許せないんですよ」

士郎の表情が苦痛なものに変わった。

今の璃空は、全くと言って良い程に、以前の士郎と同じだったからである。

「だからもう、この力を………」

その璃空の言葉は、完全に以前の士郎が言った言葉と同じだった。

力を捨てる。

それは、以前の士郎が決意した事。故に、士郎はその言葉を遮った。

「確かに、許せないだろうね……。今の君は、以前の僕と瓜二

つだ。

力を捨てた時の僕と……………」

士郎の余りにも予想外だった言葉に、璃空は士郎の顔を見る。すると、士郎の顔は真っ直ぐに璃空を見ていた。

決意の灯った目で……………」。

「だけど、君の力は御劔さんから貰った物だ。そして、その力を持つのは、君だけなんだ」

士郎の言葉の意味するもの。

それは、ただ一人、御劔の意思を受け継いでいるのは、璃空だけだという事である。

璃空が使う、『天動流四聖八陣剣派』は、もう璃空しか受け継いでいる者はいないのである。

璃空は再び俯いた。

もしも、璃空が天瞳を開眼しなかったら、御劔に璃空は『天動流四聖八陣剣派』を教わる事は無かった。

御劔には、『天動流四聖八陣剣派』を伝える使命が有ったのだ。

そして、璃空はその剣派を受け継いだ。

それを捨てるという事は、御劔の意思を裏切るという事と同義なのだ。

「だけど……………」

「ん？」

俯いた璃空が、突然放った言葉に、士郎は疑問の声を上げる。そして、次の璃空の言葉に、目を見開いた。

「だけど、俺はもう……………刀を握れないんです」

璃空のその言葉は、悲痛で震えていた。

「恐いんです。また、俺の力で大事な人を傷付けてしまっつかも知れない……………」

「君は、何も分かっていないようだね」

「えっ?」

だが、今度は璃空の方が疑問の声を上げる。

士郎はそれに笑みを浮かべ、言葉が続けた。

「天動流剣技というのは、心を強くするものだ。だけど、今の君はどうだい?」

それは、逃げじゃないのかい?

逃げていては、御剣さんの意思を継ぐなど、到底出来ないよ」

「っ!?!……………でも」

士郎の言葉に璃空は、はっとする。

しかし、直ぐにまた俯いてしまった。

「でも、刀が握れないんです」

「なら、別に刀じゃなくても良いじゃないか」

「えっ!?!?」

璃空は土郎を見る。

すると、土郎はもう答えが出ているかの様に、笑みを浮かべていた。

「別に、天動流を使うので、刀だけという決まりは無いだろう？」

確かに、そうである。

事実、歴代の天道流の使い手には、多種多様な武器で天道流を使いこなす者もいた。

それを思い出した璃空は、拳を握りしめる。

それを決意の証しと取った土郎は、立ち上がり無言で部屋を後にした。

「御剣さん。貴方の意思是、しっかり俺が継いで見せます」

一人となった室内で、璃空はそう心に決めた。

後書きミニコーナー

―牙達の晩餐会―

第一回「深紅の剣聖」

空（作者）「どうも、管理局の黒い天使こと、作者の空です！」

璃空「まだそれを言うか……。どうも、深紅の剣聖こと、立華璃空です」

空「いやあ、今話も大変だったよ」

璃空「あつそ。んで、この突っ込み所満載なコーナーは何だよ」

空「ふふふ。そう思うなら、素直に突っ込めば良いじゃないか」

璃空「あ、いや。突っ込めって言われて突っ込むのもなあ」

空「二流め!」

璃空「うぐつ!?!」

空「そんな二流は、T大先生の所のアサ道で修行してこい!」

璃空「いやいやいや。ちょっと待て!

それは流石に不味いだろ。それに、許可貰って無いのに、勝手に名前を使うのも!」

空「大丈夫。あの大先生なら寛大なお心で許してくれる筈だ!」

璃空「……………T先生、申し訳ございませんでした。ほら、お前も

謝れ!」

空「む?……………申し訳ありませんでした! (土下座)」

璃空「いきなり土下座かよ……………」

空「さて、さっさと始めないと、文字数が半端無いので、さっさと行くぞ」

璃空「ああ。っと、その前に、リニス!」

リニス「はい。皆さん初めまして、でよろしいのでしょうか？プレシアの使い魔のリニスです」

璃空「よし。これで役者は揃ったな。んじゃ、始めるぞ」

空「さて、まずは今話のおさらいな。

リニス、宜しく」

リニス「はい。では、先ず最初に暗いですね」

璃空「あー。やっぱりそうだよな」

空「まあ、この話は最初から書きたかった話の一つだからな」

璃空「こんな陰鬱な話を書きたかったなんてな……………」

空「活動報告でも書いた通り、俺はSだからな」

璃空／リニス

「……………」

空「さて、なんか二人の視線が痛いけど、気にしないで行こう」

璃空「なあ、御剣さんは何をやったんだ？」

空「やっぱり分かりにくかったか？」

璃空「ああ」

リニス「では、それは私が説明します。

実は、あれは御剣さんが己の魂を璃空に流し込んでいたんですね。そして、流し込まれた御剣さんの魂と襲撃者の魂が融合した。それにより、璃空の魂かの融合は起きなかった訳です」

璃空「なら、その融合した魂は何処に行ったんだ？」

空「融合した魂は、そのエネルギーが暴走して無くなるんだよ」

璃空「そうだったのか……………」

リニス「璃空、お気を落とさずに」

璃空「分かってる。何時までも悔やんでなんかいられないからな」

空「そうか。なら、自分を許したのか？」

璃空「それとこれとは別だ！」

空「そうか。まあ、これからも陰鬱話が有ることは確定だな」

リニス「まあ、仕方がないですよ。璃空、少しずつで良いので、自分を許してやって下さい」

璃空「……………」

リニス「はあ。では、次に行きます」

璃空「俺が転移した先ってのは、ファルスの所で良いんだよな？」

空「ああ、そこでお前がファルスを壊滅させた。
深紅の剣聖っていうのは、その時の血塗れのだったお前の姿から来
ている」

リニス「確か、『深紅の剣聖』と『剣魔』でしたよね？」

空「そう言う事。作中では、どちらも出てくるが、意味は同じだ」

璃空「ふーん。それじゃ、次だな」

リニス「フィンの涙。あれは、本当に璃空の事を思つての涙だった
のでしょうか？」

空「おつ！流石リニス。鋭いな」

璃空「確かに、俺の事だけの涙じゃなかったな」

空「ん？璃空も分かつてたのか？」

璃空「当たり前だ！俺はあいつのマスターだぞ！」

リニス「恐らく、あの涙はフィンの御剣さんへの涙でもあったので
しょうね」

璃空「ああ。フィンは元々、御剣さんのパートナーだったからな」

空「また、暗くなってきたな。さっさと次行くぞ！」

リニス「璃空が刀を握れなくなるなんて……………」

璃空「……………」

空「まあ、主人公には乗り越える山が多い方が面白いからな」

リニス「Sですね……………」

空「ハッハッハ！」

璃空「ほら、次行くぞ！」

リニス「刀を握れなくなった璃空が、これからどんな戦いをするのか？」

空「まあ、それは見てのお楽しみだよ」

璃空「まあ、楽しみに待っていてくれ」

リニス「それにしても、土郎さん……………」

空「まあ、何気に璃空と土郎は似ていたという」

璃空「無理矢理感是否めないけどな」

空「そこ！それは禁句！」

リニス「……………」

空「リニスさん。その冷たい視線がとても痛いのですが……………」

リニス「すみません。プレシアと共に居ると、どうしても……………」

璃空「まあ、今のはリニスは悪くないよ。悪いのは作者の方だ」

空「それは、少し厳しいんじゃないんですか？」

璃空「知るか！」

空「ぐうう！心が痛い」

リニス「まあまあ。二人共、落ち着いて！」

璃空「分かった。んで、振り返りは終わりだな」

空「あ、ああ。さて、次回予告でもするか」

リニス「では、それは私が」

空「了解」

リニス「さて、今回は活動報告でも書いた通り、祝零章完結会をやります。

この作品で、没となった裏キャラも登場する予定です！」

璃空「あー。あいつらか」

空「付け足すと、原作キャラもゲスト出演します。もちろん、なのはだけでなく他のキャラたちも」

璃空「良いのか？フェイトなんかは、まだ敵役だろ？」

空「此処にそんなものは関係無いから」

リニス「相当アバウトな空間ですからね」

璃空「この先、やっていけるのか？」

空「大丈夫！何とか続けてみせるから！」

リニス「期待していますよ」

空「合点承知！」

リニス「では、今回はこの辺で……………」

璃空「それでは皆さん」

璃空／リニス／空

「さようなら！」

— 完 —

幕話・第三話「天瞳を継ぐもの」（後書き）

ふう。

やっと終わりました。

次回は遅くて土日更新になりそうですが、どうか宜しくお願いします。

後、何かおかしな点がございましたら、お気軽にどうぞ。

感想待っております。

T大先生、本当に申し訳ございませんでした。

祝零章完結記念「牙達の晩餐会スペシャル」(前書き)

よっし！連続更新！

さて、中々のグダグダですが、

祝零章完結記念「牙達の晩餐会スペシャル」

始まります！

祝零章完結記念「牙達の晩餐会スペシャル」

* 牙達の晩餐会*

- スペシャル -

空

「ああ、題名の書き方に苦労した……………」

璃空

「何か初っぱなから、テンション最悪だな」

リニス

「まあまあ。璃空もそんな事言わないで」

璃空

「まっ、良いか。どうも、『深紅の剣聖』立華璃空です」

リニス

「プレシアの”元”使い魔のリニスです」

璃空

「”元”って……。此处ではそう言う事になってるのか？」

リニス

「ええ。私としては、とても有難い事です」

空

「まあ、1st観てない俺が言うのもあれだけど、一期を観る辺り

「じゃあプレシアは悪の化身だからな」

リニス

「劇中では、私は何故プレシアがあんな風になってしまったのかは知りませんでしたけど、やはりプレシアにも辛い過去があったんですね……」

空

「まあ、彼女にも救いはあるさ。主にこの物語の第一部のラスト辺りに」

璃空

「言ってる良いのかよ……」

空

「大丈夫！問題無い。それに、無印に入ったらあれだしなあ……」

リニス

「あれは流石に……」

璃空

「やっぱりSだな」

空

「さて、場の空気に敵意を感じてきた所で、早速ゲストをお迎えしたいと思います」

リニス

「では、まずは原作組で、三人娘の方々！」

なのは

「あっ！初めまして。高町なのはです！」

はやて

「どうもー！メインヒロインの八神はやてです！」

璃空

「……………」

はやて

「ん？どないしたんや、璃空。そんなに黙り込んで」

空

「まあ、ヒロインはもうほぼ確定してるから」

リニス

「では、はやてがヒロインなのですか？」

はやて

「そうか。宜しくな、璃空」

空

「ああ、そう言う訳じゃないから。まだ、はやてがヒロインとは言
つてないぞ」

はやて

「んな！？それ、どついつ意味や！」

空

「まあまあ、落ち着いて。はやてが本当にヒロインかは、まだ明か

せないんだよ」

はやて

「という事は、私の頑張り次第で璃空をメロメロに出来るんやな？」

空

「まあ、書いてる内に好きになっただらね」

はやて

「よっしゃ！頑張るで〜！」

璃空（小声）

「俺の目の前で、そんな話をしないでくれ……」

なのは

「えっと、フェイトちゃんは？」

はやて

「本当や、さっきまで私等と居ったのに」

空

「まあ、あれだ。出て来づらんだろ」

璃空

「そうか。やっぱりリニスとは、顔を会わせ難いんだな」

リニス

「フェイト……」

はやて

「ど、どごするんやっ」

なのは

「私が話してくるよ」

璃空

「ああ、頼んだ」

リニス

「なのは、宜しく願いします」

なのは

「はい！」

〜数分後〜

なのは

「お待たせ！」

はやて

「で、どごやった？」

なのは

「うん。フェイトちゃん！」

フェイト

「……………」

はやて

「あゝ、ガチガチやな」

なのは

「フェイトちゃん、頑張つて！」

フェイト

「う、うん。え、えと……。初めまして、かな？フェイト・テスト
ロッサです」

空

「よし、フェイトに「ポイントだな」

璃空

「因みに聞くけど、そのポイントは？」

空

「そんなの決まってるじゃないか。君のヒロインになるためのポイントだよ」

はやて

「なっ！？何やそれ！初めて聞いたで！」

フェイト

「……………／／／」

空

「よし、フェイトにまた「ポイント」

はやて

「な、何でや！」

空

「可愛かったからに決まっている」

全員

「……………」

空

「いやあ、何か周りの視線が痛いなあ」

璃空

「作者、貴様！」

空

「気にしない。気にしない。さてと、どうしたい、リニス？」

リニス

「フェイトと、少し話をさせてください」

空

「オツケー。まあ、リニスは此処では優遇キャラだから、大体の事は許されるよ」

はやて

「何か、どさくさに紛れて凄い事言っただな……………」

璃空

「まあ、理由は活動報告に書いた通りだから」

なのは

「フェイトちゃん。大丈夫かな……」

フェイト

「……………」

リニス

「フェイト……」

フェイト

「リ、リニス……」

リニス

「元気でしたか？プレシアに何かされませんでしたか？」

フェイト

「……………うん。平気だよ」

空（小声）

「因みに、リニスは無印のプレシアの事は知りません」

璃空（小声）

「それが一番だって」

なのは（小声）

「リニスさんがあの事を聞いたら、絶対悲しむもんね……」

はやて（小声）

「私はPT事件の事は知らないけど、フェイトちゃん、かなり苦し

んでたもんな……」

リニス

「すみません、フェイト。あの時は嘘をついてしまつて。言い訳に聞こえるかも知れませんが、貴方を悲しませたくなくなつたんです……」

フェイト

「分かつてるよ。リニスは優しいもんね」

リニス

「有難うございます。……フェイト」

フェイト

「ん？何、リニス？」

リニス

「これだけは、言わせて下さい。

私は貴方を、本当の娘の様に思っていました。

貴方が私の娘だったら、どれだけ貴方を幸せに出来たか……」

フェイト

「良いんだよ、リニス。私もリニスを、母さんの様に思ってたから」

リニス

「フェイト……」

フェイト

「ごめんね。あの時はリニスが苦しんでたのに気が付かないで……」

空

「やばい！つい、聞き入ってしまった」

璃空

「因みに、何の話か気になった方は、サウンドステージ02をお聴きください」

はやて(号泣)

「フェイトちゃん。感動したで〜」

なのは(微泣)

「うん。二人共、良かったね……」

空

「よっしゃ！フェイトも此処のレギュラーに決定！」

璃空

「俺は別に構わないけど、良いのか？没キャラ達もレギュラーなんだろう？」

空

「いや、正確に言えば、”準”レギュラーだ！」

璃空

「”準”になると、何か変わるのか？」

空

「此処での登場が、俺の気分次第になる」

近藤 刃

「ちよつと待っていてい！何だそれは！……あつ！どうも、没キャラの近藤 刃です」

璃空

「出番はまだなのに、もう来やがった……。やっぱりこいつは疲れるな……」

刃

「何か、周囲の俺に対する視線が痛いんだけど……」

御崎 葵

「それは、自分の胸に手を当てて考えなさい！どうも、没キャラの御崎 葵です！」

はやて

「何で二人は没になったんや？」

葵

「あつ！メインヒロインのはやてちゃんだ〜！可愛い〜！」

はやて

「ほほう。見る目があるやないか」

葵

「ありがとう！因みに、さっきの質問なんだけどね」

刃

「オリキャラが多過ぎるからだ」と

はやて（睨む）

「何やそれ……」

なのは（睨む）

「それは酷いよね……」

リニス（睨む）

「最悪ですね……」

空（滝汗）

「何か、さっきから妙に息苦しいな……」

なのは／はやて／リニス

「はぁ……」

空

「さて、切りも良い所で……」

璃空

「……何処がだよ！」

空

「おお！二流にしては、ナイス突っ込み！」

璃空

「まだ、そのネタ続いていたのかよ……」

はやて（輝目）

「何や、突っ込み勝負か？」

璃空

「……………」

はやて

「どつしたんや、璃空？」

璃空

「いや、何でもない……………」

はやて

「そうか？ほな、突っ込み勝負を——」

璃空

「——やらないからな!？」

はやて

「何や、乗り悪いな」

璃空

「五月蠅い!」

空

「良し!はやてに「ポイント!」

璃空

「んな!？」

はやて

「何や、普通に会話してただけやのに、儲けもんや」

空

「いやあ、二人の夫婦漫才は良かったぞ！」

璃空

「漫才何で、してね〜!!!」

吹雪

「喧しい！」

ーバキッー

璃空

「ぐはっ!？」

龍二

「ちよっ!?!何してんだよ、吹雪!璃空は一応主人公だぞ！」

吹雪

「そっか。ならば、代わりにお前が受けるか？」

龍二(滝汗)

「あ、いや。すまん……」

璃空

「裏切り者ー!!!」

吹雪

「何!もう復活しただと!？」

璃空

「よくもやりやがったな……」

吹雪

「ふん！お前が煩かったから、黙らせただけだが？」

璃空

「畜生！もう我慢ならねえ。絶対潰す！」

吹雪

「貴様には出来んさ。何も見えていない、貴様程度ではな！」

その時、再び魔王が降臨した事を、二人は気が付けなかった。

睨み合う二人の背後から、恐怖の魔王が迫る。

その足取りは、一步一步が世界を震わせ、一步を踏み出す毎に草木は枯れ落ちた。

人は言う、彼女こそが真の魔王だと……。

「天の声さん、後でお話しようね」

す、すいませんでした！！！！

「だーめ」

……………もう自棄だ！

一步一步、魔王はゆっくりと歩みを進める。

それはまるで、捕食者が恐怖に怯える獲物を楽しんでいるが如く。

空気が揺れる。

大地が悲鳴を上げる。

たった一人の、いたいけな少女。
いや、魔王の存在に……………。

世界が震撼した。

魔王なのは

「二人共、何をしているのかな？」

璃空／吹雪

「ゴクツ（息を呑む）」

魔王の放った言葉は、世界の全てを恐怖させた。

そして、魔王の存在にやっと気が付いた二人は悟る。

終わったと……………。

魔王なのは

「天の声さん共々、少し頭を冷やそうよ……………」

魔王の杖レイジングハート

「スターライト・ブレイカー”SP”」

魔王なのは

「全力全”界”、スターライト〜ブレイカー！！！！」

魔王が放った災厄の光の奔流は、世界の全てを呑み込んだ。
そして、光の奔流が過ぎ去りし時、世界を静寂が包み込む。

全員

「……………」

なのは

「ん？どうしたの、皆？」

レイジングハート

「マスター、皆さん立ちながら気絶していますよ」

なのは

「ふえ？ふええええ！？」

～数時間後～

璃空（軽い記憶喪失）

「さて、此処で一体何が起こったのかは知りませんが、さっさと進みましょう！」

はやて

「知らぬが仏ってやつやな……………」

フェイト（ガクガク）

「こ、怖かったよ～！リニス～」

リニス（ガクガク）

「すみません、フェイト。私も……………」

空

「うん。フェイトに「ポイント！」

はやて（サスペンス）

「なっ！？何やって!？」

龍二

「カオスだな……………」

璃空

「ほら、兄貴もさっさと起きて！」

吹雪

「ん？……………はっ！無事か、璃空？」

璃空

「あ、ああ。兄貴が庇ってくれたんだろ？……………ありがとな」

吹雪

「お前は俺の弟だからな。当然の事だ」

はやて（泣）

「美しきかな、兄弟愛……………」

刃

「こんなカオスな奴等が、本編に採用されたのか……………」

葵

「何か、目からソーダ水が……………」

刃

「……………お前も大概だぞ」

璃空

「そういえば、龍耶はどうした？」

龍耶

「何？」

璃空

「うわっ！？何時からそこに居た！」

龍耶

「うーん。最初からかな？」

璃空

「……………すまん。全く気が付かなかった」

龍耶

「まあね。隠れてたんだもん」

龍二

「なら、普通に出てこい！」

龍耶

「だって、普通に出て来たら暗殺が出来ないじゃないか」

刃

「ちょっと待て！何故に俺の方を見る！」

龍耶

「そりゃあ、ねえ……」

刃

「ねえ……、じゃねえー！！！！」

はやて

「おっ！上手い、座布団一枚！」

刃

「おっ！サンキュー。って、あほか！」

はやて

「ほほう。乗り突っ込みも合格点や！」

空

「おっ！ライバル登場だな、璃空」

璃空

「知るか！」

吹雪

「貴様等、いい加減にしろ！」

空

「さ、さて。最年長が怒り出したので、さっさと進めるか」

リニス

「私だけでしょうか？進めるって言う言葉を何回か聞いた気がするの？」

フェイト

「大丈夫だよ、リニス。私も聞いたから」

龍二

「んで、最初は何をやるんだ？」

空

「その質問を待ってました！」

全員（睨む）

「……………」

空

「何、これ。俺の小説なのに、なんでこんなにアウエイ？」

吹雪

「さっさと始めろ！」

空

「は、はい！！！！では、先ずは技紹介です！」

龍二

「確か、『天動流四聖八陣剣派』のーく五ノ太刀までだよな？」

空

「その通り。それ以降は、登場すらしていないので、今回は無しです」

吹雪

「それにしても、随分時間がかかったな？」

空

「すみません。全て俺の不手際です！だから、エタルドを持って近寄らないで！」

璃空

「兄貴！さつさと進めるよ！」

吹雪

「仕方が無い。今回はかりは許してやる」

空

「はあ。助かった……………」

はやて（小声&黒笑）

「明らかにあれはフラグやな。これからが楽しみや……………」

空

「何か怪しい視線を感じるんだか、気のせいか？」

はやて（眩いほどの笑顔）

「ハハハ、何言ってるんや、作者さん。ほら、はよう始めよ」

空

「分かった……………。では、『天動流四聖八陣劍派』。どうぞー！」

『天動流四聖八陣劍派』

一ノ太刀 『神騎』

心力を足に纏わせ、神速で相手に接近し、一刀する。神速は身体に多大な負担を懸けるため、長時間の使用は出来ない。尚、御神の神速はこれとは原理が異なる。近距離からではなく、中距離から使うのが理想形であり、距離を詰めた時にも有効である。

二ノ太刀 『絶覇』

刀身に心力を纏わせて放つので、どんな距離にも対応でき、牽制にも使える。心力の使い方によって、短距離で広範囲に放つたり、狭い範囲で長距離に飛ばしたり出来る。纏わせる心力の濃度により、弾速、威力の変化が可能。

三ノ太刀 『鬼刃』

心力により身体強化且つ刀身に心力を纏わせ、強力な一刀を繰り出す事が出来る。刀身に心力を高濃度に纏わせるので、『絶覇』とは違い至近距離からの一撃を繰り出す。シンプルだが、シンプル故に凡庸性が高く、敵の攻撃も弾ことが可能。

四ノ太刀 『瞬刃』

心力を刀身と腕に纏わせ、瞬速の斬撃を繰り出す。傍目からは、一刀している様に見えるが、実際には十数回斬っている。強力な上、防御にも使えるが、会得難易度が『五ノ太刀』までで最高で、身体にも多大な負担が懸かる。

リクは異例の若さで『瞬刃』を会得したという事から、瞬刃とい

う異名を持つようになった。

五ノ太刀 『絶焼』

身体と刀身に膨大な心力を纏い、強力な突貫を繰り出す。

威力では最強クラスだが、なにぶん突貫な為、使用者に大きな隙を与える。

全身に心力を纏うので、低ランクの魔法や質量攻撃なら弾く事が可能。

名前の由来は、全身に視認が可能な程の膨大な心力を纏うので、まるで使用者が炎を纏い、自身を燃やしている様に見えるという事から来ている。

はやて

「何や、微妙な説明やな」

空

「そこ！思った事を何でも口に出さない！」

璃空

「まっ、良いんじゃないか？必要と有らば、また作者が書けば良いだけだし」

空

「鬼め〜！」

璃空

「ああ？」

空

「……………」

龍一

「それにしても、かなり少ないな」

空

「まあ、六ノ太刀からは結構複雑になって来るからね」

璃空

「確かにな。以前の番外編でもやった様に、一ノ五ノ太刀は比較的単純だけど、六ノ十ノ太刀はかなり難しいからな」

空

「そうそう。だから、あれを書くとなると、今の二倍から三倍位の量になるんだよ」

はやて

「考えて無い様で、考えてるんやな」

空

「はやてさん、それは余り誉め言葉に聞こえないのですが……………」

はやて

「別に誉めてなんかあらへんで。あんたを誉めて、何の特が有るんや？」

空

「ぐはぁー！」

フェイト

「は、はやて！作者さん、倒れちゃったよ！」

はやて

「大丈夫や、フェイトちゃん。作者には、作者権限って言うものが有ってな。此処では作者は不死身なんや」

フェイト

「そうだったんだ……」

空

「いやいやいや、心配してくださいよ！」

なのは

「あっ！本当だ」

空

「なのはさん？何か珍しい物でも見るような目で、俺を見ないで下さいます？」

璃空

「実際、珍しいんだから仕方無いだろ」

リニス

「ほらほら、皆さん落ち着いて。あんまり苛めると、この先の話が無くなりますよ」

空

「それが作者権限なのだよ！」

吹雪

「ちっ！それで、次は何だ？」

リニス

「次は第一章『家族の肖像』の予告です」

璃空

「何だ、本当にやるのか……………」

空

「いやいやいや、あれだけ告知として、やらないのは不味いからね！」

刃

「まあ、俺たちには余り関係無いな」

空

「ん？いや、関係有るかも知れないぞ！」

刃

「どつという意味だよ？」

璃空

「まあ、さつきも言った通り、君達の登場は気分次第なんだ。だから、本編にゲスト出演するかもしれない」

葵

「ほ、本当に？」

空

「まあ、第一章よりも、第二章の方が可能性は高いんだけどな」

刃

「よっし！俄然やる気が出てきた」

はやて

「弱肉強食の世界やな……………」

なのは

「はやてちゃん……………」

はやて

「な、何や？何でそんな目で私を見るんや」

龍耶

「でもさ、予告なんて本当に出来るの？」

空

「大丈夫！何とかする！」

刃

「心配だな……………」

空

「では、続きまして。次章予告——」

龍耶

「——スタート！」

空

「お、俺の台詞を……………」

魔法少女リリカルなのは 黄昏の庭園

第一章「家族の肖像」

「俺は、自分自身を絶対に許せないんですよ……」

少年は絶望した。

そして、力を拒絶し、己の存在すらも拒絶した。

かつての兄の様に……。

「刀じゃなくても良いじゃないか」

そして、少年は新たな力を求めた。

己の師の意思を継ぐために……。

そして、動き出す。

新たな物語。

「これが貴方の新たな相棒」

「ヴォルケーノよ！」

そして、少年は歩き始める。

終わりの始まりを……。

「時空管理局執務官のクロノ・ハラウンだ！」

「ちっ！厄介なのが出てきたな………」

絶望を生きる少年は、壊れてしまった少年と出会う。

「僕に少しだけ力を貸して！君の、魔法の力を！」

そして、少女は運命の出会いをする。

己の人生を変える、魔法との出会いを……。

「貴方の名前は！」

「フェイト・テストロッサ」

少女は、彼と同じ目をした少女と出会った。
だが、少女の差し出した手は虚しく空を切る。

「高ランクの黒衣の魔導師？」

「はい。情報によれば、かなりの実力者だとか」

少年と少女達の物語は、此処から始まった。

「Eプロジェクトですって………」

第一章

無印編「偽りの自分」

「新しい自分を、始める為に……………」

璃空「グダグダだな」

空

「うっ！仕方無いだろ！初めてだったんだから！」

吹雪

「弁解の予知無しだな」

はやて

「なあ、無印編って何や？」

空

「ああ。これに関しては、分けようと思ってな」

フエイト

「なら、A・S編もあるんだよね？」

空

「勿論！」

龍耶

「そっちの予告は、無印編が終わってから？」

空

「そっなるな」

祝零章完結記念「牙達の晩餐会スペシャル」(後書き)

やっと、此処まで来ました。

次からは遂に無印に入ります。

今後とも、どうか宜しくお願いします。

質問、感想待ってます。

壹章無印編第0話「齒車」(前書き)

どうも〜空です！

いやぁ、お待たせして申し訳有りません。

今回の話はかなりあれだったので、書こうかかなり迷いました(笑)
因みに、今話の出来は過去最高だと思って居ります(笑)

では、

壹章無印編第0話「齒車」

始まります！

老章無印編第0話「齒車」

新曆XX年

ミッドチルダ南部

アルトセイム地方

この地方は、一年中温暖であり、多種多様な生物や植物が生息している事から、生物学者のみならず、一つの観光スポットとしても知名度は高かった。

しかし、この日はミッドチルダ周辺を記録的な豪雨が襲い、観光客はおるか、原生動物すらも活動をしていなかった。

だが、そんな大雨の中を一台の車が疾走していた。

白銀のボディを雨粒が直撃し、美しく光を放つ。それとは裏腹に、車から発せられる轟音が、かなりの急ぎであることを物語っていた。

普通、この地方では豊かな自然を考慮して、自動車等の通行を規制しているのだが、何故かこの車だけは規制の対象にはなっていないかった。

運転手は女性。

ほっそりとした体躯と、肩まで伸びた銀髪の女性で、か細い腕を駆使して、雨で言うことの聞かないハンドルを苦々しげに操作していた。

やがて、目的の場所が見えてくると、女性はホッと息を吐き、車の速度を落としていく。

女性の目的の場所には、一つの大きな家が建っており、その大きさから家主がどのような人物かが伺える。

『時の庭園』と呼ばれるその場所は、今は昔、ある研究施設で大きな事故を起こし、左遷された人物の居城と言えた。

居城と言うのは、家主である大魔導師、プレシア・テストロツサが、事故によって娘を失ったシヨックにより、そこに籠りつきりとなっているため、科学者仲間からはそう言われていた。

女性が車を停車させ、窓から建物を一望する。

先程は距離も離れていたため、全体を捉える事が出来たが、いざ迫ってみると、その大きさに圧倒される。

女性は一つ息を吐き、つい数時間前の会話を思い出した。

「早く行くんた、シズク」

科学者が纏うような、丈の長い白衣を纏った男性が、銀髪の女性、シズクにそう言う。

シズクは不安そうな顔で男性の言葉に首を振っていた。

「そんな事……。タイガさんは……」

シズクの言葉に、男性、タイガは心配ないと告げ、優しく微笑む。

「大丈夫。一度に二人が抜けたら怪しまれるだろうけど、僕一人残れば、幾らでも言い訳は出来るさ」

タイガのその笑みは、シズクの不安で一杯だった心を、暖かく解

きほぐしていった。

「Eプロジェクト。この技術なら、きっと彼女の助けになる筈だ。君がプレシアを、僕らの親友を救うんだ」

タイガは、その言葉を最後に残し、一人部屋から出ていった。

残されたシズクは、タイガの出たいったドアを、暫く見詰めていた。

「ありがとう。直ぐに戻ってくるから」

そして、タイガの想いを背負って、シズクは駆け出した。

「Eプロジェクト。」

私たちの運命を狂わせ、私たちの友人を救う物」

車の中で、女性、シズクは呟く。

その皮肉に、シズクは苦笑いを浮かべずにはいられなかった。

「でも……………。本当にこの技術で救われる人が居るの？」

そのシズクの疑問は、他に誰も居ない車内を反響する。

誰も答える筈がない。

だけど、答えが欲しい。

そんな思いを抱えながら、シズクは動き出した。

「例え、誰かが悲しむ事になっても、私達はプレシアを救いたい。それが、私達の想い」

それが例え、どんな未来を生もうとも……。

「これは……………」

シズクが辿り着いた場所。

そこはかつて、シズクとタイガがプレシアと共に研究をしていた部屋だった。

しかし、今のその部屋からは、かつての面影が微塵も感じられない。

部屋の両隣には、生体ポットが立ち並び、使われていないのか蔓が絡み付いていた。

普通なら、そんな部屋に誰かが居るとは思わないだろう。

それ程に、その室内は荒廃していた。

だが、シズクは室内を歩き続ける。

それは、部屋の奥から確かに物音がして、そこに人が居る事を物語っていたからである。

途中途中に、幾つか作動音を響かせている生体ポットがあったが、全く見向きもせず、シズクは歩みを進める。

いや、見たくもないのである。

それは、生物学者であるシズクにとって、実験用の生体ポットとは、忌々しい事この上無い存在であったからだ。

暫く歩いたシズクは、ある場所で足を止める。

否、止めざるを得なかった。

シズクが足を止めた場所。

そこには一つの生体ポットが、道の真ん中に鎮座していた。

今までなら、一瞥しただけで通り過ぎていったらう。
しかし、シズクはそのまま立ち止まり、生体ポットを見詰め続ける。
驚愕と悲しみに満ちた目で……。

「この子は……、っ!？」

生体ポットの住人である少女を見て、シズクの脳裏にある事件が
過る。

悲しみに満ちた、親友の全てを変えてしまった事件を……。

しかし、シズクがゆっくりと生体ポットに近付いていくと、それを
遮るかの様に誰かが迫ってきている事に気が付き、慌ててシズク
は隠れる。

シズクが隠れて暫くすると、一人の女性が現れた。

シズクは大きく目を見開き、懐かしさと恐怖心を抱えながら、現れ
た紫の髪の女性を見る。

その女性に、シズクは見覚えがあった。

前に会った時よりも、かなり鬘やっれており、髪もかなり伸び伸びとし
ていたが、その容姿からシズクが見紛う筈がない。

「プレシア……」

シズクは女性に聞こえない位の声で、女性の名を呟く。

だが、シズクは未だにその女性が、かの大魔導師プレシア・テスト
ロッサである事に違和感を持たざるを得なかった。

確かに、容姿は前よりも少し鬘れ気味であるが、その女性がプレシ
アである事は間違いなかった。

では、何故シズクはそう思ってしまうのか？

それは、彼女から発せられる異様な空気が、以前のプレシアとは似
ても似つかなかったからである。

シズクの記憶には、以前の心優しい彼女の姿しかない。

だが、今のプレシアからは、優しさ等欠片も感じられず、逆に恐怖しか感じられなかった。

そうやって、シズクが息を潜めて居ると、プレシアが先程の生体ポットに歩み寄り、何かを呟いている。

シズクの居る場所は、丁度稼働していた他の生体ポットの影だ。たため、稼働音のせいで、プレシアが何を言っているのかが聞き取れない。

仕方無く、シズクがその呟きを聞き取る為、少しずつプレシアに近付いていく。

「アリシア……、っ！？誰！？」

だが、もう少しで聞こえると言う所で、プレシアがシズク存在に気が付いた。

プレシアの殺気が、隠れているシズクに重くのし掛かる。

もう逃げ場はないと悟ったシズクは、このまま隠れているよりかは、大人しく出ていった方が身の為だと判断、ゆっくりとプレシアの目の前に出ていった。

「久しぶりね、プレシア」

「貴女は……、シズク」

物陰から出てきた人物が昔の親友だった事に、最初は驚いていた様だが、やがて興味を無くしたのか、プレシアは無表情でシズクを見る。

そのプレシアの眼光が余りにも冷徹過ぎた為、シズクは冷や汗を流すが、プレシアは全く気にしていなかった。

「何故、貴女が此処に居るのかしら？」

プレシアが疑問を口にするが、最早その目はアリシアしか見ていなかった。

シズクもアリシアの生体ポットを見詰める。

「その生体ポットの中の娘。アリシアよね？」

「ええ、それがどうかした？」

さも当然の様にプレシアは返すが、アリシアは十年以上前に死亡している。

そのアリシアを、生体ポットに入れ続けると言うプレシアの神経に、シズクは顔を歪める。

「子供が居ない貴女には、分からないでしょうね」

そんなシズクの様子を背中越しで感じたのか、シズクの方を見ずにプレシアは言い放つ。

「こんな事をする人の神経なんて、分かりたくもないわ」

そのプレシアの言葉にムツとしたのか、シズクは棘の有る言葉で言い返す。

暫くは二人共無言で、ピリピリと張り積めた空気が流れた。

やがて、何事も無かった様に、プレシアは無言で来た道を歩き始める。

「何処に行くの？」

「研究の続きよ」

何も言わずに立ち去ろうとするプレシアに、シズクは疑問の声を上げる。

だが、それを予期していたのか、プレシアは即答した。

二人の距離が段々と広がっていく中、もう一度、シズクはアリシアを見る。

「ごめんなさい、アリシア。貴女のお母さんを救う為なの。だから、貴方はもう、安らかに眠って……」

そして、シズクは決意を固めた。

例え、どんな未来が有ろうと迷わない。

プレシアと”アリシア”の為に、全てを背負う事を……。

「待つて、プレシア！」

一足遅く歩き出したシズクは、やや早歩きでプレシアを追い掛ける。

そして、やっと追いついた所には長机が置いてあり、机上には所狭しと、何かの書類が散らばっていた。

シズクは、その中の一枚を手にとって読んでみる。

『死者蘇生の秘術』

「な、に、これ……」

そして、他の書類にも目を通すが、どれも『死者蘇生』に関する物だった。

「まだ居たの……」

シズクが書類に書いてあった事に驚愕していると、奥の方から、プレシアが歩み寄ってきた。

シズクは、怒りの籠った目でプレシアを睨み付ける。

それは無理もなかった。

生物学者であるシズクにとって、いや、それ以外の者にとっても、

死者蘇生とは忌むべき行為。

死者への冒瀆に他なら無かった。

それを、親友が行っている。

その怒りは、プレシアに対しての怒りと、彼女を禁忌へと走らせた、自分達への怒りだった。

「それで。何の用なの？」

しかし、プレシアは、そんなシズクの様子を気にもせずに関わり掛ける。

シズクも決意を固め、プレシアに向かい合った。

「貴女の助けになりたくて来たの」

「ふんっ！貴女ほど死者への冒瀆を嫌う人が？」

プレシアはシズクの言葉を鼻で笑い、一蹴する。

そのプレシアの様子には、怒りの感情さえ混ざっていた。

『馬鹿にするな』、そう、プレシアは言いたいのである。

そんなプレシアに、シズクは感情の籠らない目で対峙した。

それはまるで、一切の感情を廃したように……。

「確かに、死者蘇生は許されざる行為。例え、どんな理由が有っても、求めてはいけない禁忌だわ」

「なら、貴女は何がしたいの？」

そのプレシアの言葉には、最早殺意さえ感じられた。これ以上邪魔をするのなら、容赦はしない。プレシアはそう言っているのである。

普通の人なら、逃げ出していただろう。だが、シズクは踏み留まった。

「だから、貴女にある技術を教えたくて来たの」

「技術？」

シズクの言葉に、プレシアは今までで一番の反応を見せる。シズクは、そんなプレシアに微笑み、懐から一つのメモリーチップを取り出した。

「このチップの中には、Eプロジェクトと呼ばれる計画が納められているわ」

それを言い終わると、シズクは近くに置かれていた機械端末を操作し、チップを差し込む。

「記憶転写クローニング技術は知ってるわよね？」

「え？……ええ」

突然のシズクの質問に、疑問符を浮かべながら、プレシアは返答する。

シズクはその返答に頷き、機械端末から、あるデータをディスプレイに表示した。

そのデータに、プレシアは驚愕する。

『記憶転写クローニング技術の復元の成功』

表示されたデータの題名には、そんな事が書かれていた。

「まさか……………。本当に？」

その余りの衝撃に、プレシアはディスプレイに掴み掛かる。

記憶転写クローニング技術。

かつて、プレシアが求め続け、しかし、成功に至らなかった技術。

その成功例のデータが表示されているのである。

それがプレシアに与えた衝撃は、凄まじい物だった。

先程の殺気を放っていた姿は消え失せ、今は牙を抜かれた猛獣のようにへたり込んでいる。

やがて、生気が戻った様にプレシアは立ち上がり、シズクを見る。

そのプレシアの目には、先程の感情は感じられ無かった。

「これを、私に？」

そのプレシアの声は震えていた。

何時もなら絶対に有り得ない事に、シズクは苦笑いを浮かべてしま

「ええ。貴女に必要なだと思ってね」

「でも、一体何故？」

その疑問は最もであった。

こんな技術を、そう易々と他人に伝えて良い筈がない。もしも、シズクの独断だけで決めてしまった事ならば、シズクの身にも危険が及ぶのである。

そのプレシアの疑問に、シズクは微笑んだ。

「心配してくれてるの？」

「そ、そりゃあ、一応旧友だから……」

シズクの悪意すら感じられる言葉に、プレシアは答え難そうに顔を背け、若干モジモジしながらも答える。

「ふふふ、ありがとう。でも、心配無いから」

「貴女の心配じゃなくて、タイガの心配をしてるのよ。どうせ、タイガも関わってるんでしょ」

プレシアの鋭い推理に、シズクは苦笑して、再び問題無いと告げる。

「確かに、タイガさんも関わってるけど、私達なら大丈夫」

「貴女は昔から、大丈夫じゃない事も大丈夫って言うから」

「そ、そうだった？」

「ええ。更に付け足すと、タイガもそうね」

完全に凶星を指され、シズクは乾いた笑みを浮かべるしかなかった。

「まあ、貴女が大丈夫って言うてるんだから、大丈夫だとは思いつど……」

「信頼してくれてるんだ」

「貴女は私に並ぶ科学者だからよ。貴女が出来ない事は、私にも出来ないわ」

「それは、自分に出来ない事は無いって言いたいのか？」

「当たり前でしょ」

二人の間には、先程のピリピリとした空気は無く、穏やかな空気が流れていた。

この二人の会話が、後のプロジェクトF誕生の切っ掛けとなる事を、まだ誰も知らない。

後書きミニコーナー

「牙達の晩餐会」

第二回「Eプロジェクト」

空「どうも。作者の空です!」

璃空「どうも。主役なのに、一度も出番の無かった璃空です」

リニス「まあまあ、今回は仕方が無いですよ。リニスです」

フェイト「フ、フェイトです」

空「そんなに落ち込まない。なのはシリーズで全話出演だったなのはにだって、最後の最後で未出演の話があったんだから」

璃空「何だよ、その裏情報は……」

空「そうか?」

リニス「二人共。先に進めないのです、そこまでにして下さい」

璃空「分かった。それにしても、どうしたんだ、フェイト?」

フェイト「あ、えっと……」

リニス「プレシアの事ですか?」

フェイト「うん……」

リニス「無理も無いですね。今回は休みますか?」

フェイト「へ、平気だよ。ありがとう、リニス」

リニス「辛くなったら、何時でも言ってくださいね」

フェイト「うん」

空「何故だろう。あの二人の会話は聞いてて止まらなくなる」

璃空「ああ。っと、さっさと先行くぞ！」

空「了解。では、リニス。今話の振り返りを」

リニス「分かりました。それにしても、今話は冒険しましたね」

璃空「確かに、あれはやり過ぎだったんじゃないか？」

空「問題無いと思う」

フェイト「でも、原作では、プロジェクトFはスカリエツティが基礎を生み出したんだよね」

空「おお、流石はフェイト執務官。その通り」

璃空「なら、今回の話はおかしくないか？」

空「大丈夫！原作設定は守ってるから」

リニス「どういう意味ですか？」

空「そこは完全にアウトなので、その質問には答えかねます」

璃空「仕方が無いな。んで、Eプロジェクトってのは、『記憶転写クローニング技術』から来てるのか？」

空「まあ、そうなるな。でも、Eプロジェクトにはかなりの欠陥があるぞ」

リニス「プロジェクトFにも有った様にですか？」

空「ああ。因みに、シズクとタイガについては、ノーコメントだ」

璃空「まあ、あの二人の正体はなあ……………」

リニス「そんな危険な人物二人を登場させるなんて……………」

空「本当、ハラハラのドキドキだよ」

璃空「こいつは……………」

空「さて、次はフェイト。どうだった？」

フェイト「うん。…………母さんにあんな過去が有ったなんて……………」

璃空「そうなるのも仕方が無いよな。んで、ミスターノープラン。何か考えが有るんだろ？」

空「ミスターノープランで…………。ああ。無けりや書かないって」

リニス「それもそうですね」

璃空「今回は此処までだな。んで、次回は？」

空「今回は……。予定では資料集めに時間が掛かるかも知れないな。後、明日から学校あるし……」

璃空「そうか。じゃあ、次回の更新は何時位になるんだ？」

空「さあ？徹夜とかすれば、何とか」

フェイト「あんまり無理し過ぎて、風邪とか引いたら元もこも無いよ」

空「注意します」

璃空「それでは、今回は此処まで！」

全員「さようなら！」

ー完ー

老章無印編第0話「歯車」(後書き)

さて、どうでしたでしょうか？

これでも、今までで最高の出来でした。

これからも精進して参ります。

では、感想お待ちしております。

第0・8話「弟子入り」（前書き）

どうも〜空です！

今現在、頭痛に悩まされています（笑）

本当に更新が遅れてすみません。

それに、遅れた割にはかなりグダグダになりました。すみません。

後、今話から璃空の表記を、カタカナに変えました。理由は、また後々の話に関わって来ると思います。

では、

第0・8話「弟子入り」

始まります！

第0・8話「弟子入り」

新暦63年。

10月8日に剣神と恐れられた御劔永理が他界し、実質的に黒い牙にはリーダーと呼べる者が存在しなくなった。

それを、危機と感じた黒い牙の重役達は、実質的黒い牙のナンバー2である、御皇玄耶にリーダー就任要請を出した。だが、玄耶はそれを断った。

元々、玄耶は御劔に共感して黒い牙に入ったのだ。御劔の居ない黒い牙等、玄耶にとっては何の意味も持たなかったのだ。

そして、玄耶は、リーダーにはリクが相応しいとした。御劔の意思を継ぐリクならば、適任だとしたのだ。

だが、まだ二桁にも満たない子供に、そんな大組織のリーダーは勤まらないと判断した重役達は、再び玄耶に就任要請を出す。

玄耶は、その要請に考え込み、やがて、条件付きでリーダーになると答えた。

玄耶の出した条件。

それは、リクが大きくなるまで、と言う事だった。

そして、御皇玄耶は、臨時で黒い牙のリーダーに就任した。

玄耶のリーダー就任から5日後の、20日。

リクは正式に玄耶の弟子となり、多彩な武術を習っていった。

新暦65年 3月

私立海鳴小学校

豊かな日の光が、春の到来を予見させ、木々のざわめきと小鳥の囀さえずりが世界に響き渡る。

まさに、世界は平和そのものだった。

そんな代わり映えのしない平和の中、リクは安らかな寝息をたてていた。

だが、その平和も、嵐の前の静けさに過ぎなかった。

「ちょっと、リク」

「ZZZ……」

「ちょっとリク、聞いている訳!」

「ZZZ……」

「はぁ……。起きなさい!」

「んわぁ! いてっ!?! ……わ、悪い、寝てたみたいだ」

話しをしても、全く反応の無いリクに、とうとう我慢の限界に達したアリサが怒鳴る。

それに、突然怒鳴られたリクは盛大に驚き、思わず足を机にぶつけてしまった。

「……何やってんのよ」

「い、いきなり大声で……いや、何でもない。それで、何の話だった?」

「はぁ……」

言い返そうと、リクはアリサを見るが、アリサの呆れたような表情にその気力を削がれてしまった。

そんなリクの様子に、アリサは何とも言えない溜め息を吐く。

「あんたがそんなんだと、私が退屈なのよ。今日はなのはもすずかも休みだから……」

「悪い。ちょっと疲れてたから……」

普段の元気が感じられないアリサに、リクは苦笑いを浮かべながら謝る。

だが、リクのその言葉に、アリサは疑惑の目を向けた。

「あんた、まだ小二でしょ？なんでそんなに疲れてんのよ」

「あ、いや。色々忙しくてな……」

リクは玄耶に弟子入りしてから、毎日の様に鍛練をしながらも、黒い牙の任務をこなしている。

これがリクの疲労の原因なのだが、そんな事を言える訳もなく、リクは言葉を濁した。

リクの明らかに何かを隠しているその様子に、アリサはリクに詰め寄る。

リクはアリサに悟られないように、アリサと視線を反らした。

その体制で、二人は暫く停滞していたが、やがてアリサの方から口を開いた。

「まあ、良いわ。それよりも、明日は暇？」

「えっ？……まあ、暇だな」

突然のアリサの言葉に、リクは疑問符を浮かべながらも答える。そのリクの答えに満足したのか、アリサは笑みを浮かべた。

「何か有ったのか？」

リクは疑問の声を上げるが、アリサは微笑みながら答えない。そんなアリサに、リクが二度目の疑問を口にしようとした時、アリサが徐に立ち上がった。

「私も明日は暇だから、あんたの家に行っても良い？」

「……………は？」

余りにも唐突過ぎる言葉に、リクは間抜けな声を上げるが、アリサは全く気にも止めずに続けた。

「なのはとすずかは絶対安静だから、明日は暇なのよ。別にお互い暇だから良いでしょ？」

「良いって……。確かにそうだが、俺の家はそんなに面白い所でもないぞ？」

「別に気にしないわよ。それに、考えてみれば、私はあんたの家には行った事無いのよね」

リクは少し考え込み、確かに、と呟いた。

「まあ、別に良いか」

「じゃあ決まりね。あつ、もうそろそろ予鈴が鳴るから、戻るわ」

アリサが歩き始めた時、丁度予鈴が鳴り響いた。

リクとアリサの約束の翌日。

リクとアリサは並んで、海鳴市の郊外の道を歩いていた。

「あんたの家つて、どんだけ遠いのよ……」

「……………」

(何時もは転移で移動してたけど、いざ歩いて帰るとなると、結構きついな…………)

アリサはリクに話し掛けるが、そのリクは別の事を考えていたので、答える事は無かった。

「ちょっと、リク？」

「……………」

「……………リク!!」

「は、はい!!」

突然の怒鳴り声に、リクは我に帰り、大声で返事をしてしまった。それには、怒鳴った本人であるアリサも、苦笑いを浮かべるしかなかった。

暫く、二人は歩いていると、大きな屋敷が見えてきた。

「あの屋敷があんたの家？」

「ああ、やつと着いたな」

リクの発言に、二人は同時に溜め息を吐いた。

「それにしても、かなり大きな屋敷ね」

歩いていく内に、どんどん屋敷の全貌が見えて来て、アリサは感嘆の声を上げた。

それもその筈、御劔邸の敷地はバニングス家よりも大きく、そこら辺一体の山が敷地であった。

その山の中に佇む一軒の屋敷が御劔邸である。

御劔邸は、全体が和風の造りであるが、一ヶ所だけ洋風の造りをしている事でも驚きだが、その全長が数百メートルあるのは圧巻である。

やがて、玄関の前まで来たリクが、玄関の扉を開ける。

開かれた扉を潜ったアリサは、再び感嘆の溜め息を吐いた。

「凄いわね……」

御劔邸の内観は、廊下は全て見事としか言えない程の板張りで、その全てがピカピカに磨かれていた。

「お帰りなさい、マスター」

アリサがそれらに見惚れていると、廊下の奥から、一人の女性が現れた。

「ただいま、フィン」

リクはその女性、フィンに挨拶し、履いていた靴を脱いで、スリッパに履き替える。

「初めまして。アリサ・バニングスです！」

初対面の相手には、好印象を持たせる為に元気に挨拶をする。

その基本を極力守りながら、アリサ挨拶をした。
そんなアリサに、フィン微笑み返した。

「此方こそ、初めまして。此処に居るリクの使用人のフィンブルと言います。」

フィンと御呼びください」

「は、はい！」

フィンから発せられる空気に、若干場の空気が和やかになり、アリサは微笑んだ。

フィンはそれに頷き、再びリクに向き直る。

「マスター、相談役が御待ちです。それと、今日は藤堂兄弟もお見えです」

「分かった。んじゃ、アリサを居間まで案内してくれるか？」

「分かりました」

フィンの返事にリクは頷き、廊下を掛けていった。

そんなリクに、アリサは疑問の目を向ける。

「マスターは、今から武術の師匠に会いに行くのですよ」

そのアリサの眼差しに気が付いたフィンが、アリサに説明する。

「武術をやってるってのは聞いていましたけど……」

「気になりますか？」

「えっと……。はい……」

暫く考えた後、答え辛そうにアリサは頷いた。

フィンはそれに微笑み、やがて歩き始めた。

「えっと……。フィンさん？」

「気になるのでしょうか？なら、着いてきてください」

フィンは一度も振り返らずにそう言い、歩き続ける。

それに、やっとフィンの意図が分かったアリサは、満面の笑みで頷いた。

(アリサさんは、確か昔にマスターが助けた少女だった筈……。まあ、二人共気付いていない様だから、此処は見守りますか……)

フィンには微笑みながら、アリスを横目で見詰めていた。

御劔邸の道場。

そこはかつて、劔神という存在が生まれ、そして死んだ場所。今其処に、御皇玄耶と藤堂兄弟の三人が正座をしていた。

暫く時間が流れた後、徐に道場の扉が開かれた。

「すみません、相談役。少し遅れました」

開かれた扉から現れたのは、立華リクだった。

リクは一礼をしてから、道場に足を踏み入れる。

玄耶は立ち上がり、藤堂兄弟もそれに倣う。

「まあ、遅れた事は気にしなくても良い。此方がいきなり呼び出したんだからな」

「……………それで、今日は鍛練は無い筈。一体何でしょうか？」

リクは疑問の声を上げるが、玄耶は微笑んだ。

そして、藤堂兄弟がリクに近付く。

「久しぶり、リク。元気だった？」

「龍耶、その質問は無いと思うぞ。

なんせ、リクは毎日相談役の鍛練を受けてたんだからな」

「ま、まあ、今回は龍二の言う通りだな。

んで、何で二人が居るんだ？確か二人共長期任務中だろ？」

リクの言う通り、藤堂兄弟は黒い牙の任務で、ある次元世界の口ストロギア密輸組織の調査を行っていた。

当初の見解では、後半は掛かると言われていたのだから、藤堂兄弟が此処に居ると言う事は、もう任務は終了したと言うことになる。

そのリクの疑問に、藤堂兄弟は一緒に苦笑いを浮かべ、龍二が玄耶の方を振り返った。

「まあ、リクのその疑問は最もだよね……………」

「簡単に説明すると、あの組織があつさりとボ口を出してな。

結構でかい組織だったんだけど、相談役も出張って来たから、直ぐに終わったんだよ」

「……………」

二人の説明を聞いたリクは、そのまま何も言えなくなり、リクの気持ちを察した藤堂兄弟も、それ以上は何も言わなかった。

リク達三人は黙り込み、玄耶は正座をしながら瞑想していた。道場内を沈黙が支配する。

しかし、その沈黙は、招かれざる客によって破られた。

「リク！！」

リクが閉めた扉が突然開き、現れた少女、アリサがリクの下に駆け寄った。

「何で来たんだよ。フィンはどうしたんだ？」

「そのフィンさんが案内してくれたのよ」

アリサの言葉を聞き、リクは扉の方を見ると、其処には笑顔のフインが居た。

その笑顔に、リクは若干冷や汗をかき、目線を反らした。

「何だ、リク。彼女か？」

「か、彼女……………」

「あほ！小二に何を期待してるんだ」

「そつだよ、兄貴。リクには、なのはって言う子が居るんだから」

「ああ、そついやそつだったな」

「なつ！？お前等何言って」

「ちよつとそれ、どういう意味よ！！」

「……………はい？」

リクが藤堂兄弟の二人の会話に、怒鳴り付けようとした時、それよりも早く、アリサが二人に怒鳴り付けた。

余りの予想外のアリサの反応に、リクは疑問の声を上げ、藤堂兄弟は揃ってアリサを見た。

そんな藤堂兄弟に、アリサは威圧感を漂わせながら歩み寄る。

だが、そんなアリサに対して、龍二だけは笑っていた。

「誰だか知らないけど、そんなに反応するって事は……………」

「なつ！？ち、違うわよ！私はただ、何でなのはの名前が出たのかを聞きたいの！」

龍二の放った言葉に、アリサは今までの様子は何処へやら、今度は顔を紅く染めながら、龍二に反論する。

「俺達はなのはと面識があるってだけだよ。しかし、そうかそうか……」

「だから、違うって言うてるでしょ!」

「まあまあ、二人共落ち着いて……」

龍二の何か色々と込められた眼差しに、アリサは更に顔を赤らめながら怒鳴る。

しかし、二人の間に何とも形容し難い空気が流れた所で、龍耶が止めに入り、場には若干の安定が戻った。

「……………」

しかし、リクだけは何かを言いたそうにしていたが、油に火を注ぐ行為に成りかねない為、其処は言い留まった。

「武術を習いたい?」

一通り場の空気が和やかになった時、突然アリサが武術を習いた
いと言いだした。

リクはおろか、未だに扉の近くに居るフィンさえもが驚いていた。

「ええ。護身の為にね」

「護身って言っても、お前にはガードとかが居るだろ？」

リクの疑問は、当然の事だった。

バニングス家の令嬢であるアリサには、これでもかと言う程のガ
ードが付いている。

まあ、そのアリサはガードが付き添う事を嫌い、ガードを付き添わ
せないのだが……。

それでも、わざわざ護身術を習うよりも、ガードを付けた方が良
いと、リクは思ったのだ。

「私はガードを付けるのが嫌なのは知ってるでしょ？」

「ああ、知ってるけど……。わざわざ習う位だったら、ガードを付
けた方が良くないじゃないか？」

「確かにそうだけど。いざとなった時に頼れるのは、やっぱり自分
だから……」

アリサの言う事にも一理はある。

確かに、そんな時が来るかもしれない。

もしも、それが現実になった時には、それはもう、手遅れなのだ。
ならば、一つでも自分の身を守る術を身に付けていても、メリッ
トは有っても、デメリットは無いのだ。

「まっ、別に良いんじゃないの？」

リクが暫く思索していると、龍二が頭の後ろで手を組みながら、そんな事を言う。

そんな龍二に、龍耶は苦笑いを浮かべ、リクは盛大に溜め息を吐いた。

「あのな、龍二。そんなに簡単な事じゃないんだよ。それに、一体誰が教えるんだ？」

「そんなん、リクが教えれば良いんじゃないか」

「……………」

さも、突然とばかりに放たれた龍二の言葉に、とうとうリクも言葉が失ってしまった。

「あっ！それ良いかもね！」

だが、そんなリクを差し置いて、龍耶は手を叩き、賛成の言葉を口にする。

当のアリサも満更でも無い様子で、笑みを浮かべていた。

「……………分かったよ。でも、そんなに教えるのは上手くないぞ？」

周りに賛成派しか居ない状況に、遂にリクは折れてしまう。

リクが折れた事により、表情には出してはいなかったが、アリサは胸中では喜んでいた。

「大丈夫だって。だって、僕と兄貴は刀しか握った事は無いけど、

リクは色々な武術を習ってるじゃない」

「そうそう。それに、相談役に教えて貰うよりも、お前が教えた方が、よっぽど安全だと思うぞ?」

「安全って……」

龍二の言葉に、聞き捨てなら無い単語が混ざっていたのに気付き、アリサは小さく呟いた。

その呟きを聞き取った龍耶が、苦笑いを浮かべながら、アリサに説明を始めた。

「相談役って言ったら、誰の事が分かる?」

「分からないけど……」

「まあ、仕方無いよね。……相談役って言うのは、彼処に座ってる人の事なんだ」

龍耶はそう言いながら、道場の端に正座をしている男性を指差した。

しかし、その男性を見て、アリサは疑問符を浮かべる。

「でも、ちょっと若すぎない?」

その男性、御皇玄耶の外見は二十代半ば位であり、アリサが疑問に思うのも無理は無かった。

そのアリサの疑問に、その場に居る全員が苦笑いを浮かべる。

「あの人は……。色々規格外なんだよ」

「意味分かんないわよ……」

リクの言葉は、逆にアリサを混乱させる事となった。

「ま、まあ、相談役の事は置いて……アリサだったか？」

「そう言えば、まだ自己紹介して無かったわね。

アリサ・バニングスよ」

「俺は藤堂兄弟の兄、龍二だ」

「僕は龍二の弟の龍耶だよ！」

「それで、一体何？」

一通り自己紹介も終わった所で、アリサが龍二に質問した。

「まあ、一概に武術って言っても、色々有るからな。因みに、俺と龍耶が刀剣術。

リクは少し前までは刀剣術だったけど、今は色々だな」

「少し前までって、どういう意味？」

アリサの当然とも言える疑問に、場の空気が固まった。

人の変化に敏感なアリサは、その空気の変化に気が付き、何か触れてはいけない事に触れてしまったのかと思い、急いで口を閉じる。

そんなアリサに、リクは一言、気にするなとだけ伝えた。

だが、それでも気落ちしているアリサに、リクは苦笑し、話を続けた。

「それで、俺は色々習ってるけど、何が良いんだ？」

リクの問いに、アリサは一考していると、アリサの脳内に昔の記憶が呼び起こされた。

また会う時迄には、その泣き虫を治しとけよ！

アリサはゆっくりと微笑み、決意を固めた。

そのアリサの表情を見て、リクも真剣な表情になる。

「刀剣術が良いわ！」

「っ！？」

それは今のリクには、一番最悪とも言える決意だったが、だが、アリサの目を見て、リクはその決意を悟った。

「分かった」

「リクっ！？」

リクの決断に、予想外だったのか、龍耶が声を上げる。

龍二も声には出してはいないが、静かに拳を握り絞めていた。

「心配無い。んで、俺は天動流って言う特殊な流派なんだが、構わないか？」

「天動流……」

アリサは眩き、昔の自分を助けてくれた少年を思い出す。そして、その少年が一瞬、リクのように思えてしまった。だが、そんな偶然は流石に無いと言う結論を出し、アリサは静かに頷いた。

「フェイト！」

次元空間の海に浮かぶ、大きな島。その場所から、女性の叫び声が響く。

「お呼びですか、母さん？」

暫くすると、先程の叫び声を上げていた紫の髪の女性の下に、一人の金髪の少女が現れた。

少女はゆつくりと、己の母の下に向かう。

「フェイト。また貴女に頼みたい事が有るわ。ある物を取ってきて欲しいの」

女性の言葉に、フェイトは頷き、懐から一枚のプレートを取り出した。

プレートは、フェイトのその様子に反応し、小さく点滅する。

フェイトはそれに微笑み、再び女性の方を向いた。すると、それを待っていたかの様に、女性は一枚の紙を取り出した。

フェイトはその紙を受け取り、書かれている文字を読んでいく。

「ロストロギア、ジュエルシード。それは母さんにとって、とっても大事な物なの。取って来てくれるわね？」

一通り読み終わったフェイトは、女性の問いに頷いた。

「母さんの為だから、当たり前だよ」

フェイトの答えに女性は頷き、後方に備え付けられた玉座に座る。

「出来るだけ多く、なるべく早くよ」

「はい！行つてきます！」

フェイトは女性に別れを告げ、歩き始めた。

だが、その別れの言葉に、帰って来る言葉は無かった……。

第0・8話「弟子入り」（後書き）

すみません。

今回は晩餐会は無しになりました。

もしかしたら、次回の晩餐会で、今回の話もするかも知れません。

では、次回の更新も何時になるか分かりませんが、どうか宜しくお願いたします。

因みに、次回は、海鳴温泉です

やっつですよ。

やっつとフェイトが本格的に登場です。

そして、戦闘。

兎に角頑張ります！

評価、感想待ってます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3083p/>

魔法少女リリカルなのは ~黄昏の庭園~

2011年10月8日11時05分発行